ポケットモンスター
POCKET MONSTERS
The Animation
VOL.1 旅立ち
小説｜首藤剛志
Takeshi Shudo
イラスト｜一石小百合
Sayuri Ichiishi
小学館スーパークエスト文庫

小説／**首藤剛志**（しゅどうたけし）

神奈川県在住。書くことが苦手なくせに19歳で脚本デビュー。以後転々。結局、今もアニメ・小説・芝居など。代表作に『戦国魔神ゴーショーグン』、『魔法のプリンセス　ミンキーモモ』など。ほかについては別の機会に。

イラスト／**一石小百合**（いちいしさゆり）

神奈川県出身。アニメ『ポケットモンスター』、『ウェディングピーチＤＸ』ほかのキャラクターデザイン、総作画監督を担当。趣味はボディーボードの水系アニメーター。株式会社ＯＬＭ所属。

SQ

装丁:大岡喜直(gorilla)

スーパークエスト文庫

SUPER QUEST
BUNKO

ポケットモンスター
THE ANIMATION

VOL.1

小説
首藤剛志
イラスト
一石小百合

小学館

もくじ

カバー・本文イラスト／一石小百合

わっ、文字がいっぱい。
ごめんなさい。少しは挿し絵があるけれど、
これは、ゲームでもない、アニメでもない、
文章のポケットモンスターなんです。

だから、すこしだけ、長い前書きなんかもあります。

ある日の夜のことです。
暗い闇の中で、ちいさく光るものがありました。
ぽん……
かすかに、空気が破裂(はれつ)するような音がしました。
そして、ある生き物が生まれました。
おなじころ、別のところでも……
ぽん……
ぽん……
ぽん……
その生き物たちは次々と生まれていきました。
その生き物たちのすがたやかたちは、それぞれちがっていました。
その生き物のなかには、今まで、私たちが知っていた生き物たちにすがたかたちが、似ているものもいました。
でも、本当は、この世界に今まで住んでいた生き物とは、まったくちがっているところがあったのです。
大昔に猿の種類から進化や枝分かれして人間が生まれたように、この世界にいた生き物は、どんな種類も、祖先にあたる生き物がいました。
でも、この生き物たちはちがっていました。
ある日の夜、突然に……

ぽん……
ぽん……
ぽん……
今、私たちが図鑑などで見て知っているそれぞれのかたちそのままで、この世界に突然現れたのです。
のちになって、その生き物たちのことを人々はポケットモンスターと呼ぶようになりました。

「なぜ？　どうして？　われわれの世界にポケットモンスターがいるのか？
そのなぞを説き明かすことは、人類のなぞを説き明かすことと同じである」

タマムシ大学携帯獣（けいたいじゅう）学部教授　オーキド・ユキナリ　著
「携帯獣研究序説」より……

〈保護者のお父さまお母さまへ〉

ポケモンの百文は一見にしかず……ということわざがあります。

ポケモンについて知るには、百の説明書を読むより、実物をひとめでも見たほうがいい。という意味ですが、あまりに古いことわざなので、みなさんが知らなくても、けっして恥ではありません。

ようするに、ポケットモンスターを見たことがない人に、文章で説明することはむずかしい……というような意味です。

しかし、この本は小説であり図鑑ではありませんので、あえて文章によってポケモンのすがたかたちをご説明いたします。

なお、その説明は世界的にもっとも権威があるOED（オックスブリッジ・英語辞書）の1997年版による「従来存在していたポケモン以外の動物」の記載をもとにしております。

たとえば、

「カメのようなポケモン」という表現は、OEDにおけるカメ……爬虫類カメ目に属する。……背面と腹面に甲羅をもち、頭と尻尾、二本ずつの手と足を甲羅の中に入れることができる動物の総称。……のような姿をしたポケモン……という意味です。

「カエルのようなポケモン」のカエルという表現は、OEDにおけるカエル……両生類無尾目に属する。……幼生は、おたまじゃくしとよばれ、川、沼などの水辺に多く住む。初夏によく鳴き、冬に冬眠する動物の総称。……のような格好をしたポケモン……という意味です。

なお……

ＯＥＤは、世界の辞書の基準とも言われている文献です。

もしも、文例のカメやカエルなど、この小説に記載されているその他の動物のなかに、ご存知のない動物があれば、お手持ちの国語辞書をごらんください。みなさまがお手持ちの国語辞書が、どこの出版社であろうと、常識的なものであれば、ＯＥＤとあまり変わらない説明がなされているはずですので、ご安心ください。

※

月に、一度ぐらいかな?

ぼくはこんな夢を見る。

目の前に、大宇宙……無数の星が広がっていて……そのいろんな星の向こうから……でっかい太陽が昇ってくる。

そして、そんなときには決まって、ズンズシーンとお腹に響く音楽が聞こえてくる。

その音、たぶん、オルガンの音かなんかだよな。

それもほら、外国の教会なんかの写真でさ、よく見るじゃない。鉄パイプのお化けを並べた、オルガンの怪獣みたいな奴。そいつが、がんがん鳴るんだ。

この音……うちのテレビや、ラジカセじゃ無理だ。この音がぼくの夢のなかで聞こえている音だとしても、ＣＤやテープで録音したものじゃない。ともかく本物の音なんだ。

ほら、びりびり、空気がふるえて、頬が、ひりひりひきつっちゃって、床やイスなんかた

ぶん、振動している。
けど、困っちゃうのは、いや、別に困りはしないけど……このメロディ、よく聞くと、耳にこびりついちゃったゲームのポケモンの音楽とおなじだったりして……でも、やっぱりどきどきしちゃうんだよね。この音楽、聞くと……これから、いよいよ、いよいよ、始まるぜ……よいしょっと！……って感じ。わかるでしょ？
おっと……音の聞こえない文章の世界で、ぼくの夢のなかで聞こえる音楽の説明なんかしてもしかたないか。
ともかく、やたらかっこよくズシーンと重い音楽つきで、めいっぱいに、大きい太陽が昇ってくるんだ。
でも、かっこいいのは、これからだ。
ほら、太陽を背にして、なにかが飛んでくる。
なにか……なんて、もったいぶった言い方はやめておく。
ぼくは、何度もこの夢を見ているんだ。
それがなんだか知らないはずはない。
きっぱり言っちゃおう。
そう、それはポケットモンスター。略してポケモン……
それも、かえんポケモン、口から高熱の炎を吐くリザードンだ。太い尻尾の先にも炎ががんがん燃えている。……とかげポケモンの一種ヒトカゲの進化系といわれているけれど、おなじ炎を吐くポケモンでも、たばこを吸う大人のライター代わりに使われるヒトカゲとはケ

タがちがうぜ。
大きな羽でキウーィンと飛べるし、吐いた炎は、ぼくの町の広場にある銅像よりでっかい岩を、あっという間に溶かしちゃう。
そのリザードンがね、まるで、たった今、太陽から生まれたばかりって感じで、ガーウィンと炎を吐きながら、こちらに向かって飛んでくるんだ。
ぼくは怖くない。熱くもないさ。だってこれ夢だから。
……おまけに、このリザードン……ぼくのリザードンなんだ。いつの間にリザードンをゲットしたかって？　いいんだ。ぼくの夢だから……。
ぼくのリザードンは、ぼくの頭の上をキウーィンと通りすぎて、ぼくの後ろに見える青い星に向かって飛んでいく。
この宇宙で、青い星っていったら、うん、もちろんぼくらの地球だよ。
リザードンは、大気圏に突入し、体中、炎の塊になって降りていく。
降りていった先は、トウキョシティ……。ぼくの町のある国の首都がいい。
亜米利加でも英吉利でも巴里でもいいんだけど、やっぱり、どうせ降りるんだったらトウキョシティ……。ぼくの町のある国の首都がいい。
トウキョタワーもあるしハリマクメッセもあるし、これはぼくの夢なんだから、リザードンの降りる場所は、ぼくの都合で、許してもらっちゃう。
でも、リザードンが、トウキョシティに降りてきたからって、怪獣のように、暴れ回るわけじゃない。
リザードンは、ゆっくりとトウキョシティのシフヤの街のほうに降りていくんだ。

目指すのは、シフヤの公園ドーリのむこう、ヨヨキの国立競技場なんだ。
たぶん、そこでは、4年に一度開かれる全世界ポケリンピックの開会式をやっている。
トウキョドームでもいいんだけれど、やっぱり、空を飛ぶリザードンには、屋根のない青い空がよく似合うよな。
国立競技場の客席は、もちろん満員だ。
上空のリザードンを見つけた観客の間で、歓声がうなる。
「リザードン！」
「リザードン！！」
「リザードン！！！」
リザードン・コールだ。
リザードンは国立競技場の聖火台に舞い降りると羽を閉じて、開会式に出場したフィールドの選手たちに、ぺこんと頭を下げる。そして、頭をきっちり聖火台に向け、火を吹きかける。
燃え上がる聖火台に炎が舞い上がって……そうさ、ぼくのリザードンは、ポケリンピック聖火の最終ランナーなんだ。
デジタルのドルビーなんて目じゃない大歓声が沸き上がる。
尻尾をくるくる巻いてバランスをとりながら、口がラッパのようにとんがっているポケモン、シードラの楽隊が、トランペットでファンファーレを吹く。
選手宣誓の始まりだ。

もちろん選手宣誓は、ぼく……力いっぱい……
「宣誓！」
ぼくは声を、限界まで出しきっちゃう。九十二ホーンだ。
「われわれ、ポケモントレーナーは、ポケモンリーグ精神にのっとり、正々堂々、戦うことを誓います……」
ポケモンリーグ精神ってなんなのか、ぼくもよくわからないけれど、これ、夢だから許してもらう。
夢だから大切なのは、ポケモン精神より……次に続くぼくのせりふさ。
「……ポケリンピック。ポケモントレーナー代表……マサラタウンのサトシ！」
マサラタウン……ぼくの町の名前。
サトシ……それが、ぼくの名前。
その名前が、ぼくの耳に確かに聞こえたら、いつ夢から覚めてもいい。

※

ポケモントレーナーとは？
サトシのパソコンの簡単辞書にはこう書かれてあります。
「公認ポケモンリーグなどのポケモン戦で戦うポケモンをあやつるトレーナーのこと。ポケモントレーナーになるためにはさまざまなルール、方法があるが、普通は野生のポケモンをモンスターボールでつかまえて、強いポケモンに育てていく。近年はトレーナー間の、ポケ

モン交換（トレード）も盛んである。

公認ポケモントレーナーになる登竜門と呼ばれるポケモンリーグの地区大会に出場するためには、その地区の公認ポケモンジムに挑戦して勝ち、その証拠のバッジを八つ集めなければならない。

くわしく知りたければ、参考文献を読むよりも、まずポケモントレーナーを目指して旅立つこと。習うより慣れろ……それがポケモンを知る早道」

では、ポケモンを引くと……

「ポケットモンスターの略」

簡単にこれだけ……

で、ポケットモンスターを引くと……。

「携帯獣……（または、携帯小獣）極端に体力が低下しているとき、カプセルに収納して携帯可能な生き物。ポケモントレーナーが操る生き物。育てれば強くなり進化し別種の携帯獣になることも可能である。種類はさまざま。育て方もさまざま。くわしく知りたければ参考文献を読むよりポケモントレーナーを目指すべし。習うより慣れろ。それがポケモンを知る早道」

さすがに簡単辞書……簡単でなんだか、よくわからない説明です。

ポケモンについて、もっと知りたければ……ともかくポケモントレーナーを目指すサトシと一緒に旅立ってみましょう。

第一章　旅立ちは、パジャマのままで。

ぼく、サトシ、十歳……
まず、きりりと、ポケモンキャップをかぶる。
右手には、手首を守るスローイング・グローブをきっちりつける。
そして、スローイング。
モンスターボールはまだないから、シャドーピッチングだ。
ポケモンをつかまえたら、この言葉を叫ぶ。
はい、ポーズ！
「ゲット！」
「ゲットだ！」
「ゲット・ユウ！」
「キミをゲット！」
サトシは鏡の前で、ポーズを作って何度もくり返す。
ポケモンをつかまえたときに叫ぶ決めぜりふだ。
どんなせりふが、どんなポーズが、ぼくにあっているのか？

使っていけないせりふなどない。
けれど、決めるときはやっぱり、かっこうよく決めたいじゃないか。
サトシは、パソコン簡単辞書でつかまえるという意味の言葉をひいた。
そして、ポケモントレーナーの間でいちばんよく使われる言葉「ゲット」を選んだ。
辞書には、ゲットについて、こんなふうに、説明されていた。
「ゲット〈古語（昔、使われた言葉）・語源……get……英語系〉……つかまえる、手に入れる。引っ掛けるの俗語。大昔は、男の子が女の子をつかまえる（モノにする）ときに使われた言葉だが、しばしば、女の子が男の子をつかまえるときにも使われ出し、二十世紀末には、ただ単に、物を手に入れる、物を買う、の意味に変化……現代、一般では使われていない。例外として、ポケットモンスター（ポケモン）トレーナーが、ポケモンをつかまえたときに使用する業界用語として残っている。
〈用例1……「クラブゲット（クラブはさわがにポケモンの一種）」または「コイキングゲット（コイキングは骨とウロコだけのさかなポケモン）」……つまらないポケモンをつかまえたこと。転じて……骨折り損のこと。用例2……「ほとんどミュウゲット（ミュウは存在未確認な伝説ポケモン）」……存在するかしないかわからないポケモンを手に入れること。転じて……信じられないほどのもうけ。したがって危険な（リスクの多い）収入。なみの苦労では手に入らないこと〉

※

「ゲット」の古い意味については、サトシはよく知らなかった。

けれど、「ゲット」がポケモンの業界でよく使われていることは常識だ。

芸能界の人たちが、挨拶（あいさつ）するときに朝昼夜かまわず使う「おはようございます」と同じくらい、ポケモントレーナーの間で使われている言葉だ。

子供のポケモンゴッコでも、回らない舌で「げっちゅだ」「げっちゅですう」の声が、ときおり聞こえる。

もう子供じゃないサトシとしては、ゴッコで使った言葉はどうかな？　とは思う……かといって、あんまり変わった言葉を叫んでも、舌がもつれて失敗したらみっともないし……とも思って。……やっぱり慣れた言葉がいいかな？……ということで……けっきょく「ゲット」に決めた。

しかし、使い慣れた言葉も、いざ、本気で使うとなると難しい。

みんながよく使うだけに、自分だけのカッコいいポーズで、「ゲット」を言ってみたい。

それから十日間というもの、ああでもないこうでもないと、ポーズを研究した。

時間があれば鏡に向かいっぱなしだった。

そして、とうとう旅立ちの日は明日までに迫っている。

※

この国は、二十世紀のニッポンによく似ているといわれるけれど、ちがうところもある。
そこらのこと、ちょっとだけ説明しておこう。
たとえば、義務教育の小学校は十歳までだ。
中学校は行きたい人が行けばいい。
法律的には、十歳までが子供で、小学校を出ると大人と同じ扱いをうける。
ここいらは二十世紀のニッポンというより、イギリス……英吉利(いぎりす)という国に似ている。
これを、「小学校卒業みんなが大人法」。略して小卒大人法(しょうそつおとなほう)という。
つまり、十歳の誕生日をむかえた次の年の四月には、……ポケモン捕獲(ほかく)の免許が取れ、ポケモンをつかまえる道具のモンスターボールを持つことが許される。ただし、ポケモン自然保護法のため、一人が持てるボールは六つまでに決められている。
もちろん大人扱いをうけるのは、ポケモンに関係することだけではない。
すべてが大人なみだ。十八歳未満お断りもないが、十四歳だから十五歳だからといって、許されることはない。たとえばコンビニから黙って物を取ってくると、怒られるだけじゃなく、警察に逮捕されてしまう。お父さんやお母さんがどんなに謝(あやま)っても、悪いことをしたら本人の責任なのだ。
この法律で、なにより大切なこと……それは、小学校を出たら、自分で自分の進路を決め

られるということだ。
　上の学校を受験してもいいし、親の仕事のあとをついでもいい。
　もちろん、好きな仕事を探してもいい。結婚だって、その気になれば、十一歳の男の子と女の子が、親の許しなしでできる。交通違反のような法律で禁じられていることさえしなければ、なにをしても、大人なみ。……ついでにいえば税金さえも大人なみだ。
　で、サトシの住むマサラタウンでは……。
　マサラタウンは小さな田舎町（いなかまち）だ。小学校を出た子が、大人なみに働こうとしても、たいした仕事はない。
　仕事がないから、ほとんどの子供たちが、ポケモントレーナーを目指して町を出ていく。
　実際、マサラタウンから出ていって、一人前のポケモントレーナーになったサトシの先輩たちもいる。
　けれど、残念なことに、マサラタウン出身のトレーナーで、新聞やテレビで毎日発表される国内ベストテンにチャートされた人はいない。
　でも、発行部数５００万を誇る子供向けの「ポケモン・コミック」や大人向けの専門誌「月刊ポケモン・トレーナー」と、そのライバル雑誌「ポケモンの友（通称ポケトモ）」には必ず月間トレーナーベストチャート１万人のリストがのっている。
　そのリストの最後のあたりに入ったトレーナーなら、マサラタウンにも何人かいた。
　そんなときは、町の新聞、週刊マサラタウンニュースの一面に、でかでかと写真がのり英雄あつかい……町中は飲めや歌えの大騒ぎ。一軒しかないスーパーでは記念バーゲン。家族

の家には、お祝いの電報や花束の山が積み上げられ、パチンコ屋の開店のような花輪がずらりと並ぶ。

百年以上昔のことだ。

この町出身のトレーナーでオーキド・マサラという男が、国内ベスト九百三十一位になったことがあった。

ベスト千以内に入ったのは、町で初めての快挙だ。オーキド・マサラは、町の英雄どころか、まるで神様あつかい。町の人々は興奮し、広場にマサラの銅像をたて、その名前にちなんで、町名を、マサラタウンに変えた。

それまでマッシロタウンと呼ばれていたのだ。

もちろん町名を変えたのは、公平な住民投票の結果だった。

ついでに選挙で、マサラタウン町長に選ばれたのもオーキド・マサラだった。

以来、オーキド家はこの町の名門となって、歴代の町長を勤めてきた。

ちなみに、ポケモン学界では有名人のオーキド・ユキナリ博士は、オーキド・マサラのやしゃご（まごのまご……まごまご）にあたり、オーキド家の正式な三男坊……長男は今のマサラタウン町長……二男はマサラタウンの郵便局長だった。

いずれにしろ、この町でビッグなるには、ポケモントレーナーとして一人前になることが、いちばん早かった。

マサラタウンの子供たちの夢のひとつは、オーキドマサラの順位以上……つまり九百三十一位以内に入り、マサラタウンの名前を、自分の名前に書き換えることだった。

……ぼくだって同じさ……この町の名をサトシタウンに変えてやる……それも、誰よりもカッコよくね……

※

サトシは、またまた鏡の前でポーズをとった。
「ゲット！」
「ゲットだ！」
「ゲットかなあ？」
……どうもうまく決まらない。
「ファッションショーにでも出るのかな？」
うしろから、あくび交じりの声がした。
「ノックぐらいしろよぉ」
ふりかえりもせず、サトシは言った。
こつんこつん。とっくに開けられているサトシの部屋のドアが、いまさらのようにノックされた。パジャマを着た母のハナコが、ドアの向こうから首を出している。
「パジャマのままのママだよ。おじゃま？　なんて、これ、だじゃれだよん」
これが、ママのセリフかよ？……ときどき、サトシは考えこんでしまう。
おまけにパジャマのままでない普段着のママはいつでもミニスカートのママだ。

またまた、ちょっと長くなるけれど、サトシのお母さんについてもお話ししなければならない。

※

え？　うるさい母親の話など、ポケモンの小説の中でまで読みたくない？　早くサトシの話を続けてくれ？……

気持ちはわかるけれども、よく考えてみれば、みんなのお母さんだって、ほんの少し前のキミたちの年ごろには、アニメやゲームに夢中だった子供時代がある。キミたちとたいして変わらない子供だったんだ。いじめもあれば、いじめっこたちもいた。なにも最初から、勉強しろ勉強しろとうるさいだけのお母さんじゃなかった。だから、そんなに嫌がらずがまんしてください。それに、サトシのお母さんのことは、これからサトシのお話しをするために、けっこう重要なことかもしれないんだ。

で、サトシのお母さんは、キミたちのお母さんとほとんど同じだけれど、少しだけちがっているところがあるかもしれない。

※

サトシのお母さんの名前はハナコという。

まだ三十歳前のハナコは、サトシの母親にはとても見えない。

もっとも、サトシが「オレの母親は、もうすぐ三十です」と人に紹介したとしたら、だま

って、ぱしーん……頭をはたかれるだろう。
そして、にっこりと、こともなげに訂正するにちがいない。
「ハナコは花の二十代……」
どうやら、ハナコはとうぶん二十代でいたいらしい。
サトシとしては、とっとと人並みのおばさんに進化して欲しいのだが、知らない人が見たら、姉と弟にしか見えないらしい。
サトシは、年中見慣れているからちっともそうは思わないのだが、他人が見ると、かなりな美人らしく、事実、十七歳のとき、マダツボミという名前のフラワーポケモンといっしょに、雑誌「ポケモンの友」新春特大号の表紙を飾ったこともあるそうだ。
そのときは、マサラタウンの町中がオーキド・マサラのポケモンチャート九百三十一位以来の大騒ぎになったらしい。
計算するとその二年後に、サトシが生まれたのだが、「あのころのわたしね。子供っぽくてなんか、や〜〜（いや）」とかいって、その記念すべき「ポケモンの友」の表紙をサトシには見せてくれない。
ハナコは、亡くなった母親のあとをついで、マサラタウンで一軒だけの、二階が宿屋（ホテル）になっている食堂、マサラハウス・ハナコを女手一人で経営している。
サトシの父親は今はいない。
サトシの父親はポケモントレーナーだった。
サトシが生まれてすぐ旅に出て、それっきり帰ってこないのだ。

聞くところによると、ハナコのお父さん……つまり、サトシのおじいさんも、ポケモントレーナーで、ハナコの小さいころ、家を出ていったきり帰ってこなかったらしい。
つまり、サトシの家の男は、みんな、ポケモントレーナーで、しかも、だれも、出ていったきり帰ってこないのだった。
で、もって、ハナコの話はいったんおいておいて、サトシに戻ろう。

※

……まいったなあ……
ポケモンゲットのポーズを母親に見られてしまったサトシは、照れ臭くて、額をぽりぽりかきながらいった。
「ママ……そんなパジャマのママで、なんかオレに用かよう？」
サトシは、パソコン通信のときや、気取ったときには、「ぼく」という言葉を使うが、いつもはオレだ。
「パジャマのママは、じゃまする気はないの……ぼうや。こんな時間になにをしてる？」
「ぼうやじゃないわい」
サトシは口をとんがらす。
「ふーん。ぼうやじゃなきゃ、なーんだ？」
二人のやりとりは、親子というより、友だち同士だ。
「オレは、明日からポケモントレーナーを目指す、オレは大人だぜい」

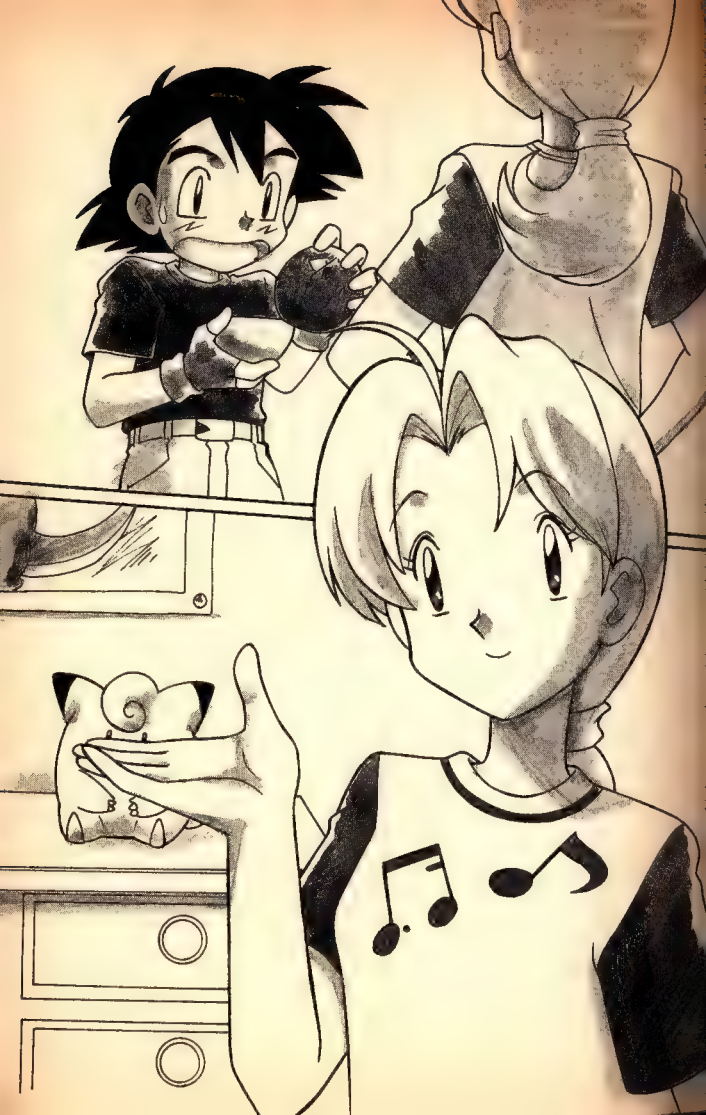
ハナコは、ぺーんと自分の額をたたいて……
「こいつは失礼いたしやした。じゃあ、大人のオレくん……今、何時だと思っているの？」
ハナコはサトシの机の目覚し時計を指さした。

※

それは、サトシの十歳の誕生日に、ハナコがプレゼントした時計だ。
ビリリダマというボールのようなポケモンの姿をまねたトラベル用の時計で、真ん中が二つに割れ、文字盤が見えるようになっている。
時間をセットすると、最初は、リリリ……起きなければビリリ……最後にはドカン！　爆発音を出すポケモングッズの人気商品だった。
高いものではないのだが、ポケモングッズは、昔から、永遠のベストセラーといわれてきた。だから、サトシの住む小さなマサラタウンではなかなか手に入らず、その時計は、ハナコが忙しいなか、大都市のタマムシシティのデパートに三日がかりで出かけていって、朝から五時間も並んで、買ったものだ。
もちろん、おなじデパートのバーゲンで、山ほど自分の洋服や靴も買いこんできたが、それはあくまでついでのことだ。
母のハナコにとって、ビリリダマ目覚し時計は、息子へのただの誕生プレゼントではなかった。
十歳をきっかけにして旅に出るサトシへの、せいいっぱいの親心を込めたつもりだった。

※

「今、何時かっていうと……」
サトシはビリリダマの目覚し時計を割って時間を見た。
「わ、もう夜の一時だ」
ハナコは肩をすくめて言った。
「そういうこと。夜の一時は大人の時間……けど、十歳の大人になりたて君が、起きてる時間じゃないわ」
「だって、明日は旅立ちだぜ」
「明日じゃないもん。夜、一時。もう旅立ちの日」
「……オレ、眠れないよ」
ハナコは、サトシの枕をぽんぽんたたきながらいった。
「そりゃ、気持ちはわかるわ。この町では十歳になればだれもがポケモントレーナーを目指す。パパもグランパ（じっちゃま）も……そしてサトシくんも……」
パパとグランパのところで、サトシの枕が、少しだけサンドバックになった。
「パパとグランパか……」
サトシは、五歳のころをふっと思い出した。

※

それは、はじめてパソコンを買ってもらった日のことだ。
真新しいパソコンを見つめながらハナコが言った。
「ちょいと息子よ、言っておきたいことがある……キミのパパとグランパは、すごーいポケモントレーナーだったんだよね」
当然、サトシはそう思いこんでいた。
「ね、ママ。教えて。パパはどんなやつ？……グランパはどんな人？」
小さなサトシが聞くたびに帰ってきたハナコの答えは決まっていた。
「キミのパパもグランパも、あのオーキド・マサラが負けちゃいそうな、シュールなトレーナー……だったりして」
「シュール？」
あまり聞かない言葉だった。
「超現実……超リアル」
「ちょーがつくんならすごいんだ」
「まあね」
ところが、パソコンが届いた日、ちょーがつくパパとグランパは、ちがうパパとグランパになった。どういうことかというと……
ハナコは、小さなサトシにぺこりと頭を下げた。

「ごめん。あれ、うそだったりして……」
ぽかんと口を開けているサトシに、ハナコは言った。
「うそ……」
「シュールなトレーナー。超現実って、現実を超えちゃって、超リアルって、リアルを超えちゃって……つまり、うそってことなんだなあ……まいったまいった」
まいったのはサトシである。
ハナコが聞いた。
「サトシがパソコンし始めるとさ、当然、パソコン通信を始めるよね……」
「うん」
サトシはうなずく。
「そうすると、当然、インターネットでポケモン関係にアクセスするよね、そんでもって、パパとグランパのこと、もっと知りたくなるよね」
「うん。だね」
「でも、わかんないと思う。たぶん」
「どうして？」
「うそだから……」
「え……」
「パパとグランパがポケモントレーナーを目指していたのはうそじゃないわ……ほんとだよ……旅に出ているっていうのも、しっかり本当……」

「うん」
「でもね……トレーナーとして一人前になれたかどうかっていうと……」
「うん」
「たぶん。うそ」
「うそ？」
「パパとグランパ、いままで、雑誌やなんかのベスト一万にのったことないよね」
「うん、いちどもない」
「でも、サトシは別に気にならないよね……ベスト一万は、その年のリーグ戦に出た人しかのらないもんね。名人のポケモンマスタークラスになると、リーグ戦なんか出てこないもん……あれに名前が出なくても、すごいトレーナーはいっぱいいる」
「うん」
「けどね、インターネットで、見られると困っちゃうものがあるの」
「インターネット？」
「うん、インターネットだと、簡単に全世界ポケモントレーナー組合の会員名簿が手に入るわ……公認のトレーナーなら、みんな入っている名簿……それってもう、死んじゃったトレーナーも入れると、十億人ぐらいのっているらしい」
「名簿？……そんなのあるの」
「あるの。でさ、……パソコンだったら、十億人いたって、名簿にパパとグランパの名前があるかどうか、簡単に調べることができるよね。だから……サトシが調べる前に言っておく

の……パパとグランパはそれに出てない」
「なぜ？」
「パパもグランパもまだ、公認されていないの。つまり、まだ、公認されるほどのトレーナーになっていないってことかな」
「ふーん」
しばらく、サトシとハナコの長い間があった。
サトシが聞いた。
「なにしてんの？　パパとグランパ」
ハナコは肩をすくめた。
「知らなーい。トレーナーを目指しているにしても、今まで名簿に名前も出ないなんて……ダメだこりゃ……だわよ」
「ダメだこりゃ……ね」
サトシは、ハナコの言葉をくりかえした。
ハナコは、しめっぽいムードは好きじゃない。
だから、できるだけさりげなく、あっさりと言った。
「けどね、サトシがダメなわけじゃないよ。これからはパパとグランパのことは気にしないでね……ってこと。トレーナーになるかならないかは、サトシ次第だもんね」
サトシは軽くつぶやいた。
「ちぇ、つまんねえの」

「つまんないよね。つまんね。ほんとにつまんね」
ハナコは、微笑んだ。
サトシが、たいしたショックを受けていないので、安心したらしい。
サトシの気持ちは、言葉どおり……「つまんねえの」という感じだった。
いつも身近にいるのならともかく、写真で見ただけのパパとグランパのことだ。
五歳のサトシにとっては、あまり迫ってこなかった。
父や祖父が立派なトレーナーであろうとなかろうと、ポケモントレーナーになりたいサトシの気持ちは変わりがない。
けれど、パソコン通信で調べたあとだったり、もっと年上になって聞いたら、ショックだったかもしれない。
あとで考えると、パパやグランパが、たいしたトレーナーではないということは、変なプレッシャーを感じずにすんでよかったと思う。
たとえば、シゲルというやつがいる。
サトシと同じ年のオーキド・シゲルだ。
広場に銅像のあるオーキド・マサラの、まごまごにあたるポケモン学者、オーキド博士のそのまたまごだ。
やたら、オーキド家の名前を鼻にかけて嫌なやつだけれど、ご先祖様が有名なだけ、本人はけっこう大変かもしれない。
おじいさんのお兄さんにあたる人が、マサラタウンの町長だというのに、この小さな小学

校では勉強が進まないといって、わざわざ隣町の小学校に、越境入学。毎日、往復二時間もかけてマサラタウンから通っていた
……えらいご先祖を持つと楽じゃないよな。
サトシはシゲルのことをときどきそう思う。
……もっとも、シゲルだって、サトシのことを……ダメなパパとグランパを持って、かわいそうな奴……だと思っているかもしれない……

※

「だけどオレはパパやグランパのようにはならないぜ」
サトシは、ハナコにガッツポーズだ。
「まあ、本人次第よね……」
ハナコは軽くいなして、ふと、思いついたように言った。
「あ、スタイルのことだけどね」
「え？　スタイル」
「ゲットなんとかってやつ」
ハナコは、サトシの練習していたポーズを大げさにまねして見せた。
「ゲットだぜいえいえいえいえいえい」
サトシは目を覆った。
「やっぱ、オレのカッコ、しっかり見てたんだ」

「これ、カッコいいと、思ってた？」ハナコが聞いた。
「……」サトシは声もない。
「だよね。こんなスタイル……ポケモンをつかまえる前から決めたってしょうがないんじゃないかな」
「ママに関係ないだろ」
「あるよ」
「なんで」
「ださいトレーナーの母親が、わたしだなんて言われたくないもん」
「都合のいいときだけ母親だもんな」
「当然です。わたしキミの母親だもん。だいたいね、スタイルだのポーズだのって人にいわれるようなカッコじゃ、まだまださまになってないよ。キミがポケモンをつかまえたときに、うれしいんだか、楽しいんだか、わっかんないけどさ……ともかくやったぜって感じで、素直な気持ちで、自然に出てくるカッコ。それが、キミにいちばん似合ったカッコだと思うわ……そんなの、実際につかまえたときじゃなきゃわかんないよ……それよりキミが決めることはほかにあるんじゃない」
「え？」
ハナコは枕をベッドに戻すと、机の上にあるパソコンのテレビボタンを押した。
「これ、いつも見ているんでしょ」
ポケモン教養講座の入門ビデオが、映った。

サトシはこのビデオを何十回も見て隅から隅まで暗記している。

いまさら、新しく勉強することはない。と、サトシは思っている。

「もう、いいよ、このビデオは」

「そう？……じゃ、わたしがお勉強しよう」

ビデオで説明しているのは、一週間は絶対洗っていないフケだらけの頭で、十日間は確実に剃っていないぶしょうひげの、一カ月は、ほとんど替えたことがなさそうなシミだらけの白衣を着た、たぶん五十年はこの世に生きているように見えるおじさんだった。

この町でオーキド・マサラの銅像の次に有名なオーキド・ユキナリ博士だ。

「知ってのとおり、小学校を出たばかりのトレーナー志望者には、ポケモントレーナー奨励奨学ポケモンとして、国のポケモン省よりポケモンを一匹、配付されることになっておる。初心者向けとしては色々なポケモンがいるが、ポケモントレーナー入門編として、最初におすすめしたいポケモンは、これからお見せするポケモン三匹のうちのどれか一匹である……」

「あらら、オーキド博士あんなこと言ってるけど……だいじょうぶ？」

ハナコがサトシに聞いた。

「わかっているよ。その三匹はね」

サトシはすらすらと三匹の名前を並べた。

「フシギダネ……生まれたときから背中に植物の種があるカエルに似た姿のポケモン……育てるのが簡単で初心者にぴったり……」

「なるほどね」

ハナコはうなずく。
「そして、口から水鉄砲を発射するカメに似たゼニガメ……最初はすこし苦労するが、あとは有利……」
「うんうん」
「もう一匹はヒトカゲ。生まれたときからしっぽに炎がともっている。二本足で歩く小さな恐竜のようなポケモン……ちがいのわかる辛口の人にはおすすめ」
「よくできました。で、君の恋人……もう、決めてるの？」
「え？」
「最初に連れていくポケモンのこと」
「あ……」
　サトシはまだ決めていなかった。
　決めていないというより、三匹のうちのどれにするか迷いに迷っていまだに決めかねていたのだ。
「内緒じゃなかったら、おせーて」
……最初に連れていくポケモンも決めていないで、ポケモンゲット練習をしていたの。ださーい。ださださ……
　と、ハナコに言われたくない。
「おせーない。企業秘密」
「そうよね。せっかく決めたポケモンを、ほかの子に先に取られちゃ困るもんね」

ハナコはさりげなくビデオの音を大きくした。
オーキド博士が、三匹のポケモンの絵が描かれたフリップを見せながら解説している。
「昨今のトレーナー志望者急増のおりから、人気の三匹は、もよりのポケモン研究所にせいぜい一匹ずつしか配給されていないことも多い。望みのものを欲しかったら当日は急ぐことだな。ただし、公平をきするために、前の日の晩から、並んで待つなんてのはなしじゃ。夜明け前に並んだ者は、受けつけけんからな」
「オーキド先生、あんなこと言ってる」
「わかってるさ」
「ママは目覚し時計になれないからね」
ハナコの朝は、いつも、サトシが寝ている暗いうちから出かけなければならない。
食堂の料理の仕込みで、隣町の市場に買い出しだ。
「だいじょうぶ。ぼくにはこれがある」
サトシは、ビリリダマの目覚し時計をベッドサイドに置いた。
「朝いちばんにセットだぜ」
「だったら、早く眠らなきゃ。あ、寝るときはパジャマね」
着替えのカゴからパジャマを取りだし、ぽーんとサトシに放った。
サトシは、受け取ってうなずいた。
「わかってるぜ」
「わかっていたら……」

ハナコは、サトシの部屋を見回した。
珍しく片付いている。
サトシの部屋がこんなに片付いているのは、暮れの大掃除でもなかったことだ。
……サトシは、ほんとうに旅に出ちゃうんだ……
この部屋で……赤ん坊のときから十歳の今まで、毎日寝ていたサトシが、明日はいなくなる。
当分、この部屋でサトシの姿を見ることはない。
父親とおなじなら、二度と戻ってこないかもしれない。
さすがにじわーっとくるものがある。
でも、ハナコは、別れに水っぽいものはきらいだ。
ケガの痛みなら、小さなトゲが指先に刺さっただけでも、大げさに泣いてみせるハナコだが、サトシの父がこの部屋から出ていったときから、別れの涙だけは人に見せた覚えがない。
「早く寝なさい……」
ハナコは、もう一度それだけ言ってあわててドアを閉めた。

※

ハナコは、目じりの涙を指ですくって肩をすくめた。
……涙かあ……わたし、まだ若いわりには、けっこう、一人前の母親らしいとこがあるのよね……なんて、わたしって、けなげな母親……思い起こせば、サトシが満十歳の今日まで、

十年と十月と十日……艱難辛苦、かんなんしんくと読むのよ……こんなんありかよといいたいぐらい……困難苦労だらけの母でした……でもなかったか。
　ここで、一人息子が旅立つ日をひかえた、ハナコの気持ちを話しておこう。

※

　とはいえ、ここから、次の※までのハナコのことは、またまた少し長くなるから、サトシの母親の気持ちなんてどうでもいいと思う人は、飛ばして読んでくれていい。けっこう、サトシの今後にかかわってくるかもしれないからだ。
　でも、がまんして読むとあとで、得をするかもしれない。けっこう、サトシの今後にかかわってくるかもしれないからだ。
　みなさんは、外に遊びに出かけるキミやゲームをしているあなたの後ろ姿を、みなさんのお母さんがどう思っているか考えたことがあるかな？
　本当はね。「くそーっ」と思っているお母さんが多い。キミが勉強しないで、遊んでいるからじゃない。お母さん自身が遊びたいのに、遊べないからだ。
　キミがゲームにおこづかいを使うたびに「このやろーっ」って思っている。本当は、キミたちが使うお金で、自分の靴や洋服を買いたいのに買えないからだ。
　あなたたちの食べる夕御飯を作りながら、「いやだいやだ」と思っている。本当は外のお店で、料理の鉄人のようなコックさんの作ったおいしいゴチソウを食べたいのだ。レストランなら、あとかたづけの面倒もない。
　キミたちのお母さんは毎日「くそーっ」とか「このやろーっ」とか「いやだいやだ」と思

いながら、お母さんという仕事をやっている。
お母さんの仕事という名の、キミたちを育てるという仕事は、あなたたちが学校や塾にいくより、大変な仕事かもしれない。
一度は、こんな見方で、キミたちのお母さんを観察してみるのも面白いかもしれない。で、ハナコの場合はどうかというと……
子育てが大変だった気分は、ハナコにはあまりない。
もちろん、楽だったとは思っていない……でもまあ、むしろ、サトシに「サンクス（ありがとう）ベビー」を言わなければならないと、たまに思うこともある。
……赤ん坊のころは、手間のかかるペットポケモンのようなものと割り切っていた……むしろ、夫に旅立たれてひとりぼっちだったハナコのなぐさめだった。
少なくとも、赤ん坊はゲームのペットのように、死んだからって簡単にリセットできないからスリルがある。なんちゃ言いすぎかな。
……三歳すぎの最初の反抗期は、
「あ、サトシ、ママに反抗、たくらんどるな」
サトシの気配に目ざとく気づいて……
「こんなに逆らう息子を持ったママは、世界一不幸な美女だわ……くしゅん、くしゅん。わーんわーん」と先に泣いてしまう。
普通なら若くて、まだ遊びたい女の人が、ひとりで働きながら子供を育てるんだから、少しだけは、不幸かなという気持ちもある。ハナコの泣きは、最初はうそ泣きでも、泣いてい

るうちにその気になり、泣きが、けっこう、リアルになる。
泣かれたサトシはあっけにとられて、反抗するどころか「ママ。げんき？　だいじょうぶ？」
と、なぐさめるしかない。
サトシが幼稚園や学校に通いだして、いじめられそうになったときは、さっさと学校の先生や、いじめっ子の父親のところにどなりこんだ。いや、いじめっ子たちの父親は、どなりこまなくても、向こうからやってきた。
なにしろ、ハナコの食堂は、マサラタウンでたった一軒の食堂なのだ。
独身の人や、夫婦げんかをして家を飛び出した男の人が、町で食事をとろうとしたら、ハナコのお店か、たった一軒あるコンビニのお弁当しかない。
ハナコの料理は、「全国秘境、何にもない町、うまい店」という本に取り上げられたこともあるほどおいしい。もしも、ハナコとけんかをして嫌われでもしたら、その名物料理が食べられなくなる。おまけに……ハナコは「ポケモンの友」の表紙になった美人だし……というわけで、マサラタウンの大人の男の人たちは、ハナコに頭が上がらなかった。
「子供はね、パパとママがしっかりしなきゃダメなんだから！　とくにパパさん！　パパさんがなめられちゃダメなんだから！　パパさんは仕事だけやっていたってダメ！　家をしっかりね！」
ハナコは、いじめっ子のお父さんたちに、ぱんぱん文句を言った。
お父さんたちは黙ってハナコの話を聞いた。

そのかわり……といってもなんだが……ハナコは、お父さんたちの奥さんたちにも気を使っていた。
サトシの十歳の誕生日まで、ハナコは男の人から、少なくとも百人以上のプロポーズを受けたが、断り続けた。男の人とのうわさ話は、ひとつふたつはあったが、本当はなにもなかった。
行方不明のサトシのパパと離婚もしなかった。
だから、この町のお母さんたちは、お父さんたちが仕事のあと、マサラハウス・ハナコに立ち寄るのを嫌がらなかった。むしろ、自分の家のお父さんが夜遅く帰ってきたときに、マサラハウス・ハナコに行っていたと聞けば、安心するほどだった。マサラタウンのお父さんたちは、ハナコにはっぱをかけられて、子供や家のことにがんばりだした。
すると、お母さんたちもうれしくなるらしい。
お父さんとお母さんがいつも機嫌がいいと、子供もなんとなく機嫌がよくなる。
で、まわりまわって、サトシはあまりいじめられなくなった。
世の中、そんなにうまくいくかどうかわからないが、少なくとも、マサラタウンの小さな学校では、サトシに限らずいじめはなくなったようだ。
いじめられなくなったサトシは、遊びが大好きでわんぱくに育った。
わんぱくすぎて困ったが、だからといって、ハナコは学校の勉強をしろとも言わなかった。
ただ、たまにつぶやくように言った。
「サトシのパパとグランパは、いまもどこかでポケモントレーナーを目指して旅をしている

んだ……いいなあ」

たまのつぶやきでも、満十歳まで聞かされればそうとうな回数だ。

サトシがポケモントレーナーを夢見るようになったのは、自然のなりゆきだった。

もっとも、ハナコのつぶやきは、パパやグランパのことを心配しているからではなかった。

ハナコ自身が、ポケモンが大好きでトレーナーになりたかったのだ。

ハナコが、マサラハウスの一人娘で、食堂をつぐ必要がなかったら、サトシのように十歳のとき、親の反対を押し切ってでもトレーナー修行の旅に出たはずだ。

ポケモントレーナーの修行は若いうちから始めたほうがいいといわれていた。

でも、十代ならまだ間に合う。

ハナコのかわりにマサラハウスをついでくれる人がいたら、その人にまかせてすぐ旅に出よう。

ハナコはあきらめていなかった。

しかし……

十八歳のある日……まだ、ハナコのママが生きているころだった。

マサラハウスに泊まった旅のポケモントレーナー志望の青年をひと目見たとたん、好きになってしまった。自分でもわけがわからないほど盛り上がって、あっという間に結婚してしまった。

ところが、あっという間に青年は旅に出て、それ以来帰ってこない。

さらに、あっという間にママが病気で亡くなり、ハナコに残されたのはマサラハウスと生

まれたばかりのサトシだった。
いまもサトシのパパ……あの青年を愛しているのかと聞かれたら……はっきりいって答えはノーだ。
ハナコのような女の人が、十年以上もほっておかれたら、いまさら、パパが現れても怒るどころか、しらけて無視するだろう。
ハナコは、サトシがポケモントレーナーを目指し旅に出る日まで、ひとりでがんばろうとした。
当然だ……と、ハナコ自身は思っている。
サトシは、ハナコが、好きで産んだ子だ。旅立つ日まで、だれにも、迷惑をかけない。責任は取るわ。
ハナコはそう決めて、ひとりでがんばり続けた……でも、夜が明ければいよいよサトシは旅立つ。
サトシと別れるさみしさもあるが、半分、わくわくどきどきしている気分もある。
……朝になればわたしは自由だ。まだ、わたしは二十代……ポケモントレーナーは無理にしても、やりたいことは、いっぱいある。
断った百人以上のプロポーズを考え直すのだって……あはは……これは、ちょっとまずいかな……るんるん。
ハナコの気分はまるで宿題のない夏休みが、明日からはじまる小学生だった。
……おっと。いけない……

ハナコはわれに返った。
サトシの旅立ちは朝。夜明けまでは、しっかりサトシの母親でいなきゃ……
ハナコは自分に「うん」とうなずいた。

※

サトシはなかなか眠れない。
パジャマもちゃんと着た。部屋の電気も消し、ベットの中でシーツを頭からかぶった。
ゲットのポーズを無理して決めるのも、やめにした。
けれど、マサラタウンのオーキド研究所で、入門ビデオが推薦（すいせん）する三匹のうち、どれをもらえばいいのか。
フシギダネ……？
ゼニガメ……？
ヒトカゲ……？
もらうつもりのポケモンが決まらない。
どれぐらいたっただろう。
うとうとしはじめたサトシの耳に、窓の外……どこか遠くから……
「ドウ……ドウ……ドドッドー」
ドードリオの朝を告げる三重唱が聞こえた気がした。
ドードリオは三つの首を持ったダチョウのようなみつごどりポケモンの名前だ。

ハナコは、ドードリオの声が聞こえるころ、市場に出かける。
外はまだうす暗い。
でも、今日のサトシには、ドードリオの声が、眠りを誘う子守歌にしか聞こえなかった。

※

サトシは夢の中でも迷っていた。
「フシギダネ、ゼニガメ、ヒトカゲ……どれにしようか」
ともかく、一つに決めなければならない。
「ええい、フシギダネ、キミに決めた！」
夢の中のサトシはモンスターボールを投げる。
「ダネーッ」としか書きようがない鳴き声でフシギダネがボールの中から飛び出す。……はずだ。
しかしモンスターボールの中からとびだしたのは「ガメガメ」声のゼニガメだった。
「あれーっ？　フシギダネじゃないの」
でも、サトシは気を取り直す。
「ゼニガメでもいい……ゼニガメ。キミでよかったんだよ。よし！　ゼニガメ、キミに決めた」
決めたとたん、ゼニガメは煙に包まれヒトカゲに姿を変える。
「カゲ？　カゲ？」ぼくはダメなの……とでも言いたげに、しっぽの炎が、たよりなさそう

に揺れる。
サトシは思わず言うしかない。
「ヒトカゲ……オレが悪かった。ほんとはキミに決めたかったんだ」
フシギダネが飛び出す。
「ダネー？」
……話がちがうんじゃねえの？　とでも言いたげに、背中の種がすねている。
「ちがわない、ちがわない。みんな欲しいんだ」
ちがうといっても、「三匹みんな欲しい」では、虫がよすぎる。
「ガメ……」「カゲー……」「ダネー……」
三匹のほうがサトシを無視して背を向ける。
……うう、こうなったら、最初からやり直しだ……
「ごわさんに願いましては……今度は、ヒトカゲ！　キミに決めた」
モンスターボールを、もう一度投げる。
ところが出てきたのはフシギダネだ。
「どうしてこうなる。フシギダネ……ええい、もう一度、ごわさんで願いましては、ゼニガメ……」
モンスターボールを投げ直す。
なぜか、今度はヒトカゲだ。
何度やっても、三匹は、思いどおりに出てこない。

「こんどこそ、こんどこそ、こんどこそ!」
サトシは、夢の中で、モンスターボールを何度も投げた。
寝ぼけたサトシはいつのまにか、枕元のビリリダマ時計を握っていた。
「こんどこそのこんどこそだーっ!」
モンスターボールを投げたつもりでビリリダマ時計を投げた。
壁にぶちあたったビリリダマ時計は、ビリリともリリリとも鳴らなくなった。
時計は一度も鳴らずに壊れてしまった。
けれど、サトシは、そんなことは気がつきもせず、夢の中でモンスターボールを投げ続けていた。

※

……カンコンキンコン。
マサラタウンの広場の鐘が鳴る。
午前九時。町のみんなが仕事を始める時間だ。
サトシは、大きなあくびをした。
……カンコンキンコンって……目覚しの音だっけ……ちがう!……
サトシは布団から跳ね起きた。
「広場の鐘だ!」
サトシは、窓のカーテンをあけた。

窓の外はすっかり朝……いいや、日の出に起きるつもりだったサトシとしては、ほとんど昼に近かった。

「なんで！　どうして」

壁の側にビリリダマ時計が転がっている。

「なんで鳴らないんだよ」

サトシは、時計を拾い上げ振ってみた。

「ひんし……ひんし……ひんし」

ビリリダマは、故障中の音を出した。

「こんなのありかよ」

サトシは、ビリリダマ時計を、パジャマのポケットに突っこむと、部屋から飛び出していった。

「……ゼニガメ、ヒトカゲ、フシギダネ、だれでもいいから待っててくれ！」

階段をかけ降りると、そこは、マサラハウス・ハナコの食堂だ。

とっくに隣町の市場から帰ってきたハナコが、開店前の掃除をしていた。

「あら、サトシ、まだいたの」

「遅刻だ。遅刻だ。遅刻だ！」

サトシは、ハナコがそこにいることに気づきもせず、パジャマのまま、食堂の入り口から飛び出していった。

「あいかわらずか……だめだこりゃ」

ハナコは肩をすくめた。
夜更かしに朝寝坊……。
旅立ちの日だというのに、いつもとちっとも変わらなかった。
「パパ……グランパ……あなたたちの子なのよね」
ハナコは、ふっと微笑んでからつぶやいた。
「わたしの子でもあるけどね……」
ハナコは掃除機で床をごりごりこすった。
いちおう、掃除は終わった。
「よっしゃ！　今日も元気でいこう」
ハナコは調理場に入ると、今日の特別昼定食の仕込みを始めた。
普通、昼というものは、お弁当やサンドイッチのような軽いものをとることに決めている人が多い。でも、ハナコの考え方はちがっていた。朝、起きて、ぼーっとしていた人たちがいよいよ働きだすのが昼過ぎだ。そのときこそ、栄養があって、それでいて、お腹がいっぱいになって眠くならない。量だけ多いというものでなく、本当にエネルギーになる昼食でなければならない。三食のなかで、いちばん大切なのは昼の食事だと信じているハナコだった。
これは、本当のことだ。
だからこそ、材料を選び、栄養の片寄りのない食事を作ろうとして、それが、この町のハナコのレストランを評判にしている理由だった。
ハナコの特別昼定食メニューについては、ここで、くわしく説明する時間がないのは残念

だ。いずれ、料理法は解説するつもりだが、保証しておきたいのは、ぜひ、給食を献立(こんだて)している人や、昼定食を作っているお店では参考にしておいてほしいメニューだ。

でも、今日のハナコは、ちょっと、気になることがあって、一生懸命、「オクラ（栄養のある野菜の一種で、ねばねばしている）」を刻んでいた包丁の手を止めた。

ハナコは、刻んだ「オクラ」の切れ端をつまんで「うまい、できはよろし……」そうつぶやくと、階段を上がって、サトシの部屋に行った。

「やっぱ、これだもんね」

サトシの旅立ちの荷物がおきっぱなしだった。

忘れ物は届けてやらなければならない。

「……やっぱりあいつには、見送りが必要かあ」

ハナコは、調理場に戻ると、今日の特別昼定食を、お弁当につめだした。

サトシのお弁当ではない。

今日、お昼にせっかく特別昼定食を食べに来るお客さんたちに、息子が忘れ物をしたために、それを届けるために外出中……、お昼は休業……お昼の特別料理はお休みですなんて……言えるはずないではないか。

※

サトシの目指すオーキド博士の研究所は、マサラタウンの外(はず)れにある。

町の広場に面した小学校だったら、いつもは壁を乗り越えてすべりこみ、先生が出席を取

っている間に机にたどり着いているサトシも、今日ばかりは、間に合いそうになかった。
パジャマつきで、全力で走っても、とうてい無理だった。

（二章に続く）

一章のふろく

（……お急ぎの方は二章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

……ポケモンに関する参考文献（ぶんけん）1……

わたしが知っていて、おそらく、みなさんが知らないだろうポケモン伝説についてお話ししましょう……

ポケットモンスター……略してポケモンが、どういう生き物なのか。
ポケモン学者が発表する意見はいろいろありますが、はっきりわかっていることはほとんどないといっていいでしょう。
これほど身近な生き物はいないはずなのに、ポケモンの種類によってはくわしい生態（せいたい）（どんな暮らしをしているか）について、ほとんどわかっていないのです。
無理もありません。

人間と何万年もつきあってきたというイヌやネコという動物ですら、本当の性質や生態がわかりだしたのは、人間の歴史上、つい最近のことです。
それまでは、イヌとオオカミは全然、別の生き物だと思われていました。
ネコとライオンが、同じネコの仲間だとはだれも信じていませんでした。
ですからポケモン……、たとえば、姿がネコに似ているニャースというポケモンが、ネコとどんな関係があるのか、まるでわかっていないのもしかたのないことなのです。
第一、あの生き物たちを、ポケットモンスター（携帯獣）と呼ぶようになったのさえ、つい最近のことです。
長い間、人間にとっての生き物はふたつしかありませんでした。
ひとつは、ウシやブタのように食べるものか、ウマのように人を乗せたりイヌのように家の番をする役に立つもの、たまにペットとしてかわいがるもの……つまり、人間のためになるもの。つまり人間の味方になるもの。もうひとつは、畑をあらす害虫や、ヒツジを襲うオオカミのように人間の敵になるもの……。
人間の歴史は、食べ物をさがして生きていくことと、戦争をすることの明け暮れでした。
ですから、人間は、長い間、生き物のことをわかろうとすらしませんでした。
その生き物が敵か？　味方か？　それだけが大切なことでした。
暮らしが少し楽になって、周りのことが気になりだし、ふと、人間以外の生き物のことに気がつきその生き物のことを知ろうとして、それが……むずかしい言葉ですが、生物学とか、動物行動学とかいう学問になったのは、人類の歴史上、つい最近のことです。

まして、ポケモンについての本格的な研究は、数世紀前に始まったばかり。
そして、マサラタウンという田舎町に住むオーキド博士という携帯獣（ポケモン）学者が、どうやらポケモンが今までわれわれが知っていた生き物と根本的にちがう動物らしいという説を発表して、学会の一部で注目されたのはほんの三十年前のことでした。
いつ、ポケモンという生き物が人間の前に現れたのか？　それとも、この世界に人間が生まれる前からポケモンがいたのか？
実は、それすら、はっきりわかっていないのです。
ポケモンの祖先がこの世に誕生したのは二百万年前だと言われています。
しかし、確かな証拠があるわけではありません。
二百万年前は、人類がこの星に誕生したと思われる時期とおなじです。
ようするに、ポケモンの発生は、人類の誕生と時をおなじくしているわけです。
人類の始まりは、二十世紀はじめまでは五十万年前の北京原人や、ジャワ原人だといわれていました。
ところが、その後アフリカでオーストラロピテクスという原人の骨が見つかりました。
その骨は、百万年前のものでした。
当然、人類のはじまりは百万年前ということになりました。
さらに今では、ラマピテクスという原人の骨など、新たな発見により二百万年前までさかのぼれるとされています。新しい発掘や発見により人類の発生した年代はどんどん古くなっているのです。最近では三百万年前などという説さえあります。

たしかに、人類の発生は二百万年前かもしれません。
発掘された骨のなかにふくまれるある種類の元素を調べると、生きていたころの年代がわかります。
しかし、それがポケモンに通用するわけではありません。
一般にもよく知られていることですが、ポケモンの体からはその元素が検出されません。
ですから時折、発見される古代のポケモン化石も、ほかの生き物の化石のように、そのポケモンが生きていた年代をはかることはできないのです。
ポケモンとほかの生き物のちがいはそれだけではありません。ポケモンは体を作っている分子構造も、ほかの生き物と少しちがうことがわかってきました。
ともかく、ポケモンは、謎だらけの生き物です。
ポケモンの始まりについては、いまのところ、わたしをふくめてどの学者も、こう説明するしかありません。
つまり……
人間が気がついたとき、もうそこにポケモンはいた。
だから、人類が誕生したころにポケモンもいたはずだ。
これは、いたはず……とか、いただろう……ということで、証拠があるわけではないのです。
考えてみれば、人間の始まりだって同じようなものです。
発見された二百万年前の骨の人類が、自分たちのことを人間だと思っていたかどうかはわ

かりません。
けっきょく、自分が人間だと気がついたとき、人間はもうそこにいたのです。
人間はよく、こんな質問をします。わたしはだれ？　ここはどこ？　わたしはここにいてもいいの？　その答えは、たぶん……あなたはそこにいる。いるんだからいなさいよ。
ポケモンも、同じように、この世界にいるんだからいるんです。
そして、たぶん、ポケモンがなぜ、この世界にいるかの謎を解くことができたなら、それは、人間がなぜ、この世界にいるのかの謎を解くことにもつながりそうです。
そんなわけで、今、ポケモンの研究は、オーキド博士のような専門の学者だけでなく、趣味で調べる人もふくめて大はやりです。

さて、前置きが長くなりすぎましたが……これからが、本題です。
それでは、名もない町のポケモン学者であるわたしが知っている、ポケモンについて……、ポケモン好きなあなたなら、耳寄りで、とっておきに珍しいお話をお聞かせいたしましょう。
この星のある地方に、あんまり人が知らない伝説が残っています。
みなさんもご存知のように、この宇宙は、ビックバンという大爆発から、始まった……。
と、いわれていますよね。
でも、その伝説によると、世界の始まる一日目は、ビックバンではないというのです。
なんとこの世界に神様がいて、世界全部を作ったというのです。
世界といっても、上と下があるだけで、真っ暗でなにも見えなかったんですね。で、とり

あえず、世界が見えるように光を作ったそうです。ところが、年中、明るいだけだと睡眠不足になるので、一日の半分は暗くすることにした。ようするに、昼と夜を作ったんですね。それが神様が一日目にしたことだそうです。

けれど、その世界は、明るい昼間でも、周りに見えるものは、なにがなんだかわからないごちゃごちゃのスープのような世界でした。その様子を、むずかしい言葉では、カオスなんて呼ぶそうです。

でも、まあ……なにがなんだかわからないんじゃ困るので、二日目……神様はそのごちゃごちゃのスープを、とりあえず空と海に分けたんだそうです。

それでも、神様は海と空だけじゃ、さみしいと思ったんですね。

今どき、どんな絵の具やクレヨンだって、最低、十二色。虹だって七色あるっていいますものね。

海と空だけじゃ、使う色は青だけですんでしまいます。

これはさみしいですよ。

だから、三日目……。神様は、海の上に陸を作りました。陸の茶色だけではやっぱりつまらないから、緑を使いたいなって……、陸の上に、草や木。林や森。つまり、植物を作ったんですね。

でもって四日目……、こんどは神様、空がさみしいな……と思ったらしい。そこで、昼間の空に太陽を作り、夜の空にはお星様や月を作っちゃいました。

ここいらの神様の気持ちって、初めてクレヨンや色鉛筆を持った子供のような気分かな？

……わかるような気がしますよね。
けれど、そんな世界を見ていると、今度は動くものが欲しくなったんです。よく気をつければ、海の波とか、風にそよぐ木の葉っぱとか、けっこう、動いているものもあったんですけれど……。なんだか、静かすぎるんですよね。神様は、もっとにぎやかに、動くものが見たくなりました。
　壁の絵のような、じっとした景色より、アニメのようにちゃかちゃか動いているほうが楽しいですもんね。
　そこで、五日目……鳥を作り空に飛ばせ、魚を作り海に泳がせたんです。
　じゃあ、トンボやセミなんかの昆虫は?、貝やイカやタコはどうしたの? イルカやクジラは魚なの?
　え? あのう……これは、伝説、いい伝えなんだから……細かいことは言わないで……。
　ともかく、五日目、神様は空と海に住む動物を作ったんです。
　で、六日目……今度は陸地にいろいろな動物を作った。
　ところが、ふと、神様は気がつきました。いい気になって、空や海や陸に生き物を作ったけれど、あんまりいっぱい作りすぎたんじゃないか……って。
　生き物たちが、この狭い世界を取り合ってけんかになったら大変だ。
　そこで、けっこうきまぐれな神様は、ほかの生き物たちになんの相談もせずに、自分の姿に似せた生き物を作っちゃったんです。
　それが人間だったんです。

かたちだけでも神様に似た人間に、この世界の生き物たちの世話をさせれば、うまくいくだろうと思ったんですよね。
神様は人間に言いました。
「この世界にあるすべての生き物を支配せよ」
そして、生き物たちにも言いました。
「おまえたちの支配者は人間だ」
ほかの生き物たちが、不平不満を言ったかどうかは、伝説に残っていません。
人間の間で語りつがれてきた伝説だから、人間に都合の悪い部分はカットされてもしかたないのかもしれません。
どっちにしても……
人間という生き物が、ほかの生き物の面倒をみるどころか、同じ人間同士でさえけんかや戦争をする気まぐれな生き物だとは、さすがの神様も思わなかったらしいのです。
さて七日目……この世界をすべて作り終えた神様は、お休みをとることにしました。
これが、今でいう日曜日ですね。
でも、この神様、よっぽど生き物作りがお好きだったらしいんです。
お休みだというのに、この世界に落書きでもするような気分で、新しい生き物を作ってしまったのだそうです。
普通ならお休みの日に、生まれた生き物……
予定外に作られ、神様に「人間が支配しろ」とも「人間に支配されろ」とも言われていな

い生き物……。

その生き物が、ポケットモンスターだというのです。

もっとも、この伝説。さきほどもいいましたが、めったに聞くことのない伝説で、知っている人はほとんどいないでしょう。

もしかしたら、この伝説を知っているのは、この文を書いているわたしと、この文を読んでいるあなただけかもしれません。

実は、この通信を送っているわたしも、この伝説を信用していいものかどうか……いまだに決めかねています。

ですから、あなたも、ほかの人にあまり気楽にこの話をせず、そっと胸の中にしまっておいてください。

……オーキド博士とはなんの関係のない、名もないポケモン研究家……

第九十七回全世界携帯獣学会に参加したポケモンアナリスト（分析家）ソネザキマサキに送られたインターネット・メールよりばっすい

第二章　しびれる出会いはピカチュウと……

サトシの旅立ちを語るためには、オーキド博士についても知らなければならないことがある。長くはなるが、オーキド博士について最小限のことを書かねばならない。
もちろん、次の※まで、飛ばしてもよいが、あとでわからないことが出てきて困っても、当方はいっさい関知いたしませんので、そこのところをよろしくお願いします。
オーキド博士の名前は、ポケモン学会でよく知られた名前だ。
著書「携帯獣研究序説」の中で「ポケモンはこの星のほかのどんな生物ともちがう生き物である」という説を発表して、学会の注目を浴びたのはオーキド博士が二十歳のときだ。
その研究成果を認められ、二十五歳でタマムシ大学携帯獣学部名誉教授になるという異例の出世をした。
だが、あとは、たいした学術発表もせず、なぜか、三十代になると、ふるさとのマサラタウンの小さなポケモン研究所に引きこもった。
その原因は、ポケモン研究にいきづまったためとか、当時、監修したポケモンの映画でポケモンを演じた女優さんに失恋したためだとか、いろいろいわれているが、本当の理由は謎である。

ポケモンは、ポケモン自体も、ポケモン研究者も謎が多い。

考えてみれば、サトシの父も祖父も、ポケモントレーナーを目指しながら、いまだに、トレーナー組合の名簿にのっていないのも謎だ。石の上にも三年……という言葉があるが、どんなに才能のないトレーナー志望者でも、十年も続ければ組合の名簿の隅に名前ぐらいはのるはずである。会費が払えなければ、無料の準組合員という制度もあるのだ。

……ともかく、ポケモン関係は謎が多い。

しかし、ここは、オーキド博士について話しを続けよう。

オーキド博士は、マサラタウンに戻って以来、二十年以上、自分なりのポケモン研究を続けているという。

どうして、そんな仙人のような暮らしができるかというと、タマムシ大学の名誉教授としてまだ給料をもらっているらしいとか……二十年前にポケモントレーナー志望の人たちのために書いた参考書で、「オーキドのポケ参」とよばれる、みなさんのパパやママも一度は目を通したことがあるという参考書の古典「チャート式、現代ポケモン必勝法」が、相変わらずベストセラーを続けているからだとか……噂はいろいろある。

サトシも、夜遅くになってマサラハウス・ハナコに夜食を食べに来るオーキド博士の姿を見たことがある。

いつも、サトシが寝る時間まぎわなので、それほど話したことはないのだが、ハナコの評判料理があるのに、なぜかふりかけのおちゃづけとレトルトのカレーしか注文せず、食堂の隅で、本を読みながら黙って食べている変なおじさんだった。

「ほんと変わってる。ふりかけとカレーなら、コンビニで売っているのにね」
夜の食堂は忙しい。ハナコは、そんなオーキド博士のことを気にすることもなかったようだ。
オーキド博士がどんな人であろうと、この町の公認ポケモン研究所はひとつだ。
それが、オーキドポケモン研究所。トレーナー修行に連れていく最初のポケモンは、オーキド博士のところでもらわなくてはならない。

※

「待っててくれ、ゼニガメ、ヒトカゲ、フシギダネ！」
サトシは、オーキド研究所に向かって走って、走って、走って、走り続けた。
オーキド研究所の前は、なぜか、黒山の人だかりだ。
鐘（かね）やタイコの音が騒がしい。
サトシは、人ごみをかき分けて進んだ。
「どいて、どいて、どいてくれー！　オレは研究所に行くんだ！」
やっと人の波をこえたと思ったら、ぐおつーん！　たった今、研究所から出てきた男の子と正面衝突だ。
「いててて」
サトシはころがって、真っ赤になった鼻を押さえた。
「いたいのはこっちだ」

ぶつかった相手が言った。
「うん？　おまえサトシだな。はいはいサトーシさんだね。だいじょうぶかい？」
相手は、手をさしのべて、サトシを立ち上がらせた。
「アーユーウオールライト？」
わざわざ英語で、だいじょうぶの意味をくりかえす。
キザなやつだ。
思わずそいつの名前をサトシはつぶやいた。
「シゲル……」
「ぼくはシゲル君だよ。くんを付けて呼んでくれたまえ。で、サトシ君、キミもぼくを見送りに来てくれたのかい？」
オーキド・シゲル。
マサラタウンの町長の親戚にして、オーキド博士の孫。そして、サトシとおなじ年。シゲルも今日が旅立ちの日だった。
しかし、ポケモン修行の旅立ちにしてはドハデだ。なにしろ、ひらひらのシャツにタキシード、ごていねいに胸にはカトレアの花をさしている。まるで、どこかの王室のおぼっちゃまのような格好だ。
もっとも人の格好は言えない。サトシはパジャマのままだ。
「お前の見送りだと？　じょうだんじゃない」
サトシは、言いかえした。

シゲルは、今さら、気がついたという感じでうなずいた。
「え？　あ、そうか、キミも、ポケモン修行の旅に出るんだったね」
「あたりまえだい。お前とおなじ年だもん」
「しかし、旅立ちの今日、遅刻するようじゃぼくのライバルとして……」
シゲルはサトシを指さした。
「すでにキミは失格している」
「シゲルくん」
サトシはむかーっとしつつも、シゲルをくんづけで呼んだ。
「はい？　なんですか？　サトシくん」
もともと嫌みなやつだが、返事がいいから、なおさら嫌みだ。
サトシは、いちばん気にしていることをきいた。
「もう最初のポケモンはもらったの？」
「当然だよ。このモンスターボールの中にいる」
シゲルはモンスターボールを指先でたかくかかげて見送りの人たちに見せた。
シゲルの指先でモンスターボールがくるくる回る。
黒山の人だかりは歓声をあげた。
どうやら、シゲルを見送りに来た人たちらしい。
「いいぞいいぞシゲル。がんばれがんばれシゲル」
ぼんぼんを持ったチアガールや、ブラスバンドまでいる。

見送りの応援団がいっぱいである。
シゲルは手を振って答える。
「ありがとう。友よ、ガールフレンドよ。わたしは、きっと超一流のポケモントレーナーになって、この町、マサラタウンの名前を世界中に広めてみせる」
「いいぞいいぞシゲル。がんばれがんばれシゲル」
チアガールの声に、歓声がもりあがる。
「お取りこみ中、わるいけど……シゲルくん」
サトシは、シゲルにささやいた。
「はい？」
シゲルは、ほんとうにお返事がいい。
「シゲルはどんなポケモンもらったんだ」
シゲルは、にっこり笑った。
「キミに言う義理はないね。ま、ぼくはポケモン研究家オーキド博士の孫だからね」
オーキド研究所の表札の前に立ち、見送りの人たちにVサインをした。
カメラのフラッシュがいくつも光る。たぶん、マサラタウンニュースの記者がいたのだろう。
シゲルは、フラッシュに向かって叫んだ。
「おじいさまの名にかけて、それなりのポケモンはもらったぜい！」
シゲルの指先でモンスターボールが回る、回る。くるくる回る。

……ちえ、こいつ、そうとう練習したな……
サトシは正直、クヤシかった。
シゲルは、そんなサトシをまったく無視して、見送りの人々に宣言する。
「見送りのみなさまごくろうさまです。オーキド・シゲル。ただいまよりポケモントレーナーの修行に行ってまいります。今度、この町に戻ってくるときは、おじいさまのおじいさまのおじいさま、オーキド・マサラの名前の付いたこの町の名をシゲルタウンに変える日です」
「きゃー素敵!」
チアガールが興奮する。
……だいたいあんな女の子、この町のいったいどこにいたんだ……
サトシは首をひねった。
サトシが知らないはずである。
シゲルのおじいさんのお兄さんのマサラタウン町長が、いつも選挙のときにたのむ隣町のキャンペーンガール会社でやとったアルバイトの中高生たちなのだ。
その町長が、マイクを持って出てきた。
「では、マサラタウン市民諸君、わが一族オーキド・シゲル君の前途を祝して、町外れまで、見送りじゃ」
見送りのブラスバンドがどんちゃんがんちゃん。
シゲルは、手を振りながら、運転手付きのオープンカーに乗りこむ。
町長がマイクで、わざとらしくシゲルに話しかける。

「シゲル、忘れ物はないな。弁当は持ったな」
「はい、お弁当は持ったし、乗っていく車も、外国製。独逸のわたしのベントです」
だじゃれのつもりである。
……くだらねえ……サトシはげんなりだ。
それでも、見送りはみんな、わらった。
シゲルのわざとらしいだじゃれも、チアガールやブラスバンドで、盛り上がっていると、見送りの爆笑を誘うから不思議だ。
「ぼくのおしゃれが受けましたね。ありがとう。みなさま、応援ごくろうさまです」
ぼん！
シゲルを乗せた車は、サトシにめいっぱい排気ガスを吹きかけて発車した。
ガスにむせてせきこんだサトシがわれに返ると、あれだけ大勢いた、見送りは、影も形もなく、残っているのはサトシとからっ風だけだった。
サトシの握りしめた拳がわなわな……。
「負けるもんか」
握りしめた拳を握り直す。
「シゲル……オレのライバル」
と、サトシの後ろから、ため息まじりの声がした。
「はあ……まあ、シゲルは期待される人間像というやつだ。だが、えてしてああいうのが大人になると悪いことをする……気をつけねばなあ……」

フケだらけの髪をぼりぼりかきながら、オーキド博士が立っていた。
サトシは、博士にあわてて聞いた。
「オーキド博士、ぼ、ぼくのポケモンは……」
「あん？　ぼうやもポケモンの修行に……そういえば、今日の予定は4人ときいていたが……ぼうや。タキシードで旅に出るシゲルもそうとうなもんじゃが、ぼうやはパジャマで修行に行くのかな」
……パジャマの話は、このさいはジャマ。ぼやぼやして遅刻はしたけど、ぼくは、ぼうやじゃない……なんて……おっと、昨夜のママのように、だじゃれをやっているとますます遅れる。
「ともかく、ぼくにもポケモンを……」
「そじゃったな……こちゃこい」
オーキド博士は、研究所にサトシを入れてくれた。

※

「ポケモンはあのカプセルに入っておったんじゃがね」
オーキド博士に通された研究室の実験台の上には、三つのカプセルが置いてあった。
「ぼくのポケモン……」
サトシは、実験台に駆け寄った。
カプセルは半透明で、中は見えないがラベルが貼ってあり、それぞれになにが入っている

のかはわかる。
　サトシは三つ並んだカプセルのラベルをまじまじと見て、つばをのみこんだ。
　ゼニガメ、フシギダネ、ヒトカゲ……
　ラベルはサトシが夢に見た三匹だ。
　サトシは、オーキド博士に言った。
「ぼく、ずーっと迷っていたけど。もう、決めました」
「で、なにに？」オーキド博士が聞き返した。
「ゼニガメ。オレのポケモンはキミに決めた」
「じゃ、まあ、開けてみてみ」オーキド博士が言った。
「いいんですね」
　サトシは、わくわくしながらカプセルを開けた。
「あれー？」
　いなかった。
「それは、遅刻しなかった子が持っていった」博士が言った。
「うう……悪いのは遅刻したぼくだ」
　サトシは気を取り直す。
「ならばフシギダネ、キミこそぼくのポケモンだ」
　フシギダネのカプセルを開ける。空だ。
「ない……フシギダネ……」

「不思議はない。それも時間どおりに来た子が持っていった」
「そか、……いいや、ぼくが選ぶのは……ヒトカゲ、キミこそ、ぼくの選んだポケモンだ」
が、最後のカプセルにも、ヒトカゲはおろか、なにも見えなかった。
「そんなあ」
「通勤電車もポケモンも一歩の遅れが人生を変える。これは真理じゃなあ。今日、ここへは、すでに三人のトレーナー志望が、やって来た。ワシがおすすめのポケモンは三匹……3ひく3は、みんななくなり答えはゼロ……なっとく、なっとく」
オーキド博士は大きくうなずいた。
「勝手になっとくしないでください、ゼロっ……てオレはポケモンなしで、旅に出るんですか」
「もう一匹、いるにはいるのじゃが……」
オーキド博士は、実験室の奥の戸棚の中から別のカプセルを出した。
「あるところにはあるんじゃないですか。それをください」
オーキド博士は渋い顔をした。
「この残りポケモンには、ちと、問題があってな」
「問題は……オレが遅刻したことにも……問題があります」
「ま、問題はいずれ解決せねばならんよな」
サトシはオーキド博士の持ったカプセルをさして、決めつけた。
「なら、ぼくの答えはそれです」

「奈良なら東大。こうふく寺……」オーキド博士はつぶやいた。
「え？」サトシは首をひねった。なにを言っているのかわけがわからない。
「降伏ならお手上げだが、幸福時はしあわせなときという意味もある。幸せならお手上げでも手をたたこう。幸せならどんな苦労もがまんができるというわけか……なるほど、そりゃ真理じゃ。なっとく、なっとく」
「はあ……」
オーキド博士という人は、ほかの人にはわけのわからない理屈のつながりで、自分で勝手になっとくしてしまう人らしい。
考えてみれば、ハナコの食堂にオーキド博士はよく来るくせに、サトシはまともに話したことがない。
だが、話したところで、まともな話になりそうもない気がした。
「というわけで、これで、がまんじゃな」オーキド博士が言った。
どういうわけかしらないが、サトシはなにがなんでもポケモンを手に入れたい。
「がまんでもなんでもします」
「そか」
オーキド博士はカプセルを実験台の上に置いた。
ラベルは貼っていない。
「なにが入っているの？」
「まあ見てみることじゃや」

サトシがカプセルに手を触れると中がかすかに光った。
「ピカ……」
そんな鳴き声がした。
その声を文字にすると、ピカとしか書きようがないだろう。
「ぴか？」サトシはその声をまねながら、カプセルを開けた。
「チュウ……」
カプセルの中から恥ずかしそうにうつむいたポケモンが現れた。
全体はずんぐりとしている。
色は黄色。よく見れば背中に茶色の縞(しま)があり、耳の先が黒いが、ほとんど気にならず全体が黄色の印象は変わらない。
毛足の短いやわらかそうな毛で全身がおおわれていて、まるでヌイグルミ。小さな子供でも抱けそうな大きさで、ぎゅっと抱きしめると気持ちがよさそうだ。
「ピカチュウというポケモンじゃ。これでがまんできるかな？」オーキド博士が言った。
「わあ……がまんって……かわいい。最高じゃないですか」
「そかな」
「そうですよ、ピカチュウ。よろしく」
サトシは両手でピカチュウを持ち上げた。
「ピカッ！」
……気安くさわるな！……

明らかに怒った表情でピカチュウが鳴いた。
そのとたん。
ピカチュウから発射された強烈な電流が、サトシの体をかけ回った。
電気にしびれるというより、心臓からツメの先まで、体中が粒立ってはじけている感じだ。
「こここここれって」
ピカチュウから手から放そうにも、体が震えて、自由に動けない。
オーキド博士は、ピカチュウの頬の辺りにあるほくろのようなものを虫眼鏡でのぞいた。
「ピカチュウの電気袋のようすをみると、十分充電はできているようじゃな」
ほくろのようなもののようすで、ピカチュウの、充電度がわかるらしい。
「じゅ、じゅ、じゅう分しびれてます」
「そりゃ、そうじゃろう。ピカチュウの別名は、電気ネズミといってな、とくに、そのピカチュウは恥ずかしがりやで人に慣れにくく、下手にさわるとそうなるんじゃ」
「そそそれ、先に言ってよ」
体を震わせながらぼやくサトシの髪の毛からは、細かく火花まで飛んでいる。
オーキド博士は、人のことは気にしないというか、気にならないタイプのようだ。
「そうかね、先に行くかね」
サトシのビリビリ度などちっとも気にせずに、実験台の引きだしを開けた。
そして、サトシが夢にまで見ていた物を二つ取りだした。
「ならばこれが旅のおせんべつ……ポケモンを入れておくモンスターボールとポケモン図鑑

じゃ」
ポケモン図鑑は、表紙を開くと液晶画面がある電子手帳のようなものである。……ちょうどみなさんがお読みになっているこの本と同じ大きさ、同じ厚みぐらいです……
オーキド博士がサトシにポケモン図鑑を手渡したとたん……
サトシの体を通して、ピカチュウの電気がびりりりときた。
「なるほど、こりゃ、けっこう、きてるなあああああ」
「そそそうとう、きてますすすす」
二人はつながったまま、二分間はしびれ続けていた。
やがて……
サトシの髪は火花だけですんでいたが、オーキド博士の逆立った髪からは、煙が出だした。
電気の火花が、フケに引火したのだ。
このままでは、オーキド博士の頭は、火事ではげやまだ。
「ピカチュウうう……エネルギーのムダはははは……よくないと思うのだがああ」
もつれっぱなしの舌で、オーキド博士がピカチュウに言った。
オーキド博士の声を聞いて、ピカチュウは放電をやめた。
「これを連れていくんですかあ」
ぼろぼろになったパジャマのサトシは、黒コゲ白衣のオーキド博士に聞いた。
「ほかには残っていない。ただ、ピカチュウという種類の名誉のために言っておくが、本来ピカチュウという種類は、人間によく慣れるやさしい性格のポケモンじゃ。ワシも何匹か、

ペットにしていて、停電のときなど、電池代わりに重宝している」
「そっちをください」すかさず、サトシが言った。
「大切なペットを人にやれるか」オーキド博士の答えは冷たい。
「あ……そう」サトシは肩をすくめた。
「ともかく、そのピカチュウは、ちょっと性格が変わっとる」
サトシは、感電しないように気をつけながら、ピカチュウの顔をのぞきこんだ。
「性格ゆがんでるわけ？……おまえ」
ピカチュウは、ぷいっと横を向いた。
「どんなポケモンにも例外がいる。ま、少し変わっているほうが育てがいがあるかもしれん」
オーキド博士は人ごとのように言った。
「そうか、そうだよね」
サトシは、ピカチュウを見つめた。
よく見れば、いや、よく見なくても、かわいいものはかわいい。
サトシは、何事もいいほうに考えるタイプだ。
「オレ用の特別なピカチュウと思えばいいんだ」
「どう思おうと、これしか残っとらん」
「よし！」
サトシはピカチュウを指さして叫んだ。

「ピカチュウ、お前に決めた」
ピカチュウは横を向いたままだ。
「で、名前はどうするのかね」オーキド博士が聞いた。
「え？」
「ピカチュウは種類の名前だ。ぼうやは、人間の友だちの名を呼ぶときに人間なんて呼ぶのかね」
そんなことはわかっている。サトシも決めていた。
……ゼニガメだったら、ぜにぼう。フシギダネだったら、だねすけ。ヒトカゲだったら、かげたろう。……母のハナコが聞いたら、センスを疑われ、暑くなって、うちわでぱたぱたはたかれるかもしれないが……。
しかし、連れていくのがピカチュウだったとは、サトシにとってまったく予定外だ。
「えーっと、名前は……そうだ！　ぴかぼう……ぴかすけ……ぴかたろう」
横を向いていたピカチュウは後ろを向いてしまった。
「本人は気にいっとらんようだな」オーキド博士は肩をすくめた。
サトシは次々に思いつく名前を呼びかけてみた。
「ぴかお。ぴかた。ぴかざえもん。ぴかのすけ。ぴかべえ……」
……いいかげんにせんか……とでも言いたげにピカチュウが、サトシのほうを向いた。
頬の電気袋から、かすかに火花が散っている。
「やめておいたほうがよいな、名前を付けるのは」オーキド博士が、あわてて言った。

「このピカチュウ、怒っとるぞ」
ピカチュウはうなずいた。
「ペットに向かないポケモンの中には、人間に勝手な名前を付けられると言うことを聞かないものもいる」オーキド博士が言った。
「このピカチュウもそうなの？」
「普通はだいじょうぶじゃ。むしろ、名前を付けられたほうが喜ぶ。普通のピカチュウはペットに向いているポケモンだからな」
「このピカチュウは普通じゃないんでしょう？……」
「そういうことじゃなあ」
サトシはピカチュウに聞いた。
「じゃ、キミの名はピカチュウ。ピカチュウそのままならいいのかい」
……ま、しかたないな……
と、でもいいたげに、ピカチュウは、まともな肩もないのに肩をすくめた。
サトシはうなずいた。
「よし、ピカチュウ。今日からキミはピカチュウだ」
「ついでに言っとくがのう」オーキド博士がさりげなく言った。
「まだ、なんかあり？」サトシは聞いた。
「そのピカチュウ、せまいところが嫌いでのう」
「はあ？」サトシはオーキド博士がなにを言いたいのかわからなかった。

「モンスターボールに入りたがらない。つまり、ボールに入らないから、ポケットに入れては運べない」
「……」
　サトシは言葉もなかった。
……ポケットモンスターって、携帯獣ってことだろ。いつもはモンスターボールに入って、ポケットに入れて運べるから、その名が付いたはずだ。ポケットに入らないポケモン。じゃあ、このピカチュウって、なんなわけ？
　ピカチュウはつぶやくように鳴いた。
「ピカチュウ、ピカ、ピカチュウ……」
　ピカチュウはピカチュウさ……そう言っているようだった。

※

「ママ！」
　ピカチュウをもらって研究所の外に出たサトシは、立ちすくんでしまった。
「昼休みだからね、ちょっと、ようす見にきたわ」
　ハナコが、門の前に立っていたのだ。
　ハナコだけじゃない。
「みなさんも暇だから、おまえを見送ってくださるって……持つべきものは、ご近所様とお客さん……ありがたいよねえ……おまえ」

ハナコの口調はママというよりニッポンのお母さんモードだ。
ご近所のおばさん、おじさん、常連のお客さんが、食堂の鍋釜（なべかま）やしゃもじを持って集まっていた。必勝と書いたはちまきをつけて、旗を振っている人もいる。
やはり、ハナコはサトシの忘れ物を届けるため、お店を臨時休業しなければならなかった。ところが休業がわりにお店の特別昼定食弁当をもらったお客さんたちが、どうせ、お弁当を食べるなら外で食べようと、ハナコについてきてしまったのだ。
サトシを見送るというより、ハナコといっしょにお弁当を食べたいという気分の、ご近所様やお客さんだから、雰囲気は、とっても気楽……シゲルのブラスバンドとチアガールとは、えらいちがいだ。
「まったくまあ、最後まで遅刻、最後まで親に心配かけさせて、でもまあ、しばしの別れ……」
ハナコは、遠くを見て涙ぐんだ。気分はいよいよ、けなげなお母さんモードになっている。
「忘れていった着替えと旅の道具を持ってきたわ」
ハナコは、サトシのリュックサックを見せ、ミニのエプロンから木綿（もめん）のハンカチを取りだしくしゅんと鼻をかんだ。
「本当に最後の最後まで世話をかけるんだから……くしゅんくしゅん」
ハナコのお母さんモードはくりかえしが特徴だ。
まわりのお知り合い一同も、つられてくしゅんくしゅんである。
ハナコのお弁当を食べたい気持ちは、どっかに忘れてしまっている。

ここいら、ハナコの料理のファンなのか、ハナコ自身のファンなのかよくわからないところがある。
ハナコはさらに盛り上がる。
泣きながらリュックサックを開きはじめた。
「ほら、靴に、ジーンズ。シャツにパンツに……食べ物は防災用にうちにあったインスタント食品を詰めこんでおいたからね。お炊事にゴム手袋、お肌が荒れるとこまるもの……あ、洗濯ものをかわかすヒモもあるわよ」
……なんなんだこれ?……という感じでピカチュウは首をかしげる。
サトシは顔を真っ赤にしてハナコに言った。
「もういいよ。おーげさ、げさげさ……オレはシゲルじゃないんだ、こんな見送り、ぼくが究極のポケモントレーナーになってこの町に戻ってきたときにしてよ」
「それもそだ」
ハナコはけろりと笑顔を作った。
「まあ、でも、せっかく、みんなも集まってくれたんだし……ま、元気でいけいけゴーゴーよね」
あっという間にハイティーンの女性モードである。
「……あら?」
ハナコの表情が、十代の女の子モードに変わった。
ピカチュウに気がついたのだ。

「あ、かーいい。その、小動物」
ピカチュウは、小動物という言葉にちょっと気分を害したのか……なんだと?……
「チューピカ……?」すごんで鳴いてみせても、かわいくしか見えない。
サトシはハナコに言った。
「あ……オレのポケモンさ……な、ピカチュウ」
ピカチュウは、鼻で……「ピ――――カ」と無視した。
サトシはめいっぱいミエをはった。
「オレはこのピカチュウで、世界中のポケモンをゲットしてやる」
ハナコはなにげなく言った。
「ふーん、ポケモンなら、どうして……」
「え?」サトシは聞き返す。
「普通、ポケモンって、いつもはそれに入っているはず……よね?」
サトシの持っているモンスターボールを指さした。
ハナコの……「はず……よね?」の、よね?の部分は、好奇心たっぷりの、十代トレーナー志望少女モードだった。
サトシは、あわてた。
「あ……そだよね……あ……そだ……ピカチュウ。これに入って……」
オーキド博士からモンスターボールに入りたがらないと聞いていたが、やってみなければわからない。もしかしたら……まちがいということもあるかもしれない。

サトシは、モンスターボールを持って、大きく振りかぶった。
ピッチングフォームの途中までは派手だが、最後は、ぽんと軽く、投げる。
だが、すぐにモンスターボールはサトシの手に戻ってきた。
「え……？」
「こういうのあり？」
ピカチュウが、しっぽではたき返したのだ。
サトシはそっと投げ返す。
「ピ……」
ピカチュウは足ではたき返す。
「ありだよなあ」
サトシは投げ返す。
「カ……」
ピカチュウは頭つきで返す。
「これでも？」
サトシはもう一度投げ返してみる。
「チュウ！」
ピカチュウは前足でアタックシュートだ。
サトシのお腹にモンスターボールが強烈にたたきこまれる。
「げ……」

サトシはボールを両手でかろうじて受け止めた。
「おじょうず。おじょうず」
ハナコがにっこり笑って拍手した。
「キャッチボールするなんて……仲がいいんだね。ピッチャーとキャッチャーは亭主と女房……仲がいい証拠……」
「え？……そうさ、ピカチュウとオレは友だちだい……な」
サトシはおそるおそるピカチュウの頭をなでた。
「……」
ピカチュウは上目づかいで、サトシをにらむ。
だが、電撃はない。
……少しは慣れてくれたみたいだ……
サトシはほっと息を吐いた。
ハナコは、しみじみと言った。
「これ以上のカップルはないわ。……でも……でもね。ボールを投げ返してくるなんて……」
サトシとピカチュウは、ハナコの次の言葉を待った。
ハナコは、ピカチュウを指さしていった。
「それって、とっても変なポケモンね」
「……変なポケモン……」

サトシは目の前が暗くなった。
「言わなきゃいいのに……」
ピカチュウの電気袋から火花が光った。
明らかに気分を害している。
「やめろと言っても、やめないよなあ」
サトシは空を見上げた。
「チュウ！」
ピカチュウのするどい声が響いて、あのたまらない感触がサトシの体を襲った。
ピカチュウの電撃ショックだ。
見送り全員がびりびりびりびりびり……しびれてしびれてしびれ続けた。
「さすが、主婦の知恵じゃな」
いつの間にか、研究所からゴム長靴をはいて出てきたオーキド博士が、炊事用のゴム手袋をつまんで言った。
「少なくともハナコさんのゴム手袋は役に立ちそうじゃな」
「どどどどうして」サトシがしびれながら聞いた。
「ゴムは電気を通さない。ゴム手袋もゴム長靴もな」オーキド博士が答えた。
「なるほどどどど」サトシはなっとくした。
ふん……肩をすくめて、ピカチュウが放電を止めた。
オーキド博士が感電しないので、しらけたようだ。

どどどどと見送り一同は倒れた。
みんな電気ショックでぼろぼろだ。
そのショックで、母親モードに戻ったらしいハナコが言った。
「サトシ、寝るときには、パジャマに着替えるのよ」
「は……？」
「そんなパジャマでもね」
サトシのパジャマは、ぼろぼろの上に黒コゲになっていた。
ピカチュウはピピピと笑って……「ピカチュウ！」と鳴いた。
「……やったぜ！」
「……ゲットだぜ！」
ピカチュウの言葉では、たぶん、そんな意味かもしれなかった。

（三章に続く）

二章のふろく

（……お急ぎの方は三章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

……ポケモンに関する参考文献2……

わたしが知っているポケモン研究の謎について……

初めて系統立ててポケモンの研究を始めたのは、十八世紀後半のフランスの作家、タジリン伯爵だといわれています。でも、よく調べてみると、タジリン伯爵の活躍した十八世紀とは、なにも、ポケモン研究だけが系統立てられて始められたわけではありません。ほかの生物も、系統立てられて、研究を始められた時代なのです。

それまでは、動物、植物、伝説の生き物など、人間以外のこの世界の生き物すべてがごっちゃになって研究の対象になっていました。まともな研究らしいものとしては、紀元前四世紀、俗にギリシャ時代といわれるころ、アリストテレスという学者が、約五百種類の動物について分類したという記録がありますが、その中に、ポケモンらしいものは見当たりません。

アリストテレスは、まず動物を、人間と、赤い血のある動物と、赤い血のない動物、そして植物に近い動物の四つに分けました。

赤い血のない動物とは、虫や、貝、タコやイカのこと。

植物に近い動物とは、ヒトデやナマコ。

いちばん数の多い、血の赤い動物は、子供が赤ちゃんで生まれる動物と子供がタマゴで生まれる動物に、大きく分けました。

赤ちゃんで生まれるものは、今、ほにゅう類といわれている動物です。

タマゴで生まれるものは、空を飛ぶ鳥、陸をはう動物（ヘビ、トカゲ、カエル）、水の中にすむ魚。

おどろくべきことに、アリストテレスは水に住む魚とクジラをわけて分類しました。クジラが、空気を吸う肺を持っていること、そして、なによりタマゴではなく、赤ちゃんの形で子供を産むことを知っていたからです。

でも、そのアリストテレスも、ポケモンの存在には気がつきませんでした。

そして、アリストテレスから十八世紀まで、これといった研究は見られませんでした。この世界に生まれた生き物の中で、いちばんえらいのは神様に選ばれた人間であるという考えがはばをきかせ、ほかの生き物のことまで、深く考える必要はないとされてきたのです。

それが、十八世紀ごろになり、人間のことをよく知るためには、生き物のことも知っておいたほうがいいという考え方が、はやりはじめました。

十八世紀後半……フランス人のラマルクという学者を先頭にして学者たちは、まず、動物と植物を系統立てて調べようとしました。

でも、どちらにも分類できない生き物がいました。

たとえば、伝説に登場してくる竜や人魚の種類は、なにがなんだかわかりませんでした。実在しているのか、ただの伝説なのか、はっきりしていなかったのです。

それを研究の対象にした一派の一人が、ほかならぬタジリン伯爵でした。

ですから、当時、発見された三十種類のポケモンが、たとえば……かえんポケモンのリザードンが、伝説の竜に似ていることにしろ……あわはきポケモン、シャワーズが、人魚に似

ていることにしろ（人魚が死んであわになったという人魚姫のお話は、ご存知ですよね。あわはきポケモンの名が、そこからきているだろうことは想像できますよね）、竜や人魚など伝説の生き物によく似ているのは無理のないことかもしれません。

けれど、不思議なことがあります。

それは、ほかならぬポケモンという名前の由来です。

ポケットモンスター……ニッポン語に訳して携帯獣という名前はどこからきたのでしょうか。

残されている記録によれば、ポケモンが、モンスターボールやカプセルのような小さいものに入って持ち運びができることがわかったのは、千九百二十五年、ニッポンのニシノモリ教授の偶然ともいえるかっき的な発見によるものだとされています（ポケモンの一種オコリザルの怒りのエネルギーを研究中、薬物の量を誤って、オコリザルを衰弱させてしまったところ、なんとオコリザルは、小さく丸まってニシノモリ教授の老眼鏡のケースの中に入りこみ、怒りも忘れ、安らかに眠りだした。……ポケモン学のエピソードとしてあまりにも有名なお話です）。

では、ニシノモリ教授の発見以前には、ポケモンを何と呼んでいたのでしょうか？　考えてみてください。ポケットに入るように小さくなるからポケモンなのに、それが、知られていないころにポケットモンスターと呼ぶ人がいるでしょうか。しかし、ポケットモンスターをポケットモンスターと呼ぶ以外の呼び名が、歴史には見当らないのです。

タジリン伯爵はポケモンのことを、いったい、どういう名前で呼んでいたのでしょう。

どんな名前で呼んでいようと、ポケモンが存在している事実は、否定しようがありません。けれど、ポケモン以外の呼び名が残っていないことに、わたしはこだわるのです。
これは、わたしの推理にすぎませんが、タジリン伯爵の時代には、ポケモンを別の呼び名で呼んでいたはずです。それが、なぜ消されたのか。だれが消したのか。
このようにポケットモンスターという名前ひとつとっても、謎があるのです。
さらに、ニッポンのニシノモリ教授にしても、オーキド博士にしても著名なポケモン学者は、ある時期以来、公的な場での研究を引退しています。十八世紀のタジリン伯爵にいたっては、三十種類のポケモンを発表して以来、消息すら絶っています。
そして、この傾向は世界中の著名なポケモン学者にいえることです。
いったいなぜでしょう。なぜ、彼らは、ポケモン学で有名になりながら、途中で、研究を投げ出した印象をわれわれに与えるのでしょう。
にもかかわらず、ポケモンを愛し、研究する人々は、年々増加しています。
発見されるポケモンの新種も、タジリン伯爵のころで三十種、ニシノモリ教授のころで八十種、現在、公式で百五十一……おそらくその数はどんどん増えていくでしょう。明日、新種が、発表されても不思議のない状況です。
ほかの生き物は、現代になるにつれ、どんどん絶滅していきました。
かろうじて、新発見があるのは、細菌やウイルスのたぐいだけでした。
それなのに、なぜポケモンだけがこんなに増えていくのか……？（言い方を変えれば新しい発見があるのか）

謎です。ポケモンは謎に満ちています。だからこそ、人の心をとらえて離さないのです。

……オーキド博士とはなんの関係のない、名もないポケモン研究家より……

第九十八回全世界携帯獣学会に参加したポケモンアナリスト（分析家）
ソネザキマサキに送られたインターネット・メールよりばっすい

第三章　旅立ちの日はオニスズメ

ともかくパジャマは着替えたし、リュックも背負って、サトシの旅は始まった。
でも、最初から楽じゃなかった。
普通なら三十分で行けるマサラタウンを見下ろす丘に、サトシがたどり着くまで二時間もかかってしまった。その証拠（しょうこ）に小学校の下校の鐘（かね）が今さっき聞こえたばかりだ。
町の広場に面した小学校の鐘が、はっきり聞こえるぐらいだから、少しも遠くに来てはいない。カメのようにあゆみがのろいといったら、ゼニガメが抗議の電話をかけてくるかもしれないほど遅かった。
なにしろ、ピカチュウがちっとも協力してくれないのだ。
モンスターボールに入りたがらないどころか、サトシについていこうともしない。
しかたなく、サトシは、足をふん張って抵抗するピカチュウを、洗濯のヒモで首輪をつくり、引いていくしかなかった。
手には炊事用のゴム手袋を着けたから電気ショックの心配はないものの、ヒモで、ずりずり引っ張っていくのは、決してほめられたかっこうじゃない。
自分の連れているポケモンが、主人のいいなりにならないことを宣伝して歩いているよう

なものだ。
　サトシは、丘の上でひと息つくと、改めてピカチュウに話しかけた。
「あのね。ピカチュウ。この状態、ずーっと続ける気？」
　ピカチュウはぷいと顔をそむける。
「おまえはそんなにオレがイヤ？」
　ピカチュウは、ごていねいに二度、三度うなずいた。
「ぼくはキミが好きだよ」
　ピカチュウは知らんぷりで、前足で顔をぽりぽりかく。
「いちおうキミは、オレに飼われているポケモンなんだからさ。少しは話しを聞いてくれてもいいじゃない？」
　ピカチュウは歯をむいた。
「う……オレをその歯でかむ気か？」
　身構えるサトシに、ピカチュウは首を振り、歯を前足の指でさした。
「え？　あ……歯があるってこと？」
　ピカチュウは、うなずいた。
「あ、はなしじゃない。話しじゃない。話したくないってこと？」
　ピカチュウは……やっとわかったか、にぶいやつだ……とでもいいたげにうなずいた。
「お前と、コントやる気はないんだけどさ。ねえ、ポケモンはポケモンらしく、このモンスターボールに入ってくれたっていいじゃないか。このポケモン図鑑にも書いてあるよ」

サトシはポケットからオーキド博士からもらったポケモン図鑑を取りだした。
ポケモン図鑑の先端には、テレビのリモコンスイッチの先のようなセンサーが付いている。その部分をポケモンに向けると、向けられたポケモンの説明が画面表示される。
トレーナー志願者が、公認研究所で最初のポケモンとともに必ず支給される必需品だった。
サトシは、ポケモン図鑑をピカチュウに向け読んで聞かせた。
「ピカチュウというポケモンは、森に住み木の実などを食べ、やさしい性格で、知能が高く、愛嬌(あいきょう)があり……」
サトシは、やさしいという部分と、愛嬌があり、の部分をわざとらしく強く言った。
ピカチュウは、……当たり前だとでもいいたげに、うんうんとうなずいている。
「なんて、いろいろお前の種類のことが書いてあってさ……」
サトシは、途中をはしょって、ピカチュウに聞かせたい個所を見つけた。
「あ、ほらほら、書いてあるぞ……慣れれば、飼い主のことをよく聞いてくれるポケモンである。……ってね。これ、ポケモンのきまりみたいなものだから、おまえも守ってくれなきゃな」
ピカチュウはぽんと図鑑の上に乗りボタンを押した。
画面の表示が変わった。ふろくに付いていることわざ事典だ。
「あん?」
サトシは読んだ。
「何事にも例外はある。例外のあることが法則(きまり)の法則(きまり)である」

ピカチュウ、自分を指さす。
「飼い主の言うことを聞かないピカチュウがいる事もきまりのうちだってことかあ」
サトシがつぶやくと、……その通り！　とでもいいたげに、ピカチュウは胸を張った。
サトシが、これ以上何を言ってもムダそうだ。
「わかった。だったらできるだけ仲よくしよう。これ、もうやめよう」
サトシ、首をつないでいたヒモをはずしゴム手袋を取り、握手をしようと手を出す。
……いまさら、遅いよ……とでもいうようにピカチュウ、ふん！　とすねてみせた。
「握手でダメならこれでもだめ？」
サトシは人差し指を出した。
母のハナコが、おいおい泣いて見ていた映画のビデオを、思い出したのだ。
それは、宇宙人と子供が仲よしになるストーリーで、人さし指と人さし指を触れ合わせて心をつなぎあっていた。サトシは子供心に女の子泣かせの甘い話だなあと思ったが、ピカチュウと仲よくなるためなら何でもやってみようと思ったのだ。
しかし、ピカチュウが古いビデオを見ているはずもなく、ふん……と横を向くだけだった。
「やっぱ甘いか……宇宙人のようにはいかないよな」
ピカチュウは当然ですといった様子で肩をすくめた。
が、そのときだった。
ピカチュウの目が、一瞬、草むらの向こうに釘づけになった。
サトシがいることなどまるで無視して、じっとおなじところを見つめている。

「ん？　なにかいるのかい？」
草むらをかき分けピカチュウの見ているほうをのぞくと、ことりポケモンのポッポが、地面をつつきながら動き回っている。
おそらく、えさでも探しているのだろう。
ことりポケモンなら、サトシも年中、見かけるありふれたポケモンだ。
それでも、いちおう、ポケモン図鑑のセンサー部分を向けてみる。
表示された説明によれば……
「ポッポ……空を飛ぶ、ことりポケモン……空を飛ぶポケモンの中ではいちばん性格がやさしく、つかまえやすい。ポケモントレーナーの初心者には小手調べとして最適……」
「だってさ……よーし　ピカチュウ。あれをつかまえよう！」
ポケモンをつかまえるには、自分の持っているポケモンと戦わせ、弱らせてからモンスターボールに入れる。
それが、ポケモンをつかまえる初歩のやり方だ。
だが、ピカチュウは相手がポッポだとわかったとたん、みょうにリラックスして、横になっている。
「ピカチュウ、どうしたんだ」
ピカチュウ、面倒くさそうに、サトシのポケモン図鑑のボタンを押した。
またことわざ事典だ。
「能あるピカチュウは電力のむだづかいをしない……実力のあるものは弱いものいじめやム

ダなけんかはしないの意味……。ほかに、電力会社の省エネ・キャンペーンにも使われることわざ」
ピカチュウは……その通りという顔でうなずく。
「戦ってくれないってこと?」
ピカチュウは知らんぷりだ。
「どうしてもかい?」
……うるさいな……とでも言いたげに、ピカチュウは近くの木の上に、登って寝そべってしまった。
「わかった。そうかよ。そうなんですね。よーし。お前がその気なら、オレがつかまえる。オレの夢はポケモントレーナーになること。そう、それも究極(きゅうきょく)のポケモンマスターになるんだ……そうさ。オレは全世界のポケモンに宣言するんだ。オレは決めた。最高のポケモンマスター、それはオレだ」
サトシは、ピカチュウにではなく自分自身に叫んでいた。
「そのオレが、野生のポッポ一羽つかまえられなくてどうする……うん!」
サトシは自分で自分にうなずいてリュックを木の下に置いた。
ポケモンコミックの懸賞で手に入れた、自慢のポケモンキャップの端をくるりと回し、……モンスターボールを手にとる。
「これがオレの始球式だぜ」
振りかぶる。足を大きく振り上げる。

「ポッポよ、おまえはオレのものだ……モンスターボール。いけーっ！」
モンスターボールが指から放たれる。
シュート気味のストレートだが、コントロールには自信がある。
小学校の野球の試合でピッチャーをやり、なぜか、ど真ん中ばかりに球が行ってしまい、九打席連続ヒットを打たれて交代させられたことがあるほどコントロールはいい。
「オレのストレートに例外はない！」
例外はなかった。見事に命中した。
「ゲッ……」
サトシは「ゲット」といいかけた。
しかし……モンスターボールは、ポッポに当たると、煙のようなものこそ出したものの、そのままぽろりと地面に落ちた。
ポッポはつかまるどころか、驚いた様子もない。
ただ、「ポッ」と、あくびのような鳴き声をあげただけだ。
「なんで……こうなっちゃうの」
ポケモン図鑑の表示を見れば……
「弱り目にモンスターボール……、モンスターボールは、ポケモンが弱っているときや疲れているときに使うこと。弱っていないポケモンにモンスターボールはムダである」
サトシは、落ちたモンスターボールを拾いにいきながらぼやいた。
「わかっちゃいるけどさあ……」

「ピピピピカチュウ」
ピカチュウが、木の上で、お腹を抱えて笑っている。
手足をばたばたさせて、転げ回るようにして笑っている。
サトシは歯ぎしりした。
「ピカチュウめ!……だけど、だけど、オレは、オレでやるんだ!……ン?」
サトシは、木の下に置いたリュックに気がついた。
「そうだ。ピカンチュっと……」
ピカチュウを呼んでいるのではない。ひらめいたという意味だ。
サトシはバックから黒コゲのパジャマをひっぱりだした。
そして、草むらに身を伏せポッポに近づいていった。
「じーっとしていろよ、こわいことありませんからね」
かさっ…サトシの足下の草がゆれた。
……なんじゃ?……ポッポがサトシのほうを見た。
「あ……こんちわ」
……だれ?……「ポッポ?」……ポッポは首をひねりながら鳴いた。
「今だ!　許せ!」
パジャマを広げてポッポに飛びかかった。
ポッポはパジャマの中だ。
「やった!　ポッポ!……ゲッ」

サトシは、また、「ゲット」を言いそこねた。
扇風機のような音がして、みるみるパジャマがふくらんでいくのだ。
「あ……これ……なにこれ」
あとで、ポケモン図鑑で確かめたところ……風おこしというポッポの得意技だった。
パジャマが、ふんわりと立ち上がり、そで口から、猛烈な砂ぼこりがふきだした。
これが砂かけという得意技らしい。
パジャマのボタンがはじけ飛び、穴の開いた風船のように宙にすっとんでいく。
ポッポは猛然と砂かけを続ける……あたりは砂嵐だ。
サトシはしゃりしゃりの砂まみれだ。
「ポッポ。ポッポ」
ポッポは木の上で、砂まみれのサトシをせせら笑うように鳴いている。
時間が来るとポッポが飛び出し、時を告げる時計があるが……
「本物のポッポはポッポ時計のポッポとはちがうんだよなあ」
わざわざポケモン図鑑を見なくても、サトシは、あることとわざを思い出していた。
……弱りポッポのたたりポッポ……ポッポ、ポッポで日が暮れる……
悪いことに悪いことが重なり、一日中、イヤな感じで終わることのたとえである。
だが、サトシにぼやいているひまはなかった。
木の下に置いたリュックが一大事だったのだ。
いつの間にか忍び寄った小さなポケモンがリュックを食い荒らしていた。

サトシ、あわてて追い払った。
だが、バックはすでにぼろぼろだ。
「こんなのありか」
木の上から見下ろしているピカチュウが、しょうがないなあとでもいうように肩をすくめた。
「あれはなんなんだよ……」
サトシはポケモン図鑑を茂みの中で、いまだに、こちらをうかがっている小ポケモンに向けた。
「野生のコラッタ。森のねずみポケモン……木の実などの堅いものやチーズを好む……」
「ちょっと、ここ森じゃない。野っぱらじゃないか」サトシは、図鑑の表示に文句を言った。
「たまに、まぬけな旅人の食料をねらって、野原に出てくることもある」
「ま……まぬけってオレのことか？」
……そうだよ……と言いたげに、ピカチュウはうなずいた。
ポッポもあざわらうように、野原の草むらから、首を出し、ぽっぽぽっぽと、ポッポ時計のように鳴く。
ますます、弱りポッポにたたりポッポになってきた。
「ううう……ゆるせん！」
頭にきたサトシ、小石を拾ってポッポに投げた。
しかし、今度は当たらない。

サトシのコントロールにもやっぱり例外があったのだ。
サトシは本気で熱くなった。
「絶対許さない！」
意地になって、草むらを追いかける。
ポッポはあざわらうように、飛んでいってしまった。
「ちぇっ。どうしてこうなるんだ……ん？」
草むらの向こうに別のポッポの後ろ姿が見えた。
サトシに気がついていない。
「よーし！　こんどこそ」
サトシは小石を投げた。
こつん！　すかっとした音を響かせて、今回は例外なく、見事に頭に当たった。
「やったぜ！　ざまみろ」
ポッポの頭に大きなこぶができている。
だが、そのポッポが、おもむろに振り返ると……そこに例外があった。というか、そのポッポはポッポではなかったのだ。
どう猛な目、するどいクチバシ……そして、鳴き声は……
「グアギャー！」
「ぐあぎゃーって……あんた。だれ」
サトシはポケモン図鑑を向けた。

ポケモン図鑑は、そのポケモンについて表示した。
「オニスズメ……おなじことりポケモンだが、ポッポとちがって気性がはげしい。人間やほかのポケモンに襲いかかってくることもある……」
「人間に襲いかかる？　あ……」
オニスズメはすでに飛び上がり、サトシに向かって急降下だ。
「ひえ……」
サトシは頭をかかえて、ピカチュウのいる木の下にかけこんだ。
オニスズメは、サトシのそでをかすめて急上昇した。またサトシを襲う気だ。
来た！　オニスズメはサトシに向かってつっこんでくる。
しかし、いきなり、急降下の角度を変えた。
木の上のピカチュウを見つけたのだ。
オニスズメは目標を変え、ピカチュウに向かっていく。
「え？」「ピカ？」驚いたのはサトシもピカチュウも同じだ。
ピカチュウはとっさにころがり、かろうじてオニスズメの攻撃をかわした。
オニスズメは、上空で旋回し、もう一度ピカチュウに向けてつっこんでいく。
ピカチュウは、前足でいやいやのポーズだ。……よせ、戦う気はない……とでも言いたげに身をかわした。
だが、オニスズメは、しつこく、なんどもなんども攻撃をくりかえす。
サトシはポケモン図鑑を見た。

「オニスズメに石を投げたのはオレだ。こいつ、どうしてピカチュウを狙うんだ」
オニスズメをセンサーでとらえたポケモン図鑑の表示は……。
「野生のポケモンは、人に飼われているポケモンに対し人間以上に敵意を燃やす傾向がある」
「そんな……だからって……」
サトシはオニスズメに向かって叫んだ。
「よせ！　ピカチュウに責任はない。石を投げたのはこのオレだ」
しかし、今のオニスズメに、サトシはまるで見えていない。
ピカチュウへの攻撃だけだ。
オニスズメのクチバシが、ピカチュウの肩をかすった。
ピカチュウは、木の上から足を踏み外した。
落ちていくピカチュウにオニスズメのクチバシが迫る。
このままではピカチュウは串刺しだ。
……こうなったらしかたがない、
ピカチュウは、空中で一回転し、落ちながら身構えた。
戦うしかないのかとでもいうような表情で、落下していく空中で身構える。
オニスズメは、思わずたじろいだ。
「ピカチュウ！」
電光が、はしった。

一撃だった。
オニスズメは、ひらひらと草むらへ落ちていった。
「やった……」
地面に着地したピカチュウにサトシは駆け寄った。
しかし、ピカチュウは首を振った。
じっと、オニスズメの落ちたあたりをにらんでいる。
いきなり、頭を黒コゲちりちりにされたオニスズメが顔を出した。
羽でサトシとピカチュウを指さした。
「グアギャー」
かんだかく鳴く。たぶん、オニスズメ語で「やっちまえ!」とでも言っているのだろう。
鳴き声を合図に草むらが大きくふくれあがり、そのまま、空へ持ち上がった。
それは、オニスズメの群れだった。
その数は、まるで……数えきれない。ともかく大群なのはわかった。
羽根の音だけで、週末の海岸の暴走族が出すオートバイのエンジン音を超えている。
おなじ飛んでいるものとくらべるなら、ヘリコプターの大編隊の爆音も、負けるだろう。
サトシは、ぽかんと口を開けて……それでも、やっと声が出て、ピカチュウに聞いた。
「逃げる?」
「ピカチュウ……」ピカチュウも、かろうじて、その声だけが出た。
ピカチュウが何を言いたかったか訳す必要はないだろう。

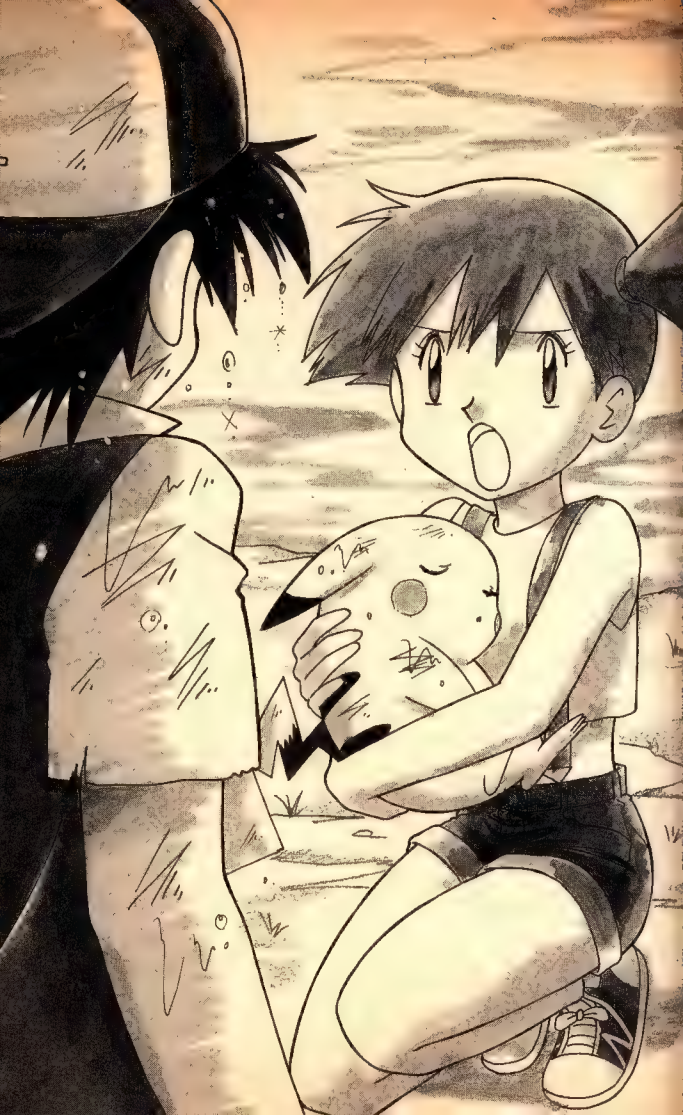
出会ってからはじめてサトシとピカチュウの意見は、いっしょになった。
サトシとピカチュウはオニスズメの大群をにらみながら、じりじりと後ずさった。
そして、互いにうなずくと、くるっと背を向けて走り出した。
合図にしたように、オニスズメはどどどどと移動をはじめる。
もちろん追いかける目標はピカチュウだ。
ピカチュウとサトシは走りに走った。
逃げる途中で、いろいろなポケモンとすれちがった気がする。
だが、サトシも……
「あ……あれは……」
などとポケモン図鑑を向ける暇があるはずがなかった。
そんな場合と場合がちがうのだ。
走る走る。走るったら走る。
しかも最初から大群だったオニスズメは、仲間が仲間を呼んで、どんどん増えているようだった。
もう、大群というより、空の半分が動いている感じだった。
逃げる逃げる。逃げるったら逃げる。
「がんばれよ！　ピカチュウ。絶対お前を、助けてやるぞ！」
逃げるサトシはそんなことを言いながら、しっかりピカチュウを追い越している。
「ピカチュウ……」

……よく言うよ……ピカチュウは、サトシを追い抜きかえす。
「あーっ、助けてやるって言ったろう！　いててて」
サトシの頭を、オニスズメの先頭集団がつつく。
だが、つっこんでくるオニスズメの攻撃はサトシよりピカチュウに集中していた。
つつかれ、はねとばされピカチュウはかなりの傷を負っている。
ピカチュウはよろよろふらふらだ。
それでも、サトシとピカチュウは走る。走る。走るったら走る。
逃げる逃げる、逃げるったら……だが逃げようにも……前方に崖……滝が流れ落ちていた。
サトシとピカチュウは崖っぷちに追いつめられた。
迷ってとか、考えてとか、思いきってとか……そんな時間を、オニスズメは残させてくれそうになかった。
「ええい。いっちゃえ」
サトシはピカチュウを抱いて滝に向かって飛びこんだ。
サトシとピカチュウは滝を落ちていく。
滝の先は、滝つぼで、その先は激しい流れで、もみくちゃでなにがなんだかわからない。
ともかくサトシは、ピカチュウをしっかり抱きしめ離さなかった。
というより、ワラをもすがるワラもないから、小さなピカチュウに抱きついていたのかもしれない。
激しい流れはかすかに弱まり、と感じた瞬間、吐き出されるように湖に流れこみ、サトシ

はぼこぼこと水の底へ落ち込んでいく。
……わ……沈んでる……やばいぞ……
サトシが、水の中で目をこらしたとたん……
いきなり得体の知れぬ大きな牙が見えた。
水が濁っていて、それがなんのポケモンか全体は見えないが、サトシとピカチュウをえさだと思っているにはちがいない。
サトシは必死で水面に向かって泳いだ。
とはいえ、片手はピカチュウを抱いてふさがっている。
少しも、上に浮いていく気がしない。
下を見ると、牙に囲まれた黒い穴がこちらに向かって浮かんでくる……いや、それはたぶん、何かの口だ。
何かは、サトシとピカチュウをまだ狙っている。
「ひえ……！」
サトシはがむしゃらにもがいた。
指の先に何かが引っ掛かった。
きらきら光る糸のようだった。
すがれるものなら、クモポケモンの糸でもよかった。
すがるすがる。すがるものったらそれしかない。
サトシは、手のひらに糸を巻き付けて握りしめた。

※

湖にひとり、釣り糸をたれている女の子がいる。
サトシと同じぐらいの年ごろだ。
女の子が狙っているのは、この湖、ナモナシ湖にすむというまぼろしのポケモンだ。
どこの湖にもまぼろしのポケモンのいい伝えがある。有名なところでは、ネス湖にはネッシー、クッチャロ湖には、クッシー、ビワ湖にはビワホウシー。この湖にはナモナッシー。
そんなポケモンが本当にいるのかどうか確かではないし、何か別のポケモンの見まちがいかもしれないが、正体がわかるだけでも楽しいじゃないか。
女の子は、旅の途中、近くに湖があると聞けば、必ず水辺に行き、最低三日間は釣り糸をたれることにしていた。今までの湖ではまだ、それらしいものを釣り上げたことはない。しかし、釣れなければ釣れないで、幻のポケモンの謎は残るわけで、それもまたロマンチックでよいと、思ったりする。釣りは、この女の子にとってロマンなのだ。
今日も、釣れたのはどこにでもいるコイキングような雑魚ポケモンばかり……日も暮れかかり、そろそろ、帰り支度をしようかと思っていた矢先だった。
女の子の釣りざおのウキがひくひくと動いた。
「ん？　来た。来た。けっこう大きい……」
ウキの引きで、獲物の大きさはすぐわかる。
「あんがい、ナモナッシーだったりして……うふっ」

女の子は、ほくそえんで、釣りあげるタイミングをはかった。
釣りはタイミングだ。タイミングさえ合えば、十歳の女の子でも、かなり大きな獲物を釣り上げることができる。
まして、女の子はこの地区の少年少女ポケモン釣りコンクールで、連続三回四位入賞をはたした釣り名人だ。自分の体重より重いさかなポケモンを釣り上げたこともしばしばだ。
「いまだ!」
女の子は、見計らったタイミングで、釣りざおを引いた。
絶妙の気合い。しかも、見かけに似合わず、意外と怪力である。
水しぶきをあげ、岸に釣り上がったのはサトシだった。
「なんだ。人間さんか……雑魚より悪いや」
幻のポケモンを釣り上げることに夢中だった女の子は、水の中から人間が釣り上げられた不思議を、あまり感じないらしい。
それでも、サトシが抱いているピカチュウには気がついた。
「あら? それってポケモン……」
オニスズメにつつかれたピカチュウは傷だらけであえいでいる。
「ひどいけが……だいじょうぶ?」
だが、サトシだって、オニスズメに散々つつかれた。
自分のことを心配されたと思うのが人情だ。
サトシは、女の子にお礼を言った。

「ありがと、たすかったよ、オレ……」
「あんたじゃない」
女の子はいきなりサトシの頬を張り飛ばした。
「なにすんだよ」
「それはこちらの言いたいセリフよ。どうして、ポケモンをこんな目にあわせたのよ。かわいそうに……」
女の子は、ピカチュウの頭をなでながら、サトシをにらんだ。
「オレのせいっての？……でも、オレだってけっこうやられてるんだけど……」
サトシの上着の背中はオニスズメの攻撃で穴だらけだ。
「ごちゃごちゃ言ってないで、早く治療しなきゃ。この近くだと……」
女の子は、ポケットから取りだした地図をひろげた。
「トキワシティのセンターで、治療してくれるわ……」
「病院、あるの？」
「あんたのじゃないわよ。ポケモンの病院」
「あ……そか……で……トキワシティ、どっち？」
「あっち」
女の子は、森の一本道を指さした。
そのときだ。湖の向こうから、あのいやな音が聞こえてくる。
オニスズメのはばたく音だ。西の空に沈みかけている夕日が、雲のようなオニスズメの大

群に隠されてしまった。あまりの数のはばたきに、空気が振動し、湖の水面が波立っている。
そして、泡立つ波はぐんぐんこちらに近づいてくる。
「見た？　あれ？」
サトシは女の子に聞いた。
「うん、見える」
女の子はうなずく。
「そうとうな数ね」
「逃げる？」
「わたしには関係ないもん」
「オレ、関係ある。あいつらにうらまれてる」
「じゃ、あんた、逃げなきゃ」
「だよな。そうだよな」
見ると、女の子のそばに自転車がある。
サトシはピカチュウを自転車の前のカゴに乗せてとび乗った。
「これかりる！」
「あ……それわたしの自転車……」
「いつか返す」
そう言い残して、ペダルを踏みこむ。走り出す。一本道を一目散（いちもくさん）だ。
「わたしの自転車……わたし、ここからどうやって帰れってのよ……うう、待てーっ」

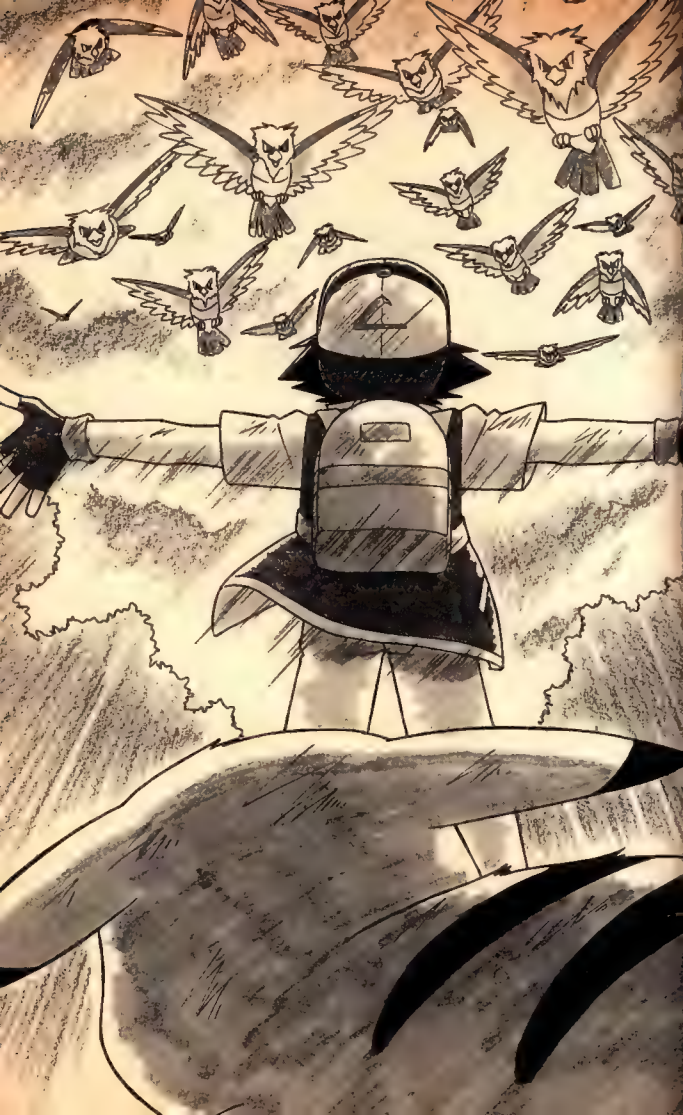
女の子は、サトシのあとを追いかけた。
でも、自転車に勝てるはずはない。
女の子の頭の上を、オニスズメの大群が追い抜いていく。
「やだっ」
女の子は、はばたきの風で立っていられない。
オニスズメの大群は、女の子には目もくれず自転車を追っていく。
狙いはあくまで、ピカチュウとサトシだ。
だが、あんな大群に襲われたら、女の子の自転車だって、ただではすまないだろう。
女の子は、ぼろぼろになった自転車を思い浮かべて青くなった。
「ちょっと待ってよ」
女の子は、遠ざかっていくオニスズメの大群に向かって叫んだ。
「ねえ、わたしの自転車には、なんの罪もないんだからね！　こわしちゃ、やーよ！」
女の子はだんだん腹がたってきた。
……それにしても、あいつめ……かわいいポケモンにケガさせているわ。わたしの自転車を無断で持っていくわ……こんど会ったら、ただじゃおかない……ああ、それにしても、なんて、わたしは男運の悪い女の子なんでしょう……ゆるせん……
断っておくが、この男運の悪い女の子は、まだ、十歳だった。

※

森の一本道を、サトシとピカチュウを乗せた自転車は走りに走った。
「がんばれよ！　トキワシティはもうすぐだぞ！」
カゴの中のピカチュウは、そんなサトシをあえぐように見つめている。
ピカチュウがオニスズメから受けたダメージは、予想以上に重く、動くことすら難しそうだった。
遠く山の向こうに雷が光った。
ぽつりぽつりと、水滴が、サトシの頬に落ちる。雨だ。雷の音がいくつも響く。
だが、それより大きいのはオニスズメのはばたきの音だ。普通、ことりポケモンは、雨の中では空を飛ばない。しかし、ピカチュウとサトシを夢中になって追いかけているオニスズメたちは、雨など気にかけるようすも見えない。
雨は、すぐに土砂降りに変わった。
それでもオニスズメは、攻撃をあきらめない。
土砂降りの雨にまじるようにして、オニスズメの急降下がはじまった。
道はぬかるみ、泥沼のようになり自転車のハンドルが、うまくとれない。
空は暗い雲と、オニスズメの大群におおいつくされ真っ暗だ。
たたきつける大粒の雨で、前もよく見えない。ひときわ大きな雷鳴が轟き（とどろ）きオニスズメの攻撃は、激しさを増す。

車輪が滑った。バランスがとれない。横倒しだ。
落ちるサトシとピカチュウは、自転車から投げ出された。
「どうしてこうなるんだ!」
このザマはなんだ?
サトシは拳で、思いきり泥水をたたいた。
なんだかとても腹がたち、なんだかとても悲しかった。
自転車が転んだことだけじゃない。
壊れた目覚し時計。遅刻。いやみったらしいシゲル。思い通りに選べなかったポケモン。モンスターボールに入らないピカチュウ。オレを小ばかにしたポッポ。コラッタ。オニスズメにつつきまわされ、水の中ではおぼれかけ、わけのわかんない化け物ポケモンに食われかけ、知らない女の子に頰っぺたをたたかれ、あげくが、泥まみれのオレ。
どうして今日がこんな一日になってしまったんだ。
今日まで、オレは、この日をどんなに待っていただろう。
ポケモントレーナーへの旅立ち……オレの夢見た日。
こんなはずじゃあなかった。
サトシは、何度も何度も泥水をたたいた。
その時、稲光が、あたりを浮かび上がらせた。
目の前にピカチュウが転がっていた。
「え……?ピカチュウ?」

ピカチュウの体の半分は泥水の中にうまり、かろうじて息をしていた。
サトシはピカチュウを抱き上げた。
「ピカチュウ！　こりゃなんなんだ？」
「ピカチュウ……」ため息のような、かすかな声だ。
「こんなのありか！」
見上げる頭上は、オニスズメの大群が総攻撃のときを待ちかまえている。
頭のコゲているオニスズメが鳴き声をあげた。最初にピカチュウの電撃にやられたオニスズメだ。そいつがこの攻撃のリーダーらしい。
オニスズメの大群が攻撃の態勢に入った。
まともにつっこまれて、くちばしでつつかれたら、サトシとピカチュウの命はないだろう。
……オレは、オレは、マサラタウンのサトシは……どうすればいい？
サトシはどうすればいいか、すぐに決めた。
サトシはモンスターボールを取りだしピカチュウに見せた。
「ピカチュウ……これに入れ」
ピカチュウは、サトシを見つめた。
「この中に入るんだ」サトシは、きっぱりといった。
ピカチュウはサトシとモンスターボールを見比べた。
「この中に入るの……お前、きらい……なのわかってる。でも、この中にいれば、お前、助かるかもしれない。さあ、入ってくれ、あとはオレにまかせろ」

サトシはピカチュウの前にモンスターボールを転がした。
そして、オニスズメの大群に振り返り叫んだ……。
「お前ら、オレをなんだと思ってんだ。マサラタウンのサトシ、オレは世界一のポケモンマスターになるんだ！　お前らなんかに負けない。みんなまとめてゲットしてやる」
サトシ、立ち上がり、手を広げる。
オニスズメの大群は、なにやっとんだこのバカ……という感じで空中ではばたいたまま動きを止めている。
「いいか。ピカチュウに手を出すな。お前らの相手はこのオレだ」
ピカチュウはじっとサトシの後ろ姿を見つめていた。
サトシは、後ろのピカチュウを振り返らず、オニスズメの大群をにらみつけたまま、ピカチュウに語りかけた。
「ピカチュウ。入れ。モンスターボールに……入ったか？　入ったよな……」
ピカチュウは、モンスターボールとサトシの後ろ姿を交互に見つめている。
「さあ来い。オニスズメ……ゲットの用意、十分だぜ」
頭のコゲたオニスズメのリーダーは、完全にサトシを見下していた。
その目はサトシを小ばかにしていた。
サトシは一瞬くちびるをかみしめ、しかし、にやりと笑って叫んだ。
「オニスズメ。たかが雀のお兄ちゃん、鷹よりオレがこわいのか。おれおれおれ！　おにちゃん。こちら」

サトシは挑発するように手を振った。
……なにを！　……オニスズメはいきり立った。
ピカチュウは、サトシにあきれ、大バカだと思った。……そして、サトシに対する別の気持ちもわきあがっていた。
ピカチュウは、ちらっともう一度だけモンスターボールを見た。
そして、かすかに微笑(ほほえ)んだ。
ピカチュウはつぎにやるべきことを決めた。
サトシは両手を広げ叫んだ。
「来い！　ちゅんちゅんすずめ」
オニスズメのリーダーは、翼(つばさ)で突撃の合図をした。
オニスズメの大群はサトシに向かってつっこんだ。
サトシは目を閉じ、つぶやいた。
「ゲットだぜ……」
そのときだった。
「ピカチュウ！」
ピカチュウは全力をふりしぼり、サトシの後ろから背中を駆け上がり、さらに肩から頭の上へ……そして、襲いかかるオニスズメの大群に向かってジャンプした。
そのピカチュウに雷が落ちた。
土砂降りの雨の空間をピカチュウの電撃ショックと落雷のショックが切り裂く。

オニスズメの大群が吹き飛ぶ。
雷光と電撃が去ったあと……両手を広げたサトシと、その帽子の上で両手を広げたピカチュウだけがつっ立っていた。しかし、全身はちりちり、ぼろぼろだ……。
「ゲットだぜ？」サトシが、だれに聞くでもなくつぶやいた。
「ピカチュウ……」ピカチュウはうなずいた。
サトシとピカチュウはそのままの形で、硬直したままパターンと後ろに倒れた。

※

木々の葉に水のしずくがぽたりと落ちて……夕日がきらきら光っている。
雨は止んだ。
気を失っていたサトシはわれに返った。
転がっている自転車は、さっきの電撃でぐにゃぐにゃに曲がっている。
かたわらにピカチュウが倒れていた。サトシはピカチュウを抱き上げた。
「ピカチュウ！」
ピカチュウは、うっすらと、目を開く。
サトシはピカチュウに言った。
「オレ……だね？」
……オレはオレで、オレはサトシで、ピカチュウはピカチュウで、これからオレは、ピカチュウと……だね？　いろんなことを言いたかったが、声に出たのは、「オレ……だね」

の二つだけだった。
ピカチュウは、ただ一回、こくりとうなずいた。
そのときだった。サトシとピカチュウは見た。
それは夕日に向かって飛んでいた。
大きな翼をゆったりと動かしながらなにかが飛んでいた。
真っ赤な夕日の逆光で、その姿はシルエットでしか見えなかった。
光の粉が、サトシとピカチュウに降りそそいでいた。
「あれは……なんなんだ？」
サトシはポケモン図鑑を向けてみた。
図鑑の答えはそっけなかった。
「不明。ポケモンであることは確かだが、この世界にはまだ知られざるポケモンがいる」
「知られざるポケモン……」
しかし、サトシはすぐにわれに返った。そして、ピカチュウを抱きしめた。
「今はお前の傷を治さなきゃ。がんばれよ。トキワシティまでがんばるんだ」
サトシはトキワシティへの一本道を急いだ。

（四章に続く）

三章のふろく

（……お急ぎの方は四章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

……ポケモンに関する警告その1……

携帯獣行動学・コンドタラ・ロレンス　サファリ大学アマゾン支部教授

……ポケモンとつきあうには……
今まで、アニメや映画、小説の題材として描かれたポケモンは、数かぎりなくあります。だが、どれもこれもポケモンの、本当の姿を描いているとはいえません。そこに描かれているポケモンは、あくまで人間の側から見たポケモンであります。
難しい言葉で言えば、擬人化されたポケモンだということです。
そして、それはきつい言い方を許していただければ、人間にとって都合のいい見方をしたポケモンだといえます。
よく、ポケモンが喜んでいるとか、泣いているとか、怒っている……とかいう表現を見かけます。しかし、それは、人間が勝手にそう思いこんでいるわけで、本当にそうなのかどうか、本人……ポケモンだから、本人という言い方にも問題がありますが、本ポケとでもよび

ありませんか？（場内、しらけた笑い）……ともかく、彼らの気持ちを彼らに直接聞いたわけではありません。

頭がよく、性格がやさしく、人間の言葉をよく理解するといわれるポケモンもいますが、本当に人間の言葉の意味がわかっているか、これもまた、本人……本ポケから聞いたわけではありません。

残念ながら、われわれの研究は、まだポケモンの言葉を理解できるところまでいっていません。また、ポケモン同士で共通にしゃべる言葉があるのか、またはほかの意思伝達方法があるかどうかもわかっておりません。

これは、最近のポケモンブームを考えますとき、ポケモン研究者も、ポケモントレーナーもポケモンをペットとして飼う愛好家も、ポケモンにかかわる人ならだれでも、もう一度確認しておかなければならないことだと思います。

われわれが接するポケモンが、何を思い、何を考えて行動しているかは、はっきりいって、なにもわかっていないのです。

アリとキリギリスという話があります。大昔の動物のお話ですからご存知の方も多いでしょう。働き者のアリと、遊ぶことが大好きで毎日歌って暮らしているキリギリスのお話しです。しかし、アリを働き者だと決めたのは人間です。本人のアリが、働いているつもりかどうかすらわかりませんでした。キリギリスという虫だって、遊んでいるつもりで歌っているわけではないでしょう。鳴き声を歌だとすら思っていないでしょう。カラオケで喜んで歌ってマイクを放さないのは人間だけです。

イヌという動物が、人間に忠実な動物だという人がいます。ネコという動物が、気まぐれだという人もいます。ちょっと待ってください。どれもこれも、人間の勝手な思いこみかもしれません。

もしかしたらイヌのほうでは人間のことを、餌をくれる忠実な生き物だと思っているかもしれません。

イヌといえば、昔、イヌの伝説に忠犬ハチ公というのがありました。

毎日、主人を駅まで迎えに行っていたハチというイヌがおりまして、このイヌは、主人の人間が亡くなっても、駅で毎日、主人を待ち続け、待ち続け、待ち続けたあげくに、駅前で死んでいるところを発見されたというのです。

人間たちは思いました。

ハチ公は死ぬまで主人を待ち続けたのです。

何という忠実なイヌでしょう。

ペットを飼っている人たちには涙なくしては聞けない美談です。

だから、そのイヌは駅前で銅像になっているそうです。

しかし、ハチ公は本当に主人を待っていたのでしょうか？

イヌが主人を待っていたと思ったのは、人間の勝手な思いこみかもしれません。

ハチ公が駅前に通ったのは、もしかしたら、駅前においしい屋台があったからかもしれませんし、かわいいメスのイヌがいたからかもしれません。

イヌにはイヌの、そうしなければならないイヌなりの理由があったのかもしれないのです。

ともかく、人間はイヌと話すことができませんから、はっきりしたことはわかりません。せっかくのいい話に水をさすようですが、わたしが、みなさんに言いたいのは、生き物の行動を、人間の都合で、わかったつもりになるのは危険だということです。

イヌは、大昔から人間と共存してきたといわれます。事実もそうだったでしょう。しかし、だからといって、人間の友達だとか人間の忠実な部下だと決めつけるのはどうでしょうか。言葉のわかる人間同士だって、裏切ることがある。ウソをつくことがある。まして、相手は何を考えているかすら話してくれないイヌなのです。

おそらく、イヌが大昔から人間とつきあってきたのには、イヌにはイヌなりの理由があったのだ……と考えるほうが納得がいきます。

くどいようですが、もう一度申し上げます。

われわれは、生き物とつきあうとき、人間の都合のよい考え方で生き物をわかろうとしてはいけないのです。

現在、ポケモントレーナーや珍しいポケモンをペットにしている人たちの間で、いわゆる「飼いポケモンに手をかまれる」事故が続出しています。

非常識な例が、嫌がるピカチュウをお風呂に入れて感電する。とか、ヤキトリ屋にポッポを連れていってつつかれる（場内、苦笑）。

みなさん笑ってますが、こんな事故が、けっこう多いのです。

それで、「ピカチュウをきれいにしてやろうとした。裸のつきあいをしたかったのに裏切られた」だの「ポッポにおいしいものを食べさせようとしたのに、わかってくれない」なん

て言って、飼い主は怒る。そして、いやになって捨てる。そのせいで、のらポケモンが増えて困っている国もある。正直いって飼っていたあんたが悪い。

こんなばかばかしいものはともかくとして、性質の荒いポケモンを飼って、けがをしたり命を落とした例もしばしばある。みっともないから、本人はほとんど公表しませんが、ポケモントレーナーにいたっては、未公開の記録によると、その八十六パーセントが、なんと自分のポケモンが原因で、何らかの事故にあっている。

これらの事故のほとんどが、「自分の飼っているポケモンは自分の言いなりになる」という、人間の勝手な思いこみによるものが多いのです。

そして、その思いこみは、アニメや映画、小説に描かれるポケモンによる、誤った知識によるところが多いと考えるのです。

いちばん危険なのは、なんでも友だち的なポケモンのとらえ方です。

ポケモンは、決して、人間にとって都合のいい生き物ではありません。

ポケモンはポケモンです。彼らそれぞれの生き方で、この世界に生きているのです。

とくに野生のポケモンの行動についてはわからないことが多すぎます。

くれぐれも安易な気持ちで野生ポケモンの捕獲やペット化はせぬよう、いまこそ携帯獣学会からの全世界にむけた警告が必要だと考えます。

……第九十九回全世界携帯獣学会　特別講演よりばっすい

注意1)　コンドタラ・ロレンス教授のこの講演は、ポケモンブームに水をさす少数意見として無視された。学会のほとんどの学者は、一種類でも多くの新しいポケモンの発見と、その研究に夢中になっていた。

……第九十九回全世界携帯獣学会を衛星テレビで見ていたポケモンアナリスト（分析家）
ソネザキマサキの回想メモよりばっすい

注意2)　人間に都合のよい表現でポケモンを描いた小説としては、そのひとつに「ポケットモンスター」があげられるかもしれません。つまりこの本です。
しかし、ロレンス教授の非難には、あえて反論はしません。これは、ポケモンが書いた、ポケモンが読むための本ではなく、人間が書いた人間の読者向けの小説です。
人間にわかりやすい表現になるのはしかたのないことです。

……小説「ポケットモンスター」の作家から、コンドタラ・ロレンス教授への
未公開メッセージよりばっすい

第四章　ニャーズ・アタック

サトシがトキワシティにたどり着いたとき、夕日は、山の向こうに消え、あたりは薄暗くなっていた。
トキワシティは近くを国道二番線が通るかなり大きな街だ。
サトシのマサラタウンには、ここ百年間、犯罪といえる事件はなかった。だから、お巡りさんの駐在所もなく、警察代わりになるのは、毎晩「火の用心」と呼び掛けながら町を回る、私設消防団ぐらいしかなかった。
しかし、さすがにトキワシティともなると警察署もあるし、街のはずれには交番もたっている。
今夜の交番夜勤は、婦人警官のジュンサー警部補だ。警部補といってもサトシがお姉さんと呼べそうな年ごろだ。断っておくが、二十代の母を持つ十歳のサトシにしてみれば、二十代の女性はおばさんである。
だから、ここでいうお姉さんのような婦人警官とは、いちばん年上でも十九歳のことである。
さらに言わせてもらえれば、わざわざ婦人警官などと、婦人という言葉をつけて呼ぶこと

もない。

この国では、警察のようなまじめでかたい仕事は、ほとんど女性がやっていて、男性がやっている警察に関係しそうな仕事といったら、泥棒と私立探偵ぐらいしかなかった。

男の子はものごころつくと、ポケモントレーナーを目指したがる。

しかし現実は、だれもがポケモントレーナーになれるわけでもなく、挫折する人のほうが多いのだ。早めにそれに気づき、進路を変えられる男の子はまだましだが、夢を深追いした末に、ポケモントレーナーになれなかった人はつぶしがきかない。大人になって、ほかの仕事につこうとしてもモンスターボールの投げ方しか知らないから使いものにならない。夢ばかり追いかけて実現しなかったから、どこかいじけている。ほらばかりふいている。あてにならない。いつも、一獲千金を夢見ている。こんな人に、警察や、銀行や、お医者さんなどのかたい仕事をまかせたら、街はどろぼうだらけ、病院は病人を作る場所に変わってしまう。

けっきょく、この国のかたい仕事や、まじめな仕事は、ほとんど女性に、占領されてしまった。

さて、今日の当番のジュンサー警部補だが、ジュンサーという姓を言っても、それがだれか、すぐ本人を思い浮かべられる人はいない。ジュンサー家は、ご先祖様の、ジュンサー・ヘイジとその娘ジュンサー・ゼニガタが、初代岡っ引き（昔の警察官のこと）を勤めて以来、この国で古くから警察官を仕事にしている家系で、今や、この国の三分の一の警察官は、ジュンサーの名を持っている。

残りの三分の二は、結婚をして姓を変えた女性か、その娘や親戚である。

……もちろん結婚しても姓を変えない人もいるが、ジュンサー家の家系には、なにしろ警官が多い。まぎらわしいので、結婚して姓を変える人も多い。

ともかく、この国では……ジュンサーという名を聞けば警官と思え……なのである。

トキワシティの警察官の名も、ジュンサー……正確にいうとジュンサー・モモコ……モモコは漢字で、百子と書く。ちなみに近所の街には、イチコ、ニコ、サンコなど、数字の付く名前が多く、トキワシティとおなじ国道二番線沿いのニビシティにいるモモコのいとこなど、八百子と書いてヤオコと読む。同じジュンサーで、まぎらわしいから数字で区別をつけようというジュンサー一門のしきたりなのだが、数字を付けられた本人たちからは評判が悪い。三十子と書いて、ミソッコなんて、女の子としては呼ばれたくないわけだ。

彼女たちの気持ちを尊重して、この小説でも、とくに必要でないかぎり、名前は呼ばずジュンサーで通すことにする。

なぜなら、これから先、行く町行く街、警官の名がジュンサーでは、確かにまぎらわしいが、相手が警官だけに、気分をそこね怒らせると、今後が怖いと思うからである。

※

夜勤のタイムレコーダーを押したジュンサーは、まず最初の仕事を始めた。

時報のチャイムを鳴らし、マイクを持つ。

「トキワシティのみなさま、そろそろ夕御飯のお時間……お仕事ごくろうさまでございました。なお最近、すり・おきびき・ポケモン誘拐の被害がめだっております。ご注意くださー

い」

交番の屋根の上のスピーカーからジュンサーの声が町中に響く。

「あん？　などと言ってる矢先に……」

交番の窓の外に、サトシが走ってくるのが見えたのだ。

ジュンサーは交番の前を駆け抜けるサトシの襟首（えりくび）をつかんだ。

「お待ちなさい、……怪しい人は通しませんの」

「怪しくなんかないよ。早くオレのポケモンを病院へ……」

サトシは胸に抱いているピカチュウを見せた。

ジュンサーは、自分のポケモンがけがをしたように悲しそうな顔をした。

「ひどいけが……かわいそうに……早く身分証明……パスポートじゃなくて、パスタウンっていうんだけど……ともかくＩＤを見せて」

「身分証明？　そんなもの……」

だれからも、もらった覚えがなかった。

ほかの街では、レンタルビデオを一本借りるにも、身分を証明するものが必要なことは聞いていた。しかし、サトシの住んでいた小さなマサラタウンでは、みんな、お互いの顔を知っていて証明書などなくてもだれも文句は言わなかった。

証明書をもらえるとしたら、マサラタウンの町長さんのところだが、オーキド研究所でのピカチュウ電撃さわぎですっかり忘れていたし、だいいち、町長さんは、シゲルを見送りに出て町にはいなかったはずだ。

ともかく証明書なしで、わかってもらうしかない。
「オレ、マサラタウンから来たサトシです」
「マサラタウンからきたぼうやは、あなたで今日4人目よ……」
「4人目……シゲルたち、もう来たんだ……」
先を越されている。でも、考えてみれば、当たり前かもしれない。普通……オニスズメがいなければ、こんなに遠回りするわけないのだ。……くちびるをかみしめるサトシに、ジュンサーが言った。
「あなたは普通モンスターボールに入っているポケモンを、しかも、そんなに重傷のポケモンをむきだしにして抱いている。身分証明がなければポケモン泥棒とまちがえられてもしかたがないのよ」
掲示板に二人のポケモン泥棒の人相書きが貼ってあった。
人相書きといっても二人とも帽子を深くかぶって、顔までは見えない。
「ですから証明書っていったって……おれとピカチュウはオニスズメにやられてぼろぼろで……」
ジュンサーは気の毒そうに首を振った。
「困ったわ……。経験上、この手の顔には、おめでたいのは多いけど、悪いやつはいない。でも、なにか証拠(しょうこ)になるものがないと……わたしだってお勤めだもん。通したいけど通せない」
「そんなあ、オレのピカチュウ、けがしてんだよ」

そんなピカチュウの前足が、震えながらサトシのふくらんだポケットを指さした。
そして、かすかに鳴いた。
「ピッカピカ……ピカ」
ジュンサーは、ピカチュウの様子を見逃さなかった。
「ん？　そのポケットのふくらみは……」
「え？……あ……これ……」
サトシはポケットに手を突っ込むとポケモン図鑑を出す。
「ん、ん。これは？」
ジュンサーはにっこり笑ってサトシに聞いた。
「え……オーキド博士から……」サトシが答えた。
「マサラタウンのね？」ジュンサーが念を押した。
「うん」
ジュンサーはぱちんと指を鳴らした。
「ポケモン図鑑。それこそ、動かぬ証拠だね」
ジュンサーは、サトシのポケモン図鑑を取り、裏表紙をひらいた。
「この最後のページが目に入らぬか……これぞキミの身分証明」
と、サトシに見せた。
ポケモン図鑑にサトシの顔写真が貼ってあり、その下にオーキド博士のペン書きの文とサインがあった。サトシは、読んでみた。

「このポケモン図鑑をマサラタウンのサトシ君に贈る。目指せ未来のポケモントレーナー……なお、ポケモン図鑑を盗難紛失の際、再発行はいたしません……マサラタウン。オーキド博士」
「あちゃ。最後のページが証明書なんて、知らなかった。オレ、あんまり急いでいたもんだから……」
「急いでいるのは今もでしょ」
交番の外でジュンサーの声とともに、
どどどど……オートバイ750ccのエンジン音が響いた。
ジュンサーはいつのまにか、サイドカー付きの白バイのエンジンをふかしていた。
「ポケモンセンターで、ポケモンの傷を治さなきゃ。早く乗って！　送るわ」
「うん！」
サトシはサイドカーに飛び乗った。
ジュンサーはサイレン付きのライトを、サトシの上に乗せた。
「ぶっとばすわよ。ターボで……」
どかん！　白バイは、マフラーから火と黒煙を吐き出し、トキワシティの中心街へ突っ走っていった。

※

「なんなのよ……今の……」

女の子は、残されたマフラーの黒煙にむせながら、交番の前に立っていた。
湖で、釣りをしていた女の子だ。ぼろぼろになった自転車を引きずっている。
サトシを追う途中、壊されて転がっていた愛用の自転車を見つけたのだ。
交番に通報しようとやって来て、ジュンサーに声をかけようとしたとたん、めいっぱいバイクの煙をかけられた。
しかも、そのバイクには、あの自転車ドロボーイが、乗っていたではないか。
「ううう許せん!」
女の子は、自転車を肩にかつぎ上げた。釣りのときも力があったが、怒るともっと力が出るらしい……
「まてえ!」
白バイを追って、自転車をかついだまま走り出した。

※

ぼぼぼぼぼぼぼ……
陽はとっぷりくれ、光っているのは街灯と交番の明かりだけ……ジュンサーのいない交番の上空に、奇妙な音が近づいてくる。
それは、熱気球……巨大な風船の中に、熱い空気を送り込み空に浮き上らせるエンジンの音だ。
交番の真上に止まった熱気球には、二人の人影が見える。

一人が、釣り糸を下ろし、掲示板の人相書きを釣り上げた。
「これが、わたしたちの人相書き……」人相書きを見てつぶやいたのは女だ。
「ろくに顔も写っていない。ひどい写真だ」
写真の写りを気にしているのは男だ。
この二人こそ、かの有名なポケモン泥棒集団、ロケット団のへき地担当部員だった。
「しょせん、田舎(いなか)の警察には、わたしたちの美しさが理解できないわ」
女性の名前はムサシ……。言うだけのことはある。ポケモン泥棒を仕事にする前は、美術品の泥棒をやっていた経験がある。盗んだ美術品を、世界各地のテレビでやっているお宝鑑定番組に出しては、ひどく安い値段をつけられてバカにされていたので、それだけ、美しいものにはこだわっている。
「本当に許せない」
男の名前はコジロウという。小さい次郎と書いたとしても、背は高いし次男坊ではなく長男である。ただ、子供のころはおとなしくて、影が薄い少年だといわれていたので、泥棒のくせに、やたらと写真写りを気にするのである。
「許しちゃいけない。美へのボウトク」ムサシは、拳(こぶし)を握りしめた。
「トキワシティのやつらにわたしたちの力を見せつけてやる」
コジロウは、手鏡に自分の顔を映してにっこり笑った。
二人の後ろの闇に光るものが、……上がり目、下がり目、ぐるっと回ったポケモンの目……額には黄金の小判。……ニャースというポケモンだ。

「見せつけるのはけっこうにゃーが、にゃーたちの目的は珍しいポケモン……それを忘れるにゃー」
そのニャースは、人間の言葉をしゃべった。ニャースのすべてが人間の言葉をしゃべれるわけではない。サトシのピカチュウが、モンスターボールに入りたがらない、珍しいピカチュウであるのとおなじように、人間語をしゃべるニャースも珍しいニャースだった。
いや、携帯獣学上は、ピカチュウ以上に、いるはずのない、いてはならないニャースだった。
これには、人に言えない、いや、けっしておなじポケモンには言えないニャースの苦労があったのだが、それは、また別の機会にお話しするとして……。
ともかく、ニャースの語学上の目標は……「ネコに小判」ということわざを、「ニャースに小判」に変えることだった。しかも、その意味さえ変えたかった。
「ネコに小判」とは、「ブタに真珠」と、似たような意味で、ネコに小判を上げてもムダだ。ブタに真珠をあげても喜ばない。ネコやブタが喜ぶのは、小魚か残飯だ。小判と真珠とダイヤモンドをあげて喜ぶのは人間だけである。……おなじ人間でも女性にあげた場合は、しばしばムダにはなるが、喜ぶことは確かなようである。つまり、「ネコに小判」とは相手にき目のないムダなことをするな。ムダなものをやるな。というたとえで、ずいぶん生き物を軽べつしたことわざである。
ニャースは、「ネコに小判」「ニャースに小判」の意味を、文字どおり、お金持ちになるという意味に変えたかった。だからこそ、ことあるごとに招きネコのように片手を上げて言い

続けるのだ。
　そして、今夜もニャースはにたーっと笑って決め文句。
「ネコに小判！　ニャースに小判！」
「ばんばんやるさ」
　ムサシとコジロウはニャースのセリフにそう受けて、人相書きを引きちぎり丸め、ぽーんと夜空に投げた。

※

　街をすっとばしていく白バイの前方に、ポケモンセンターが見えてくる。
「見えたぜい！」ジュンサーが親指を立てた。
「ポケモンセンター……あれがポケモンの病院……」
　サトシが、ぽかんと口を開けてつぶやくほど、立派な建物だ。トキワシティ一の建物かもしれない。
「緊急事態……ご意見無用……いきます！」
　ジュンサーはそう叫ぶと、ポケモンセンターの正面階段を、白バイのまま駆け上がる。
　玄関に飛び込み、ホールの受け付け前で急ブレーキだ。
　受け付けの女の人がカウンターをぽーんと飛び越して、白バイの前に立った。
　サトシよりはお姉さんに見える白衣を着た女の人だ。どうやら、お医者さんらしい。
　落ち着いた声で、ジュンサーに聞く。

「こちらＥＲ……緊急治療部のジョーイです……事態を手短に」
ジュンサーは敬礼しながら報告する。
「大けがポケモン、宅配っす」
ジョーイと名乗った女の人は、サトシの抱いたピカチュウを、ひと目見て、
「ポケモンの種類はピカチュウ系ね」
そう言うと、サトシが答える暇も与えず、カウンターのマイクをつかんでいる。
「こちら、受け付けのジョーイ……至急、……電気系小ポケモン用ストレッチャーを！」
「ラッキー」
そんな鳴き声の答えが聞こえた。
あっという間に、ナースキャップを頭に付けたポケモンが、患者を運ぶストレッチャーを持って飛び出してきた。
おなかにタマゴのようなものを抱えた、全体が桃色をしたポケモン。ラッキーという、性格がやさしくて、看護に向いているポケモンだ。
ジョーイは、サトシの腕の中のピカチュウにやさしく声をかけた。
「だいじょうぶよ……痛くないわ……1、2、3……はい」
あっという間に、ピカチュウをサトシの腕からストレッチャーに移しかえた。
「緊急治療室！　すみやかに！」
「ラッキー」
ラッキーは、ピカチュウを乗せたストレッチャーを、受け付けの向こうの緊急治療室に運

び込む。
サトシがあれよあれよという間の出来事だ。
「治療を始めます！」
ぱちん！　ゴム手袋をはめたジョーイが、緊急治療室に入っていく。
あわててサトシがあとを追って聞く。
「あの……オレは」
「あなたは？」
ジョーイは、始めてサトシに気がついたように聞いた。
ジュンサーがサトシの代わりに答える。
「あのポケモンの保護者、ポケモントレーナー志望です」
「オレになにかすることは……」
「反省することね」
ジョーイはきっぱりといった。
「一人前のポケモントレーナーになりたければ……あんなに傷つくまで戦わしちゃだめ……」
サトシは何も言えなくなった。
ジョーイは、きびしく付け加えた。
「あなたに今、できることは、その待合い室で、あのポケモンの無事を祈ること……」
「オレのできることって……それだけ……？」

「治療はわたしにまかせなさい」
ジュンサーはジョーイにもう一度敬礼しながらいった。
「おまかせしまーす。おあと、よろしく。わたくし、街の警備に戻ります」
「いつもごくろうさまです」
ジョーイが軽くジュンサーをねぎらった。
「お勤めだもーん……あ、いけなーい。お勤めの交番、開けっ放しで来ちゃった」
「閉めるとこはしめなきゃ」
「こいつはいけねえ！」
ジュンサーは白バイに飛び乗り飛び出していった。
「治療室の扉も閉めます」ジョーイは治療室へ入っていった。
「あ……ピカチュウ……」
かしゃん。
サトシの鼻先で緊急治療室の自動扉が閉まった。
治療中のランプがついた。

※

ぽっぽ、ぽっぽ、ぽっぽ……
あれから二時間以上……壁のポッポ時計が夜の十時を知らせた。
サトシは待合い室でじーっと座っている。

治療中のランプはつきっぱなしだ。
「あ、電話……」
サトシは受け付けの横にテレビ電話があるのに気がついた。
「電話かあ……」
サトシは、受話器を取りプッシュボタンを押した。
マサラタウンのママ、ハナコの電話番号だ。
「はいはい」
テレビ電話の画面の向こうに、真っ白な白塗りの顔が現れた。
まるで、中国のお化け映画のキョンシーだ。
びっくりしたサトシは画面の中の顔を指さし叫んだ。
「だれだ、お前は」
「見たなあ……」
電話の中の顔はべりっと皮をはいだ。
白い薄皮の下から、ハナコの顔が現れた。
「あ……ママ。じょうだんはよしてよ」
「じょうだんじゃないわ。これはパック。女の子なら週に一度のお肌の手入れ。あぶら性の女の子なら三日に一回はこころがけなきゃね。うん」
ハナコは自分にうなずくようにいった。
「なにしたっていいけどさあ、あの顔で、電話には出ないほうがいいよ」

「一生の不覚……見られたのがサトシでよかった……ん、そういうキミはサトシじゃないの」

やっと電話の相手がサトシであることに気づいたらしい。

「そう、ママの息子のサトシだよ」

サトシはため息をつきながらうなずいた。

「あ……やだ。サトシ！　うちの子じゃない。そこ、どこ？」

どうやら、わが子を心配する母親の気分をとりもどしたようだ。

「トキワシティのポケモンセンター」

サトシはぼそりと答えた。

「あらま、もう、トキワシティまで行っちゃったの？　すごいぞ。うちのパパなんて、トキワシティに行くまで四日もかかったんだよ。それを、たった一日で行っちゃうなんて。ともかく、全財産をはたいて、おまえの旅立ち道具をそろえた甲斐があったというものよねえ」

「全財産をはたいた旅立ちの道具……」

全財産はオーバーにしても、サトシの旅立ちにハナコがやれるだけのことをしてやったことは確かだ。だが、その気持ちが詰めこまれたリュックはいまやぼろぼろである。誕生プレゼントのビリリダマ目覚し時計も壊れて動かない。

そんなことは知るはずもないハナコは、やたらと明るい。

「こうなったら前進あるのみ、パパや、グランパを乗り越えたポケモントレーナーだね。がんばるのよ」

「はいはい」サトシはいまさらハナコに心配をかけたくない。
「はいはひとことで」ハナコが注意した
「はい」素直に答えるしかない。
「歯は朝晩みがくのよ」追い打ちがくる。
「はい」
「寝るときはパジャマをね」そう言いながら、ハナコの目は潤んでくる。
「はい」
「よろしい、じゃ、電話代もバカにならないから……節約するのよ。サトシ……おやすみ……ね」
ハナコは涙の顔を息子に見られたくないのか、電話を切ってしまった。
ツー……電話の切れた音がサトシの耳に響く。
「あ……おやすみ……」
サトシは受話器を置くと、のろのろと待合い室の椅子に座った。
ぼろぼろのリュックから、歯ブラシを出して、つぶやいた。
「歯は磨くよ……オレの口の中、煙突じゃないけどさ」
歯ブラシは煙突掃除のブラシのようにぼろぼろだった。
サトシ、今日、何十回目かのため息をつくと、ふと、待合い室の壁に目をやった。
そこには大きな数枚のレリーフ（浮き彫り）の額縁がかけられてあった。
まるで、原始人か、ピカソが描いた模様のようなものがかけられていた。

額縁の下には、「伝説のポケモン」と記されている。

その中の一つは、夕日に向かって飛んでいった正体不明のポケモンに似ている気がしたのだ。

「あ……これは」サトシは、思わず声を出した。

そのときだった。

さっきかけた電話が鳴りだした。

受け付けにはだれもいない。

「だれも出ないの？」

サトシは、受話器をとった。

テレビ電話のビジョンに白衣の男の後ろ姿が写った。

アルコールランプの火の上の、ビーカーにはインスタントラーメンが煮えている。

大昔に学校の給食で使ったといわれる三つ又スプーンでラーメンをかき回しながら、男は振り返った。

「ばあ……」

オーキド博士だ。

「サトシくん。ワシじゃ、だれだと思う？　オーキド博士じゃ」

「見ればわかります」

「今さっきな、お前のおかあさんのハナコさんから電話があってな。きれいじゃ。まじまじ、きれいな人じゃな」

どうやら、ハナコはサトシの電話があったあと、すぐオーキド博士に連絡したらしい。顔のパックをせずに電話をしたことは確かなようだ。
「そんなこと、オレにはわかんない。本人に言ってください」サトシは、むっとして答えた。
「それが言えたらなあ……」オーキド博士は、しみじみとつぶやいた。
「これ、なんの電話なんですか」サトシは、聞いた。
「お、そうじゃった。サトシくん、トキワシティまで行ったとか。本当か」
「博士。どこに電話してます？」サトシはもう一度聞いた。
「トキワシティじゃ。お、そうか。そこに電話してサトシくんが出れば、そこはトキワシティ……」
「トキワシティのポケモンセンターです……オレのピカチュウが大けがで……」
「そうか」オーキド博士は深いため息をついた。
「つらいことじゃが……だれもが通らねばならぬ試練(しれん)なのじゃ……」
「じゃあ、マサラタウンの、ほかの三人のポケモンも……」
「うにゃ」オーキド博士はあっさり首を振った
「三人のポケモンは大してけがもせずとっくにその街を出て先に行っとるよ。なにしろ、あの子たちの持っているヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネ。あの三つはワシのおすすめじゃからな。簡単には負けけん」
「オレはピカチュウが好きです！」サトシ、むきになって叫んだ。
「うむ。ピカチュウもみがけば光るかもしれん。ピカっとな……いずれにしても、マサラタ

ウンの四人が、一日でトキワシティのポケモンセンターにたどり着くとはな……」
オーキド博士は、感激したようすで、三つ又スプーンを握りしめた。
「これは、ポケモンマスターとしては小さな一歩だが、サトシくんにとっては、おーきどな一歩じゃ。わしは協力するぞ。あてにしとらんかったが、下手な鉄砲も数撃てば当たる」
「下手な鉄砲?」サトシは、意味がわからなかった。
だが、オーキド博士は、人のことなど気にする人ではない。
「マサラタウンから、ポケモントレーナーがひとりでも多く出ればめでたいこっちゃ。ふれー! ふれー! サトシ……さて、」
そこまではしゃいだくせに、いきなり、オーキド博士はまじめな顔になった。
「モンスターボールで何匹つかまえたかな?」
「まだ、一匹も」サトシは事実を答えるしかない。
「一匹も……」とたんにオーキド博士の表情が真っ暗になり、がくんと下を向いた。
「……あてにしたわしがバカじゃった」
「でも、あれに似たのは見ました」サトシは壁のレリーフをさした。
「ん? あれに似たの?」
テレビ電話の向こうから、レリーフをのぞいたオーキド博士は肩をすくめた。
「あれはだれも会っていない伝説のポケモン。お前が会うには百年千年早いわい」
「でも似ていました」
「何が似たじゃ。あ、煮えすぎ……ラーメンがのびる……」

オーキド博士の気持ちは、ラーメンにいってしまった。
ずるずるずると、ラーメンをすすったとたん、
「あっちちち……サトシくん、またの連絡待っとるよ。ならね。さよなら。ならない電話にゃ出られない」
「あ……」サトシに有無を言わせず、ぷつんと電話は切れてしまった。
「あーっ！　いたー」
電話の代りに、後ろで、女の子の叫び声が聞こえた。
「え？」
振り返ると、ぼろぼろの自転車を頭上にふりかざした女の子が、ぜいぜい荒い息を吐きながら立っている。
「やっぱりここにいたわね」
「どうしたの。その自転車」
「あんたのあとを追いかけたら落ちていたのよ。自転車ですって？　あんた、いま、自転車って言ったわよね」
自転車を振り上げたまま女の子はまくしたてた。
「あんた、これが、自転車って言える。まるで食べ残しの焼き魚……こげこげの骨だけじゃない。これが、魚だったら化けて出るわ。どうしてくれるのよ。……あらら……きゃ！」
怒りにふるえた女の子は、そのまま、黒コゲの自転車の重みで後ろにひっくり返ったのだ。
「大丈夫かい」

思わず駆け寄るサトシの手を女の子は振り払った。
「さわらないでよ。ともかくね。私の自転車。このままじゃすまないんだから……」
「なんとかするよ。弁償でもなんでもする。でも、今はそんなときじゃないんだ」
「自転車ぼろぼろにされて、こんなときにそんなときがあるっていうの!」
「オレのピカチュウが……オレのピカチュウがさ……」
「え……?」
女の子はサトシの見つめる緊急治療室の赤ランプに気がついた。
「……そんなに悪いの?」
「たぶん、そうとう……オレ、今どうしたらいいのか……」
「そう……」
そのときだった。赤ランプが消え、治療室の扉が開いた。
ラッキーに運ばれて、ピカチュウを乗せたストレッチャーが出てくる。
「ピカチュウ!　大丈夫か?」
コイルでぐるぐるまきにされているピカチュウの意識はない。
しかし、尻尾と頭の先につけられたランプが心電図のように点滅している。
息をしている証拠だ。
ジョーイがマスクとゴム手袋を取りながらいった。
「危機は脱したわ。もっともポケモンセンターの医者と看護婦に救えないポケモンがあってはならないけれど……ね」

「ラッキー」
　看護をしているポケモンのラッキーがうれしそうに鳴いた。
「さすがポケモンセンター」女の子もにっこり笑う。
「ありがとう。先生」感激したサトシは、それしか言えなかった。
　ジョーイは、はじめてサトシに笑顔を見せた。
「あとは集中治療室で回復を待てばいいわ。いっしょについていてあげなさい」
　サトシは女の子に言った。
「悪い。こんな場合だから……自転車はいつか必ず弁償するよ」
「なに言ってんのよ。そんな場合？」
「え？」サトシは女の子のセリフに驚いた。さっきまで、自転車のことばかり言っていたのに、ころっと変わっている。
「早く看病してあげて。早くったら、はやく」
「あ、ああ」
　サトシはうなずいた。
「なにが自転車よ。いったい何考えてんでしょね。最近の子は……ねえ」
　女の子はジョーイに、そう言った。
　……あなたも最近の子でしょう？……ジョーイは微笑んだ。
　サトシがピカチュウのストレッチャーに付き添って集中治療室へ向かおうとした、そのときだった。サトシが、ポケモンセンターに来てから何度目かの……そのとき……が、ついに

やってきた。今度のそのときは、待合い室に警報ベルが鳴り響く。
スピーカーからジュンサーの声が聞こえてくる。
「警報です。警報です。トキワシティに何者かが侵入した模様。ポケモン誘拐団の恐れがあります。ポケモンをお持ちの方、ポケモンとお友だちの方、充分警戒願います」

※

ぽぽぽぽ……熱気球の音が聞こえる。
すでにロケット団の熱気球がセンターの上空に来ていた。
「ふふふ、警報はもう、おそい」ムサシがクールにほくそえんだ。
「つかまるはずのない、われわれに刑法はいらない」コジロウが言った。警報と刑法をひっかけただじゃれのつもりはなかった。根はまじめな男なのだ。
「しかし、ポケモン誘拐団って呼び名はゆかいじゃないわ……われら正式名はロケット団」
ムサシは、誘拐とゆかいを少しは意識していった。
「その恐ろしさ……思い知らせてやる」コジロウそんなことは気がつかない。
「にゃれーい（やれい！）」ニャースが叫ぶ。ニャースは、自分がリーダーのつもりだ。
だが、ムサシもコジロウも認めていない。
「にゃんころに言われなくても了解だ！……ぴゅううん」
ムサシとコジロウは、ショルダージェットで熱気球から飛び上がった。
「つっこむんにゃ……うまくいったら、われらのボスは喜び庭、駆け回り、ニャースはこた

つで小判じゃにゃ」ニャースは、こたつの上で丸くなっている自分を夢見て、にやりと笑った。
「突撃！」
ムサシとコジロウは空中から二つのモンスターボールを投げた。
モンスターボールはセンターの天窓を突き破ってホールの中に落ちた。
次の瞬間、ムサシの投げたモンスターボールから、ヘビのようなポケモンが飛び出した。アーボだ。
そして、コジロウのモンスターボールからはドガース。丸い岩のようなポケモンで、あばたのような噴火口から煙を吹き出している。
たちまちポケモンセンターの待合い室はドガースの吹き出す煙が充満した。
「なんなんだ！　これは！」
サトシは叫ぶ。
煙の中からロケット団の二人の姿が浮かびあがった。
「なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け」二人のせりふはぴったり合っている。
「世界の破壊を防ぐため」ムサシが言った。
「世界の平和を守るため」コジロウのせりふだ。
「愛と真実の悪を貫く」ムサシが少し力む。
「ラブリー・チャーミーな敵役」コジロウが柔らかく受ける。

「ムサシ」自己紹介である。
「コジロウ」コジロウが続き……
「銀河をかけるロケット団の二人には……」ムサシは、ポーズをとる。ポーズの説明はむずかしい。このポーズは、毎回アドリブでちがうらしいから、説明してもムダである。
「ホワイト・ホール。白い明日が待ってるぜ」コジロウのポーズが決まる。これもアドリブのようだ。
で……、終りかと思えば……、ついでに現れたのがニャースだ。
「にゃーんてな」
と、とどめの決め文句を言ったつもりで、招きネコのポーズをとる。
……だから、何なの？　と、言いたくなるが、それではあまりに大人げない。彼らの登場せりふとポーズは、そうとう練習のあとが見られ、どこか、けなげで、お客さんとしてのわれわれは、思わず見せられてしまうしかない。
しかし、サトシには、そんなゆとりもしゃれっけもない。
言わなくてもいいのに言ってしまう。
「だから、それが、どうしたってんだ」
「わかりの悪いジャリボーイだね」サトシのせりふにしらけたムサシが、肩をすくめた。
「聞かなきゃわかるはずがない」サトシが、当たり前のことを言った。
ならば、とコジロウがまじめに答える。
「われらのねらいはポケモン……」

「オレのピカチュウに手を出すな」
サトシは、ピカチュウのストレッチャーの前に立ちふさがった。
「ん……ピカチュウ？……」ムサシがせせら笑った。
「われらのねらいはピカチュウごとき、そんじょそこらにいる電気ネズミではない」
「われらの目的は、とびっきりそこのけに、珍しーいポケモンだ」コジロウが、ムサシのセリフに追加して、説明した。
「待って、そんなポケモンはこのセンターにはいないわ」ジョーイが言った。
ムサシは、ジョーイがお年ごろの女性だとわかると、友だち同士のような調子で言った。
「ノンノンノン。どうかなあ？　このセンターには病気のポケモンがいっぱいでしょ。ねこそぎいただいていけば、珍しいのもいるかもしれないわ」
「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる」まじめな顔をしてコジロウが言った。
それが彼らのモットー……座右の銘だった。簡単にいうと、こうしたいと強く思っていることを簡単に短くあらわした言葉だった。
「どこかで聞いたような……」サトシは、さっきの電話でオーキド博士がおなじせりふを言っていたことを思い出した。
「下手な鉄砲……それどういうこと」サトシはロケット団に聞いた。
「当たらないとわかっていても、いっぱい撃てば、万が一当たるかもしれない。世の中、まぐれってこともある。宝くじも買わなきゃ当たらない。ダメでもともと、やるだけはやってみようってことさ」コジロウが、辞書を引きながら、ていねいに教えてくれた。

「ほんとは、それがとっても上手なやりかたなのさ。ポケモン泥棒も恋人さがしも結婚もね」ムサシが、なぜか、自分にうなずきながらしみじみと言った。いろいろ苦労しているらしい。

「オレって、下手な鉄砲なわけか……ダメでもともとなわけか」サトシは肩を落とした。

サトシは、オーキド博士の電話から三十分もして、やっとその意味に気づいて傷ついた。

「なんだか頭にきたぞ」拳を握りしめた。

「なにがこようと」ムサシが言った。

「こわくない」コジロウがうなずく。

ムサシとコジロウは毒マスクを取り出した。

「にゃーも」

と言って、ニャースもマスクをつけた。

「こっちの出番はドガースで、ガース」コジロウがドガースを指さした。

「ドガース！」いささか、間の抜けた声を上げてドガースが毒ガスを吹き出した。

だが、そのガスは、あたりにすき間など残さず、一面に充満する。

「いけない！　逃げて！」ジョーイが叫んだ。

「逃がすか、続いてアーボ、ターボ全開でいけ！」ムサシがアーボに命じる。

「シャーボ！」アーボともターボとも鳴かないで、アーボは、待合い室や受け付けをのたうった。

医療機材やパソコンが、火花をあげて、次々と壊れていく。

※

ドガースの毒ガスに追われるようにして、サトシたちは、ポケモンセンターの、病棟に逃げ込んだ。病棟といってもポケモンの病棟だ。病気になったポケモンは、モンスターボールに入って眠っている。だから、病室にはまるで、ボーリング場のボール置き場のように、モンスターボールの棚が並んでいた。

ジョーイは病棟の扉を閉め鍵をかけた。

「この扉は外の空気に混じった病原菌を遮断するの。毒ガスもだいじょうぶよ」

しかし、だいじょうぶを言うのは早すぎた。

ぱしっ！　電球のはじけるような音がして、病室は真っ暗闇になった。

「わ、停電。暗いのやー」

今まで、いつも気が強そうに見えていた女の子が、始めて、心細そうな声を出した。

「電気をやられたようね。でも、だいじょうぶ。自家発電があるから……」

たちまち病室の電気がついた。

「ね……」

女の子が歓声を上げた。

「わーっ……ピカチュウがいっぱい」

病室のなかに、電気工事のおじさんのようなヘルメットをかぶったピカチュウが何匹もいて、回転する円盤の上でぐるぐるぐるぐる回っている。

円盤から火花が散り、電線を通して電気が明かりに送られていた。
病室の電気がつくと同時に壁のコンピュータ画面がつき、コンピュータの発声装置が、
「緊急避難準備完了しました」と、言った。
「今のうちに、病気のポケモンの入っているモンスターボールを送るの……」
「送るってどこに？」サトシが聞く。
「ニビシティのポケモンセンターに伝送するの」
そう言いながら、ジョーイは棚のモンスターボールを片っぱしから壁のダスターシュートのような避難口に放りこんだ。
「みんなも手伝って！」
「ラッキー！」ラッキーが、モンスターボールを運ぶ。サトシと女の子が、ボールを避難口に放りこむ。
ジョーイはコンピュータのマイクに叫んだ。
「こちらトキワシティポケモンセンター、緊急事態発生……ニビシティにポケモンのモンスターボールを伝送します」
ニビシティに回線がつながり、ポケモンセンターの声がした。向こうも、女性の声だ。
「こちらニビシティポケモンセンター……了解しました。モンスターボールを回収します」
壁の画面に地図が写った。トキワシティとニビシティが回線図で結ばれ、モンスターボールが次々に伝送されて行くようすがわかった。
「もう少し……もう少しだわ」

「あ……あれ！」女の子が扉を指さした。
向こうからガスが漏れてくる。
次の瞬間、壁にひびが入った。
アーボが壁を突き破る。
発電用のピカチュウたちが吹き飛ばされる。
残っていたモンスターボールが棚から転がり落ちた。
そのうちの数個が、ころころと病室から廊下へと転がり出ていく。
「あれを助けて！」ジョーイはコンピュータから手が放せない。
「オレがやる！」
サトシはモンスターボールに飛びついた。
「それをおよこし、ジャリボーイ」ムサシが立ちふさがった。
「ジャリが、ボールを扱うのは、玉砂利になってからにしろ」コジロウが、わけのわからないことをまじめに言った。
二人の後ろには、アーボとドガースが控えている。そのまた、後ろには、ニャースがにゃーにゃーと笑っている。
女の子が叫んだ。
「早く、それを投げて！　モンスターボールを投げて戦うのよ」
「え……ああ……いけ！　モンスターボール」
サトシは、手に持ったモンスターボールを投げた。

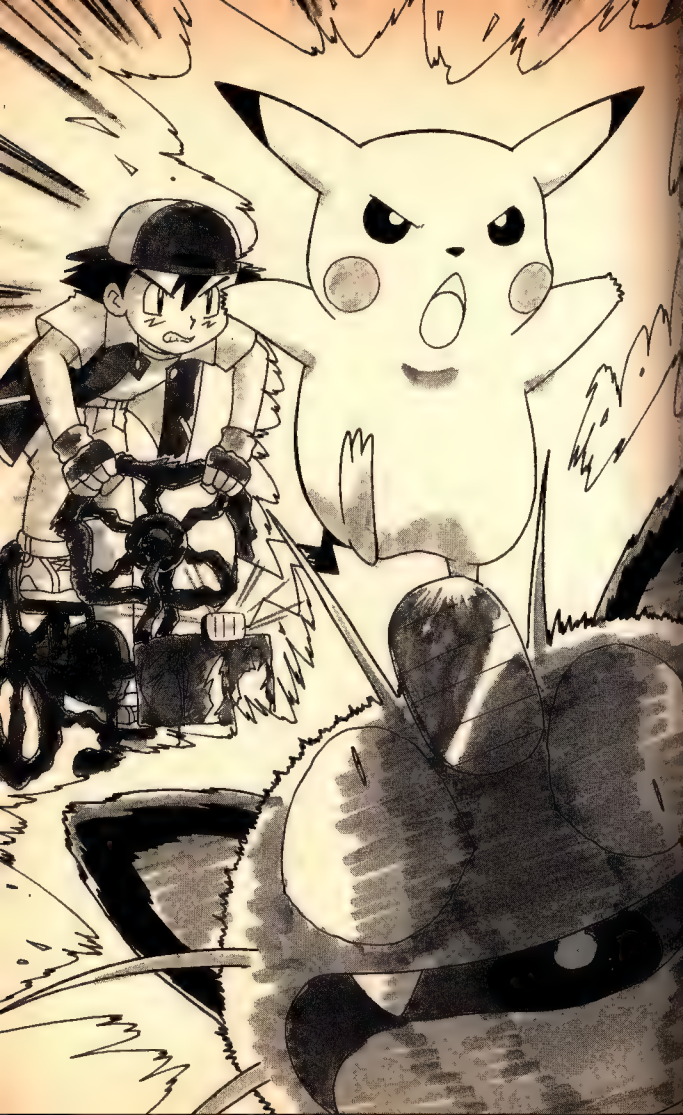
ポケモンセンターのモンスターボールだ。何が入っているかはわからない。
しかし、とりあえず投げるしかない。
モンスターボールは光に包まれた。ポケモンが飛び出す合図だ。
だが、出てきたのはことりポケモン、ポッポだった。
おなじことりポケモンなら、せめてオニスズメでも出てくれれば……。昼間、めちゃくちゃにやられたことも忘れて、サトシはそう思った。
しかし、現実に出てきたのはポッポだ。
「ポッポ時計のポッポが出たって、夜の十二時には早すぎる。わたしたちはまだ、帰らないわよ」ムサシが言った。
「え？　なんのこと？」首をひねったコジロウが、ムサシに聞いた。
「今のせりふ、どういう意味？」
「わかってないのね、深夜の十二時、シンデレラ姫」ムサシはため息をついた。
「あ、ボク、男だから、そのしゃれ、わからなかった」コジロウは頭をかく。
「コジロウ、あんたとつきあってると、ほんとうに十二時になっちゃうわ」
ムサシは、アーボに命じた。
「いけ！　アーボ」
ヘビのようなアーボを見たポッポは身をすくませて逃げた。
「ちぇ！　次いきます！　いけ！　モンスターボール！」
サトシは転がっている別のモンスターボールを投げた。

モンスターボールから出たのは光だけだ。
「あれー?」サトシは首をひねる。
「空のモンスターボールもまじってるわ……」ジョーイが頭を抱えた。
「からっぽ投げてどうすんの! どじ!」女の子がサトシをしかった。
「なのありかよ……ええーい。次、いけ! モンスターボール!」
今度のモンスターボールは、野原で、リュックをかじられたねずみポケモンのコラッタだ。
「ふふふ……そんなポケモン、雑魚と書いて文字通りザコだな」とコジロウ。
コラッタもヘビのようなアーボににらまれてはポッポとおなじだ……逃げるしかない。
女の子はサトシにじれて怒鳴った。
「うんもう! ドジ! わたしが時間をかせぐわ。その間にピカチュウと逃げて」
女の子は、ロケット団とサトシの間に割って入った。
「悪役さん……わたしが相手をするわ」
ムサシは女の子を見下して言った。
「あら? 何だかわけのわからないジャリンコギャルが出てきたわ」
女の子は胸を張って言った。
「わたしは、世界の美少女。名はカスミ」
一瞬、ムサシとコジロウはあっけにとられて、カスミと名乗った女の子を見た。
「世界の美少女?」ムサシは、虫眼鏡を出してまじまじと見た。
「名はカスミね……」コジロウはいちおう、手帳を出して日記に書きこもうとした。電話番

号を聞こうというのではない。ただ、まじめなのだ。
「なははは」ムサシは高笑いした。
「名はカスミねえ。誰が美少女？　どこが美少女？　なぜに美少女？　カスミか雲か、やっぱりわけがわからない」
カスミと名乗った女の子は、顔を真っ赤にして怒った。
「わからせてあげるわ。マイ・ステディの力を」
カスミは、自分のモンスターボールを取り出した。
「マイ・ステディ？」サトシがつぶやいた。
「両親や友だちが公認している学校の恋人のこと」コジロウが辞書を引いて確認した。
「ステディ？　コジャリギャルには十年早いわ」ムサシが言った。
「今日はそのステディを捨てねばならない、捨てデイにしてあげるわ」
「ううう、モンスターボールは捨てるんじゃない。投げるのよ。いけ！　マイ・ステディ」
カスミは、自分のモンスターボールを投げた。
光の中から、ぽーんと出てきたのは……
「なに！」ムサシとコジロウは、出てきたポケモンを見て、開いた口がふさがらなかった。
モンスターボールから出てきたのはきんぎょポケモン、トサキントだった。
金魚と呼ばれるだけに、カラフルな体を床の上でくねらせた。
「トサキント、トサキント、トサキント」
色っぽい声で鳴いてムサシとコジロウにウインクすると、すぐに、モンスターボールに戻

ってしまった。
「なあに、今の」ムサシがコジロウに聞いた。
「ホントにほんとの雑魚ザコだ」コジロウがつぶやいた。
カスミは、得意げに言った。
「ほんの見本よ。だいいちきんぎょポケモンが、水のないこんなところで戦えるわけないでしょう」
「なるほど」サトシは感心してうなずいた。
「まだいたの？　ぼやぼやせずに早く逃げて！」カスミがサトシに叫んだ。
「だよな！」
サトシはピカチュウを乗せたストレッチャーを押して廊下を逃げる。逃げる。逃げるったら逃げる。
逃げたら追うのが、人もポケモンも、おなじ本能だ。
「逃がさないったら」
「逃がさない！」
アーボがストレッチャーに襲いかかる。
サトシはストレッチャーといっしょにひっくりかえった。
そこはさっきの待合い室だ。
サトシの倒れたすぐそばに壊れた自転車があった。
アーボとドガースが迫ってくる。

と、ストレッチャーの上のピカチュウがうっすらと目を開けた。
「ピカ……ピカ……ピカ」
ピカチュウがだれかを呼ぶように鳴いた。
待合い室に、病室にいた発電用のピカチュウが一頭、また一頭と姿を現した。
「ピカチュウ！」
ストレッチャーのピカチュウが、ひと声するどく鳴いた。
発電用のピカチュウがいっせいに放電した。
「そんな」
「ばかな！」
ムサシとコジロウはちりちり黒コゲ。
ドガースはガス漏れ状態。
アーボは黒コゲで直立だ。
放電したピカチュウたちも、疲れ果てたのか、みんな横たわっている。
「ええい、どいつもこいつも……にゃらば出番だにゃ……ネズミはにゃーの好物にゃ」
ニャースが牙を光らせツメをむき、じわりじわりとピカチュウとサトシに近づいてくる。
「ピカ……ピカ……ピカ……」
ストレッチャーの上のピカチュウが、何かを訴えている。
「ピカ……ピカ？」サトシは聞く。
もちろんピカチュウの言葉がわかるはずはない。

だが、今のサトシはわかろうとした。
「ピカ……ピカ？」サトシはもう一度聞いた。
ピカチュウはうなずく。
「もっとピカ……？　もっとピカ？」サトシは二度聞いた。
ピカチュウは、二度、うなずいた
……そうか、電気が欲しいんだ。
「ピカピカピカ、たくさん？」サトシは聞く。
ピカチュウは三度うなずいた。
ころがっている自転車がサトシの目に入った。
「そうだ……にゃんころ！」
自転車を立てて飛び乗ってペダルを回す。
「なにをしているんにゃ？　そんな自転車、走れはしないにゃ。にゃははは」
ニャースが笑う。
「ピカチュウがネズミだからってなめるなよ。オレとピカチュウの本当の力を見せてやる」
自転車のペダルが回る。
車輪が回転する。
ランプをつける発電器がこすれる。
自転車のランプがついた。
「あにゃー？……」ランプに照らされて、ニャースは目を細めた。

ピカチュウは、ストレッチャーから、ぴょんと自転車の上に跳んで発電機に尻尾をつけた。
「にゃ────んと!」
大放電の電撃ショックが、ニャースを襲った。
ほかのピカチュウにも電撃ショックは連鎖反応して広がった。
ポケモンセンターは、たちまち火花に包まれ、まるで、夜空に輝く、建物の形をした仕掛け花火だ。
ムサシとコジロウは、しびれっぱなし。あごが震えて言葉も出ない。
アーボは、硬直してほとんど棒状態。そして、ついにガス漏れのドガースに火がついた。
「どがーんす」
大爆発……ポケモンセンターの天井が吹き飛んだ。
天井とともに、打ち上げ花火のように空高く打ち上げられたニャースとムサシにコジロウは、それでも、しぶとく上空に浮かぶ熱気球にしがみついた。
アーボとドガースも、しっかりついて離れない。
「快感! 電気びりびりより、ドカーンの花火のほうがましだわ」
ムサシが負け惜しみを言った。
「ひゅーどかーん! かぎや! たまやー! なんてね」コジロウが、やけっぱちでわめいた。「かぎや」「たまや」は、昔、花火大会で、よく聞かれた掛け声だった。
ニャースは叫んだ。
「たまじゃにゃーい。にゃーはにゃーすにゃ……(ミーはニャースだ)」

たまは、昔よく、ネコを呼ぶときに使われた名前だ。
そして……
「にげるにゃー」逃げるなと言ったのではない。逃げろと言ったのである。
でも、ポケモンセンターの前には、白バイで駆け付けたジュンサーがいた。
「逃がさないわ」
白バイのアクセルを入れた。
「トキワシティの白バイをなめるんじゃないよ！」
白バイは、崩れかけたポケモンセンターの壁を駆け上がり、その勢いで、空に飛び出し熱気球の腹をぶち抜いた。
「やったね！」
無事に着地した白バイから、ジュンサーはVサインだ。
熱気球はしぼんだ風船のように、夜空の彼方に飛んでいく。
「やなかんじ――！」ムサシとコジロウの悲鳴が、飛んでいくロケットのように遠ざかっていった。

※

翌朝……廃虚になったポケモンセンターで、ジョーイはニビシティのポケモンセンターにテレビ電話をした。
電話に出たニビシティの医者が言った。

「トキワシティのポケモンは無事回収したわ」
「ありがとう、こちらのセンターが元どおりになるまで、伝送したトキワシティのポケモンをよろしくね」
「あらま……」
後ろからテレビ画面をのぞきこんでいた白バイのジュンサーが、つぶやいた。
「あの人がニビシティのお医者様？」
テレビ電話に写ったニビシティのポケモンセンターのお医者さんは、名前も同じだが、顔もジョーイにそっくりだった。
「わたしのお姉さん。だから名前も同じ、ジョーイ。もっともこの国のお医者さんはほとんどジョーイって名前だけどね」
ジョーイが微笑(ほほえ)んだ。
「わたしがたぶん、いちばん美人」
「そういうことなんだ。……お医者さんも」
ジュンサーが、にっこり笑った。
「この国のお巡りさんもほとんどジュンサー。でもいっちゃん、かーいいのはわたし」
「おたがいね」と、ジョーイが言えば。
「おたがいね」と、ジュンサーが答える。
「聞こえてるわよ」と、ニビシティのジョーイがこちらをにらんだ。
トキワシティのジョーイはあわてて、話題を変えた。

「あ、お姉さん。それからね、がんばってくれた男の子と女の子とピカチュウ……今朝早くに、お姉さんのニビシティに向かったわ。でも、その前にトキワの森があるからなあ」
トキワの森は、ポケモントレーナーを目指す初心者には、難所といわれる森だった。
「だいじょうぶよ……あの子たちならトキワの森なんて……」
「そうね。きっとね」
ジョーイは、電話の向こうのジョーイに言った。
「お姉さん、ニビシティについたらあの子たちをよろしくね」

※

トキワシティで、そんな大騒ぎがあったことを、サトシのママ、ハナコは知らなかった。
けれど、朝方まで、ハナコは起きていた。
サトシがトキワシティに着いたという電話を受け取ってから、なんとなく眠れなくなってしまったのだ。
ハナコは、本棚からアルバムを取り出してページをめくり始めた。
そこには、生まれたばかりのサトシの写真があった。
やっとハイハイを始めたサトシもいた。
テーブルをつたってやっと歩き始めたサトシもいた。
一枚の写真に、ハナコとサトシの思い出が三十は詰まっていた。
だから、全部で二十冊はあるサトシとハナコの思い出のアルバムをめくり始めると、もう、

止まらなくなった。
気がつくとあたりはすっかり明るくなっていた。
……いけない……今日の特別昼定食の仕入れをしなければ……
でも、ハナコはどうしても、アルバムの最後のページまで目が離せなくて、お店の開店を三十分だけ遅らせることにした。
ハナコはしっかりものという評判の女性だ。
昨日のお弁当にしろ、今日の開店遅れにしろ、ハナコが、この店を取り仕切るようになってからはじめてのことだった。
……仕事は仕事……子供が旅立ったからといって、こんなことではいけない！
ハナコはものすごく自分を反省したが、マサラタウンのだれも、そんなハナコの悪口を言うものはいなかった。
母親ひとりで、しかも三十歳にもならない女性が、ひとりの子供を育て旅立たせたのだ。
次の日も、次の日も、ハナコのお店の客は、増えはしても減ることはなかった。

※

サトシたちに話を戻そう。
トキワの森……夜も暗いが、昼でも暗い。
その暗闇の中で……
「きゃーっ！」

女の子の悲鳴が響いた。
カスミの声だった。
気の強いカスミが、始めて出した悲鳴だった。

（五章に続く）

四章のふろく

（……お急ぎの方は五章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

……モンスターボールによるポケモン伝送システムについて……

全世界国際通信協会よりニッポン通信関連局に送られた未公開文書

近代における通信システムで特筆すべきものは、いうまでもなく郵便であります。けれども、ここで、千六百五十三年に仏蘭西（ふらんす）の巴里（ぱり）で始まった郵便ポストや、千八百三十九年、英吉利（いぎりす）ではじめて使われた切手の話をするつもりはありません。
さらに、千八百四十三年に英吉利（いぎりす）のクックという人が特許をとった電報。千八百七十六年、かの有名なグラハム・ベルが特許をとった電話のこと（発明者は別の人だといわれています

ません。

わたしが申し上げたいのは、いながらにして遠方の相手と通信できる手段としては、大昔に発明された郵便や電話や無線とたいして変わらないものが、いまだに使われているということであります。

通信技術の発達でファックスになり、携帯電話になり、パソコン通信になり、テレビ電話になったにしろ、そこで、送られているのは、実物ではないのです。インターネットで地球の裏側の人の顔を見ながらお話をしていても、実際の相手と、面と向かって会っているわけではありません。それは、電波の信号で送られた写真であり映像であり、電波を通した声でしかないのです。

やはり本物の相手に会うには、自分が行くか、相手に来てもらうしかありません。けれど、それには時間がかかります。どんなに交通手段が発達しても、瞬間的に相手のいる場所に行けるわけではありません。

何とかして、通信で人間自身の体が送れないか。これが、長年の科学者の夢でありました。それが、通信による人間の瞬間移動。人間の体を電気の信号に変えて送る、いわゆる電送人間であります。

しかしながら、世界中の科学者の必死な研究にもかかわらず、実物のものは、生き物はおろか、鉛筆の一本すら通信で、送ることはできないでいます。

やがて、学者たちの間で、物質を電気の信号に変えるのは不可能ではないかというあきら

めの気持ちが広がっていきました。これを、物質通信不可能理論と呼びます。
しかし、今世紀はじめ、とんでもない発見がされました。
それは、三歳の子供のたわいのないいたずらがきっかけでした。
ご存知のように、子供は、特別の許可がないかぎり、モンスターボールの使用は禁止されています。
しかし、その子は、どうしてもモンスターボールが欲しかったのです。
その子は、父親のモンスターボールをこっそり持ち出し、家にあったコピー機の上に乗せました。コピーで、複写すればもう一つモンスターボールができると思ったのです。
子供なら考えそうなことですよね。ただ、ここで重要なことは、子供の持ち出したモンスターボールは、空ではなく、ポケモンが入っていたことです。そして、そのコピー機には、ファックス機能がついていました。というより、コピーのできるファックスだったのです。
その子は、コピーボタンとファックスのワンタッチボタンを押しまちがえました。
ワンタッチボタンには、父親の会社が登録されていました。
同時刻……父親の会社のファックスが、紙詰まりをおこしました。分解して調べた結果、紙詰まりの原因は、そんなところに入るはずのないモンスターボールでした。
つまり、自宅から会社まで、モンスターボールは伝送されていたのです。
なぜ、ファックス機の中にモンスターボールが入っていたのか？
ただし、そのモンスターボールに入っているはずのポケモンは、どこにいったのか見つかりませんでした。自宅に帰った父親は、モンスターボールが、突然、コピー機の上からなく

なってしまったので、どうしていいかわからず、泣きじゃくっている子供を見つけました。
学会はこの事実を知り、大騒ぎになりました。
モンスターボールは、どこにでもあるポケモン携帯用、捕獲用のモンスターボールです。
モンスターボール自体に、ファックスで伝送できるような要素はありませんでした。
とすれば、中に入っているポケモンに力があった。
自分の体とモンスターボールを通信できるような電気の信号に変える能力があったと考えるよりありません。
調査の結果、それが、ありとあらゆるポケモンが持つ、共通の能力であることが判明しました。
これを、難しい言葉で、携帯獣通信能力（略して携通力……またはポケコム）といいます。
ポケモンは、モンスターボールのような小さなものの中で眠っているとき、自分の体と、自分の入っている容器を電気の信号に変える能力を発揮するのです。
ただし、そのポケモン自体がその能力を知っていて使っているかどうかはいまだに不明です。
その後、学者たちは研究に研究を重ねました。
初期の実験のころには、通信によってモンスターボールは届いても、中のポケモンが、行方不明になる事故が多発しました。
電話回線を使うファックス通信や、一般のパソコン通信では、通信状態が悪く事故が多す

ぎて、現在、禁止されていることもご承知のとおりです。
現在、モンスターボールの材質も改良に改良を重ね、ポケモンを通信しやすいモンスターボールが続々開発されています。
しかし、モンスターボールをふくめて、ポケモンがその中に入っていないものは、いかなるものも通信不能です。
すなわち、ポケモンが入っていれば、その材質によっては、おサイフや筆入れでも、通信伝送できるかもしれません(事故が多いので、禁止されています。伝送の際はポケモン通信公認規格のモンスターボールをお使いください)。
ただし、繰り返しますが、どんな最新式の公認モンスターボールでも、中にポケモンが入っていなければ、通信伝送は不可能です。
つまり、この世界で、物質、生き物をふくめて、実物のものを、ほかの場所に通信できるのはポケモンだけなのです。なぜそれが、ポケモンにかぎって可能なのか。これも、ポケモンが、科学者やアマチュアの研究者の心をとらえて離さない大きな謎の一つなのです。
なお、通信回線としては、現在、もっとも理想的なものはポケモンセンターのコンピュータネットに使われている専用回線ならびに、ポケモン通信衛星を使用するポケモンサテライト通信ですが、一般的には、われわれ全世界国際通信協会の大容量通信ポケネットがおすすめです。ほかの未公認通信ネットを使うマニアもおりますし、まれに料金の安いインターネットを使う方もおりますが、ポケモン通信には状態が不安定でおすすめできません。
かくのごとく、長々とここまでご説明いたしましたのは、早い話が、ポケモン通信におけ

る料金改正のお願いをいたしたいわけでございます。
全世界的ポケモンブームの折から、ポケモン通信利用者は増大の一途をたどっております。
通信とはいえ、ポケモンは生き物であります。ポケモンの安全性、また、ハッカーによる盗難事故……これは盗難というより、ことが生き物だけに誘拐と呼んでもいいと思いますが……それらを防ぐため、ポケモン関連の通信使用料に関して三十パーセントの値上げを申請したいと考え、ここに、意見打診いたします。

○○○○年○月……（秘密保持のため、年月日や個人名は不明）
ニッポン通信関連局……審議会様

全世界国際通信協会・料金改正委員会　有志

注1)　意見打診とは、会議や打ち合わせの前にこっそり相手の考えを聞くこと。手回し、根回しともいう。
今回の場合……毎年のように消費税が上がっているときに、さらに値上げすると国民や、ポケモンが怒り出す？　かもしれないという理由で、却下されたらしい。

……「秘録　ニッポンのポケモン犯罪対策　通信編　資料」
元・警視総監　第八百九十三代　ジュンサー・ゼニガタ著　よりばっすい

第五章　森を抜けて……

トキワの森……昼なお暗い闇の中で……
「きゃーっ！」
その場にしゃがみこんだカスミは、茂みの奥を指さした。
「なに？」
カスミの悲鳴のあまりのけたたましさに、びっくりしたサトシとピカチュウは、茂みに向かって身構えた。
別に恐ろしげなものが潜(ひそ)んでいるようには見えない。
「なにがあるっていうんだ？」
「あんたには、あれが見えないの？」
カスミの震える指の先が下に降りてくる。
「え？」
よく見ると、茂みの下の草むらがかすかに動いている。
そこになにかがいたにしても、カスミが腰を抜かして大騒ぎするようなものには思えない。
「なんなんだ？」

サトシは草むらをのぞきこんだ。
ひょこっ！
小さな丸い頭のポケモンが首を出した。頭が、周囲の草むらと同じ緑色なので、いままでよく見えなかったが、体長三十センチあまり、動きもさほど速くなく、注意深くさがせばすぐ見つかる、森のいもむしポケモン……キャタピーだ。
サトシがポケモントレーナー初心者だとしても、つかまえるには相手不足ともいえる弱いポケモンだ。
「なんだ。キャタピーだ。かわいいいもむしポケモンだよ」
カスミは、ぶるぶる震えながら首を振った。
「ポケモンでも虫はやー。虫は無視。虫が好かない。あんたがなんとかしなさい。それが男の子でしょう」
「よーし。いいだろ。今度こそオレがゲットしてやる」
本来、ポケモンをゲットするには、自分の手持ちのポケモンと戦わせて、相手を弱らせ、モンスターボールで、捕獲(ほかく)する。
「ピカチュウ？」
サトシは、ピカチュウの様子をちらりとうかがったが、相変わらず、「わが道を行く」といった感じでそっぽを向いている。
昨日今日と、いちおう、仲よしにはなったつもりだが、やはり、よほど気が向かなければ、サトシを手伝ってくれそうにない。

……そうかい。そっちがその気なら……オレはだれの力も借りない……キャタピーぐらい、オレだけでゲットしてみせてやる……

サトシは、空のモンスターボールを手にした。

ポケモンセンターを出るとき、空のモンスターボールを、ちゃっかり五つほどもらってきていたのだ。

「いくぜ。キャタピー」

サトシはモンスターボールを振りかぶり、力いっぱい投げた。

ボールがキャタピーにぶつかる瞬間……ボールから閃光がほとばしり、キャタピーの体を包んだ。

次の瞬間、キャタピーの体は閃光に包まれたまま、モンスターボールの中に吸い込まれていった。

そして、今までキャタピーのいた場所には、モンスターボールだけが転がって、ことこと動いていた。

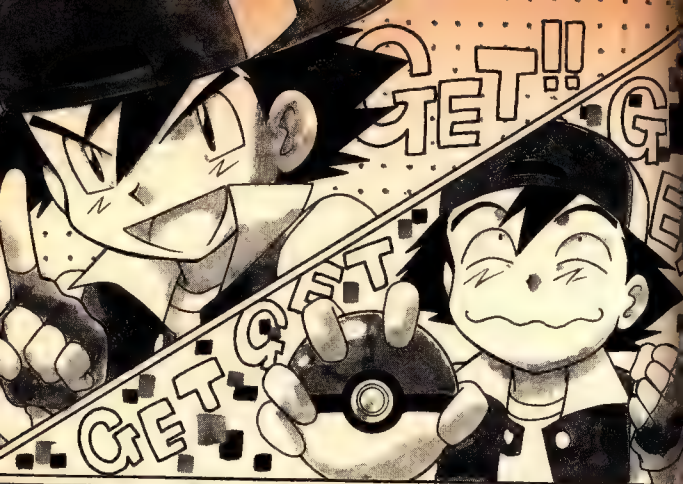
もし、ゲットに失敗すれば、再びボールから閃光がふきだし、キャタピーが飛び出してくるだろう。

サトシは、モンスターボールのようすをうかがった。

どれだけの時間がかかったろう……ほんとうは数秒間だったが、サトシには、それが、何時間にも感じた……モンスターボールは、ぴたりと動きを止めた。

「ゲットだ……ゲットだね？」

カスミに聞いた。
「見りゃわかるでしょ」
「ゲットだよな」
ピカチュウに聞く。
ピカチュウは、うなずいた。
サトシは、体が震えてきた。止めることができなかった。
……はじめてのゲット……これは、トレーナー・サトシの輝かしい第一歩。
「キャタピー！　ゲットだぜ！」
サトシはモンスターボールを拾い、頭上に掲げるポーズをとった。
「ゲットだぜ！」「ゲットだぜ！」「ゲットだぜ！」
自然とその言葉が口から出てきた。ポーズも自分にぴったりな気がした。
ともかくやったぜって感じで、素直な気持ちで、自然に出てくるカッコ。それが、オレにいちばん似合ったカッコ………確かにママの言うとおりだ。
「ゲットだぜ！　これに決めた！」
そこでやめておけばいいのに、サトシは小躍りして有頂天だ。
「やりました！　サトシくん。すごいです！　サトシくん。キャタピーは小さいけれど、このゲットはマサラ小学校出身、サトシくんの偉大なゲットへの第一歩なのです！」
続いて、直立不動の姿勢で小学校の校歌を歌い始めた。
学校でも、いつもは鼻歌まじりで、最後までまともに歌ったことのない歌だ。

GET!!
GET GET
GET
ゲットだぜ
ゲットだぜ

「なんだかなあ……ばっかみたい」
カスミがあきれてつぶやいた。
「ばっかみたいとはなんだよ」
サトシは、モンスターボールをカスミの鼻先につきだした。
「きゃっ！　なんのまね！」カスミの髪の毛が逆立った。
「よく見ろよ。このモンスターボールの中に、オレがはじめてゲットしたポケモンがいるんだぜ」
カスミは顔をそむけて後ずさる。
「ちょっと近づけないで……モンスターボールに入っていたって虫は無視……」
「ムッシシシの無視だって、オレは、無視しないもんね。ピカチュウだって外にいる。キャタピーだって外にいてもいいよね」
「ちょっと……まさか」
カスミは深呼吸して悲鳴を準備する。
「キャタピー、出てこい」
モンスターボールからキャタピーが、勢いよく出てきた。
「きゃーきゃーきゃ――――！」カスミが肺活量を全部使い切って悲鳴をあげた。
サトシは、悲鳴が聞こえたそぶりもみせず、キャタピーに言った。
「さあ、オレの肩に乗れよ！」
キャタピーは、サトシとカスミを交互に見比べた。

そして、凍りついたようにすくんでいるカスミを見つめ、体をキャタキャタと震わせた。
どうやら、このキャタピーは、オスらしく、となれば、どうやら女の子のカスミのほうが気に入ったらしい。
キャタピーは、サトシとピカチュウを完全に無視して、いもむしポケモンとしては、最高のスピードで、カスミにすりよっていく。
キャタズリ……キャタズリ……
カスミの顔は、ムンクの叫び状態を通りすぎたゆがみようだ。
「ひいいえええええ……え、よして、やめて、こないで」
「なんで、そんなに嫌うんだよ」
「なんでもかんでも、ともかく、わたしは虫がすかないのよ！」
「よく見ろよ。よく見ればかーいいじゃんか」
「見たくない、見たくないからかわいくない」
キャタピーにどれほど人間の言葉が理解できるかはわからないが、少なくとも、相手が自分を好きか嫌いかは理解できるようだ。
キャタピーは、キャタズリを止めて、うつむいた。
「あーあ、キャタピー。傷ついた」
ピカチュウもキャタピーの気持ちがわかったように、うなずいた。
「あ……」カスミも少しだけ、キャタピーがかわいそうな気になったが……
「ほんと、カスミってやーなやつ」

サトシの言葉が、カスミの態度を硬くした。
「あんたになんか好かれたくないわよ。いい、ニンジン、ピーマン、虫、人間好き嫌いがあって当たり前」
「好き嫌いはやめましょうって、お母さんから教えられたことないのかよ」
「お母さん？　わたしね、あんたみたいに、いまだにお母さんお母さん……ママママ……そんな人の言いつけを守んなきゃならないほど、ジャリガキ子供じゃないわ。好きなものは好き、嫌いなものは嫌い、ちがいのわかる女の子……子供が女性に、幼い口出しは、おやめなさい」
どうやらカスミは、ひとこと言うと三倍返ってくる、サトシの苦手なタイプの女の子のようだ。たとえば、大人になったらサトシのママのようになりそうなタイプだった。
……お母さんの話を出したのは失敗だった……
サトシは後悔した。だいたい、女の子と口げんかして勝ったことは一度もないサトシだ。こういうときに出てくるサトシの言葉は決まっている。
「ちぇ、勝手にしろ」
「勝手にするわよ」
サトシは、キャタピーを抱き上げた。
「オレは、オレのポケモン、好きだ。大好きだ。カスミなんかより、ずーっとかわいい」
「ふん、キャタピーがわたしよりかーいい？　わたしのかわいさに、虫を引き合いに出すなんて、虫くだしもんだわ……今後いっさい、無視だかんね」

「キャタピー、虫は無視同士、騒音は無視して、オレの、肩に乗ってろ」
サトシは、キャタピーを肩に乗せた。
「好きにやってりゃ！　わたし、もう、つきあえないわ」
「じゃあ、なんで、オレといっしょに来るんだよ」
それは、言ってはならないひとことだった。
「自転車！　あんた、まさか、とぼけて、逃げようっていうんじゃないんでしょうね」
「自転車、自転車ってしつこいぞ。オレを信用できないのか？」
「わたしより、その虫がかーいいなんていうやつ、信用できる？　だいち、あんたが、わたしの自転車壊さなきゃ、こんな気持ちの悪い森、とっとと抜けられたんですからね。自転車の責任、感じてんの……」
「かんじてんしゃ……なんちゃって」
口では勝てないサトシのだじゃれがますますカスミを、怒らせる。
「信じられない！　こんなときにそんなだじゃれ……誠意がないわ。警察に訴えてやる」
「勝手にしろ！」
「勝手にするわ！」
「オレは、この森を抜けたら、次の町にいる。逃げも隠れもしないぞ」
サトシはキャタピーを肩に乗せたまま、ピカチュウの手を引くようにして歩き始めた。
カスミは、数メートル離れてついてくる。
サトシは振り向いて怒鳴った。

「なんでついてくるんだよう」
「帰り道も、次の町の警察も、こっちの道がいちばん近いの！」
「勝手にしろ！」
これしか言いようがない。
「勝手にしてるわよ」
カスミもこれしか言いようがなかった。
ともかく女の子がひとりで歩くには、その森は暗すぎた。

※

折り重なった森の木の枝の向こうから、かすかに月の光がもれている。
その夜は森の中の野宿になった。
サトシとカスミは、大きな木の切り株を挟んで、右と左に別れて、寝袋に入った。
考えてみれば、サトシがマサラタウンを出てから今まで、少しの暇もなく、駆けずり回っていた気がする。とことん疲れていた。
カスミもそうだ。サトシに自転車を持っていかれてから、追いかけっぱなし。おまけに、口げんかを始めたら止まらない舌もサトシ相手に回しっぱなしだ。虫嫌いのカスミとしては、すぐそばに、サトシのゲットしたキャタピーがいるのを知っているのだが、眠気で重くなるマブタを押さえることができなかった。
二人は、いつの間にか、ぐっすりと眠りこんでいた。

でも、だれよりも疲れていたのはピカチュウだろう。
モンスターボールの中に入れれば、ゆっくり休めることは知っていた。しかし、入りたくないという意志を見せたのはピカチュウ自身だ。
今後も絶対に入る気はない。人に飼われているポケモンとしては、かなり変わった性格だとは思うが、生まれついたときからの性格は変えようがなかった。
しかし、モンスターボールに入らずにいるポケモンというのも、あまり楽ではなかった。餌を見つけるには、夜のほうが都合がいいからだ。真っ昼間から、野山を駆けずり回っているネコやネズミ系の野生のポケモンはピカチュウに限らず、夜行性のものが多い。餌を見つけるネコ系やネズミ系の野生のポケモンはピカチュウに限らず、夜行性のものが多い。ネズミがいるとしたら、それはほとんどアニメか映画やテレビのフィクションだ。
本来、ネコやネズミは、昼間は眠って、夜、動きまわる。ところが、人間は昼間、動き回る動物だ。飼われて人間とつきあうポケモンも、どうしても昼型になる。
動物園のポケモンを見ればよくわかるのだが、昼型に変えられたポケモンは、ちゃっかり夜に眠っている。眠っていても敵から襲われる心配のない檻の中や、モンスターボールの中だからこそ安心して休んでいられるのだ。しかし、そのポケモンがモンスターボールに入らないとすれば、当然、夜は危険な時間になる。
夜こそ、彼らの活躍の場だからだ。
ピカチュウのポケモンとしての本能は夜行性だ。だから、夜は、神経が過敏になっている。モンスターボールの中にでも入らないかぎり、ピカチュウの夜は不眠症なのだ。危険の少ないオーキド博士の研究所にいたときは、まだ、昼寝もできた。ところが、旅に出てから今ま

での冒険で、眠る時間がない。ポケモンセンターの治療中に、麻酔で眠らされてはいたが、あれは、痛みをやわらげるための眠りで……休養になる眠りではなかった。これで夜のモンスターボールお断りでは……けっこうつらいものがあった。

しかし、本能は本能……夜になればなるほど、ピカチュウの神経は研ぎ澄まされ、あたりの気配に異常があれば、すぐに動ける体になっていた。

かさっ!

木の茂みが動いた。

茂みの中から、何かがこちらを見つめている。

ピカチュウは身構えた。

だが、「チュー」……小さい息を吐き、すぐに力を抜いた。

茂みの向こうのものに、何か、懐かしいものを感じたからだ。

がさっ!

茂みの向こうのものが、素早く動いた。

月の光に浮かび上がったのは、ピカチュウそっくりの黄色いポケモンだった。

ピカチュウそっくりなのも無理はない。そのポケモンは、野生のピカチュウだった。

しかも、野生のピカチュウは、ピカチュウの知らない甘い香りを放っていた。

それは、野生のメスのピカチュウだったのだ。

オーキド研究所で育ったピカチュウは、ポケモンセンターの自家発電用のピカチュウたちを見るまで、ほかのピカチュウに会ったことはなかった。それどころか、ほかのポケモンか

ら も、できるだけ離して育てられていた。ポケモントレーナー志望者に渡される最初のポケモンは、できるだけ最初の飼い主に慣れるように、ほかの人間やポケモンの情が移らないよう、隔離(かくり)されているのが普通だったのだ。
それにロケット団に襲撃されたあの騒ぎのなかでは、仲間のピカチュウと友だちづきあいをする時間はなかった。そんな時間があったにしても、おなじ飼いポケモン同士だ。野生のピカチュウを見た、今ほどの驚きはない。
「ピカチュウ」ピカチュウは……待って……と言いたい気持ちで、野生のピカチュウを呼び止めた。
野生のピカチュウは、止まって振り返った。
……キミは、本当にピカチュウなの？……
ピカチュウは聞いた。
野生のピカチュウは、何も答えない。
ピカチュウの言葉が通じているのかすらわからない。
だが、野生のピカチュウはじっと止まってこちらを見ている。
ピカチュウはうれしくなった。
……悪い感じはしていないようだ……
ピカチュウは、野生のピカチュウに駆け寄った。
野生のピカチュウの放つ甘い香りで、気が遠くなりそうだった。
ピカチュウは、どうしていいかわからず、おずおずと前足を出した。

人間が仲よし同士の時にやる握手というものをしてみようと思ったのだ。
野生のピカチュウは、ピカチュウの前足をちらっと見た。
次の瞬間、がりっ！　ピカチュウの前足をかじった。
そして、毛を逆立てて威嚇した。
……さわるな……とでも言いたそうだった。
ピカチュウはあまりの反撃に、ピカとも言えず立ちすくんだ。
……どうして……
チュー！　別の茂みから、攻撃的なうなり声がした。
茂みから、もう一匹の野生のピカチュウが現れた。
野原や森を駆け回っていたのだろう、そのピカチュウの毛並みはすり切れ、やせ細った体は傷だらけだった。
人間だったら、だれだってサトシのピカチュウのほうが、素敵で、カッコよく、かわいく見えただろう。
しかし……。
野生のメスのピカチュウはちがっていた。
メスのピカチュウは、やせ細ったピカチュウに駆け寄ると、頭をすり寄せた。
やせ細ったピカチュウは、するどく鳴いた。
……飼われたポケモン……嫌い……出てけ……
メスのポケモンも鳴いた。

……嫌い……怖い……出てけ……

ピカチュウには、野生のポケモンの言葉の意味が、よくわからなかった。

人間が外国語を聞くような感じだった。

でも、意味はなんとなくわかった。

野生のピカチュウと飼われているピカチュウはちがう……ということ。

飼われているピカチュウは嫌いだ……ということ。怖い……ということ。そして、この森から出ていけ……と言いたいのだということ……。

野生のオスとメスのピカチュウは、頬をすり合わせながら、けれど、立ちすくむピカチュウへの、警戒の姿勢は崩さずに、じりじりと後ずさっていった。

そして、安全な距離を見計らうと、くるりと背を向けて、茂みの中に消えていった。

やがて、茂みのずーっと遠くから、二匹のピカチュウの、歌うようなじゃれあうような鳴き声が聞こえてきた。

残されたピカチュウは、ぽつんと立っていた。

ピカチュウは、夜空を見上げ、木の枝の間から見える月に向かってかすかに鳴いた。

「ピカ」

月はなにも答えてくれなかった。

それでも、ピカチュウは月を見上げていた。

やがて、かたわらでものがこすれるような音がした。

すぐそばに、サトシのゲットしたキャタピーがいた。

ピカチュウが普通だったら、そんな近くまでキャタピーが来ているのに、気がつかないはずはなかった。
しかし、気がつかなかった。
それだけ、ピカチュウは、ぼんやりしていたのだ。
それほど、野生のピカチュウから見せられた仕草がショックだったのだ。
「キャタキャタキャタ」
キャタピーが、ピカチュウになにかを話そうとしていた。
「ピカ？」
ピカチュウは答えた。
お互い、なにを言っているのか、はっきりはわからなかっただろう。
でも、ピカチュウは、野生のピカチュウよりゲットされたキャタピーの言っている言葉のほうがわかるような気がした。
「キャタキャタキャタ」
キャタピーは、一生懸命、なにかを言おうとしている。
「ピカピカピカピカ」
ピカチュウも、一生懸命、答えようとする。
二匹は、サトシという、ポケモントレーナーとしては、あまり頼りになりそうに見えない男の子と、これから行動を共にしなければならないポケモン同士なのだ。
しかも今は二匹だけ……これから、うまくいこうとしたら、ピカチュウとキャタピーが、

がんばるしかないのだ。
お互い、言葉がわからなくても、言いたいことは同じだ。
……相棒……がんばるキャないピカ……だ。
野生の世界のことが気にはなるけど……ここは、ヤセがまんだ。
ピカチュウは、キャタピーといっしょに月を見上げた。
そのときだった。月を横切って、ひらひらと銀の粉をまきながら飛んでいくポケモンの影が見えた。
それは、バタフリーというチョウに似たポケモンだった。
バタフリーは、いもむしポケモン、キャタピーが進化した先のちょうちょポケモンの一種である。
「キャタキャタキャタキャタ！」
キャタピーが、興奮して鳴いた。なんだかとても喜んでいる。
バタフリーが、キャタピーの進化した先の姿などということを、ピカチュウが知るはずはなかった。
でも、キャタピーが、バタフリーの姿を見て、張り切っていることはわかった。
ピカチュウもわけもなくうれしくなって、キャタピーに答えた。
「ピカピカピカ」
「キャタキャタキャタキャタ！」
「ピカピカピカ」

キャタピーとピカチュウは、夜遅くまで話し続けた。
その話の内容がどんなものであったか、話しているポケモン同士のピカチュウとキャタピーですら、わからなかったかもしれない。けれど、わかっていることがひとつあった。
二匹が、友だちだということ。それだけがわかれば、お互い訳のわからないことをしゃべっていても、おしゃべりしていることが楽しかった。
人間だってポケモンだって、おしゃべりの楽しさって、そんなものかもしれない。
言葉のわけがわからなくても、楽しいものは楽しいのだ。

※

「きゃーっ!」
次の日の朝は、カスミの悲鳴から始まった。
「なんだなんだなんだ、だんな」
サトシは飛び起きる。
「だんなじゃない、わたしは、カスミ、で、なんでムシなの!」
「無視したのはお前じゃないか」
「無視しているのになんでムシなの!」
わけのわからないやりとりに、サトシが、わけをわかろうとして、まじまじとカスミを見た。
カスミの寝袋にキャタピーが、ちゃっかり入りこんで、頬すりよせて、眠っている。いや、

眠っているのはキャタピーだけで、カスミは、目の前のキャタピーに、腰が抜けて動けないだけだった。動けなくても、口だけは動く。
「なんで、キャタピーが、わたしと寝ているのよう。この、チカン、変質ポケモン」
なんで、と聞かれても、キャタピーには答えられなかったかもしれない。
ピカチュウとのおしゃべりで楽しくなったキャタピーは、いささか調子に乗って、どうせ寝るなら、サトシより少しは柔らかそうなカスミがいいと思ったのかもしれない。
だが、それは、女の子にかわいいと言われるピカチュウすら、考えたこともないだろう……恐れを知らぬ行動だった。
なぜなら、目の前のカスミから、矢のような悪口を浴びる羽目になったからだ。
「嫌い」から始まって、「無視」までは言われ慣れたとしても「チカン」「変質ポケモン」とまで言われてはたまらない。
その、意味はわからなくても、言葉の圧力が、ズキリズキリと突き刺さる。
「ポケモンならポケモンらしく、寝てるときはモンスターボールから出てこないで！」
あまりの言葉の強さに、ピカチュウまで、叱られている感じで首をすくめた。
キャタピーは、カスミの寝袋からのろのろとはい出した。
そして、うなだれたまま、サトシのリュックのかたわらに置いてあったモンスターボールの中に、吸いこまれていった。
サトシがあわててモンスターボールをノックした。
「キャタピー、元気ですか？」

モンスターボールからは、なんの応（こた）えもない。
サトシはカスミに食ってかかった。
「言いすぎだよ。傷ついちゃったじゃないか。このまま出てこなくなったらどうするんだよ」
「え？」
カスミもさすがに言いすぎたとは思ったらしい。しかし……
「キャタピーに謝（あやま）れ！　謝れったら謝れ！」
サトシから頭ごなしに怒鳴られるとまたまた腹が立ってくる。
「キャタピーに謝っても、あんたにはごめんだわ。だいたい、あんたのしつけが悪いからこんなことになるのよ。ポケモンの不始末はね、トレーナーの責任よ」
「うう……」
サトシは、口ごもる。口ではとうていカスミに勝てない。
サトシは、ぶつぶつとモンスターボールにつぶやくしかない。
「キャタピー、見返してやろうぜ。いつかな」
だが、モンスターボールは、まったく反応がない。
からから振っても、何も聞こえない。
「まずいなあ……自信なくしちゃったのかなあ」
そのときだった。
ぺちゃっ……サトシの顔に何かが落ちた。

「ありゃ？」
「わーっ、ばばっち……よらないで」
カスミが悲鳴を上げた。
それは、とりポケモンの糞だった。
頭上の木の上に、すっきりとした顔のとりポケモンがいた。
「う〜ん。弱り目に……なんなんだお前は」
サトシは、ポケモン図鑑を鳥ポケモンに向けた。
「とりポケモン、ピジョン……ことりポケモンポッポの進化形……ポッポより断然強く攻撃的、しかし、オニスズメほど凶暴ではないので、初心者用ポケモンとして最適かも……大きさは一メートル……、その大きさはものにもよる」
「一メートルねえ」
サトシは首をひねった。一メートルにしては、小さかったからだ。羽根を広げても一メートルあるかどうかわからない。
「育ちが悪いのかなあ……でもまあ、初心者用ポケモンとして最適なら見逃す手はないよな」
サトシは空のモンスターボールをリュックから出した。
「これで、ゲットだ」
「バカね、いくら育ちが悪そうでも　相手はピジョンよ。ポケモンゲットは、まず、自分のポケモンで、相手を弱らせるのが基本」

カスミが、えらそうな口ぶりでいった。
「わかってらい」
「キャタピーのときはね、あのキャタピーがとろかったからつかまえられただけ。わかってるわよね」
カスミはカスミで、これでもサトシに対する親切な忠告のつもりなのである。
……また、オレのキャタピーの悪口を……
サトシは、カスミに糞の付いた顔を近づけて言った。
「見てろよ！」
「見たくないわよ！　そんな顔」
カスミは両手でぽんとサトシを押した。
サトシは、後ろ向けにひっくり返り、本当に頭に血が上ってしまった。
「よーし、カスミ、お前を、あっと言わせてやる。あのピジョンをオレのキャタピーでゲットしてやる」
サトシは、キャタピーの入ったモンスターボールをわしづかみにして投げた。
「行け！　キャタピー！」
「ああっ」
「ピーッ！」
カスミの悲鳴と、ピカチュウの鳴き声が聞こえた。カスミの声はいつもの聞き慣れた悲鳴とはちがっていた。怖いというより、危険にあわてている声だった。ピカチュウの緊張した

鳴き声がそれを語っていた。
サトシは、得意げに胸を張った。
「どうだ、あっと言わせただろう」
ぱしーん！　カスミの平手打ちが飛んだ。
「あ……っと言ったのはオレだった？」
「そんなこと言ってる場合？　むしポケモンが、虫を餌にしているとりポケモンに勝てるはずがないでしょう」
「え……」
サトシは息を飲んだ。
そして、キャタピー入りのモンスターボールの行方を見た。
転がっているモンスターボールの向こうで、ピジョンに追われて、キャタピーが逃げ回っている。
急降下と急上昇を繰り返すピジョンの攻撃に、キャタピーはなす術がない。
ただ、地面を転がって逃げるだけだ。
「早く戻すのよ！　キャタピーを！」
カスミが叫んだ。
「そうだよな」
われに返ったサトシが、キャタピーを入れていたモンスターボールに飛びつく。
「戻れ！　キャタピー！」

しかし、ピジョンの急降下は速い。
「身をよじれ！　キャタピー！」
ピジョンのクチバシのえじきになる寸前、キャタピーは丸まった首飾りのように身を縮めた。
そして、クチバシをくぐり抜けるようにして、モンスターボールに戻った。
「ピカチュウ！」
その瞬間を待っていたように、ピカチュウがするどく鳴いた。
「ピカチュウ、やってくれるか？」
サトシが聞いた。
言われるまでもなかった。
キャタピーをひどい目に合わせている相手だ。
ピカチュウはピジョンをにらみつけた。
頬の電気袋が膨らみ、尻尾がピンと立った。
森に電光が走った。
「すげーっ」サトシがつぶやいた。
「やったあ」カスミの声はため息に近かった。
おとといの晩、ポケモンセンターの大爆発を誘発させた電撃だった。
ピカチュウの電力は、昨日の夜、キャタピーとのおしゃべりであまり寝ていないのに、ほとんど回復していた。

ピジョンは、電光を浴び、気を失って落ちていた。
「ピカピカ」
ピカチュウが、ピジョンを指さして、ゲットしろとでもいうように鳴いた。
「そ、そうだよな……今だよな」
サトシは、あわてて、モンスターボールを投げた。
ピジョンの体がモンスターボール吸いこまれ、やがてボールは動かなくなった。
サトシは、昨日に続いて有頂天だ。
「ピジョン。ゲットだぜ」
ポーズをつけて、にかっと笑った。
「やったぜ。二匹目のゲットだ」
「で、これも今日二度目よね」カスミが言った。
「え？」
ぱしーん、カスミの平手打ちだ。
「いて！　また、ぶった」
「ぶったわよ。もっともっとぶちたいわよ。あんた、それでも、ポケモントレーナーをまじめに目指しているわけ？」
「目指してるわい」
「だったら、勉強しなさいよ。ポケモンには相性があるのよ。とりポケモンにむしポケモンを出すなんて……お勉強前の非常識だわ。使われているポケモンの身になってごらんなさい

「……ね、ピカチュウ」

　いきなり、カスミに聞かれては、ピカチュウもうなずくしかない。言われたサトシは、言葉もない。

　こうなったら、カスミはかさにかかる。

「ただの、ポケモン大好きぼうやじゃ、トレーナーの資格はないわ。これは、子供の遊びじゃないんだから」

　そのときだった。

「そうよ。遊びじゃないよねえ」と、やさしい女性の声がした。

「しゃっきりきりきりやりましょうね」と、どこから聞いても二枚目の男の声がする。

どかーん。どかーん。七色の煙花火が炸裂した。

「だれだ？」と、サトシ。

「なんなの？」と、カスミ。

　煙の向こうから、二人の影が浮かび上がった。

「なんだかんだと聞かれたら、答えてあげるが世の情け」

　二人のせりふはぴったり合っている。

「世界の破壊を防ぐため」ムサシだ。

「世界の平和を守るため」コジロウだ。

「愛と真実の悪を貫く」ムサシは好調だ。

「ラブリー・チャーミーな敵役」コジロウが受ける。

「ムサシ」ムサシがウインクつきの自己紹介。
「コジロウ」コジロウが、手に持ったバラの香りを嗅ぎながら言った。
「銀河をかけるロケット団の二人には……」ムサシがポーズする。
「ホワイト・ホール。白い明日が待ってるぜ」コジロウのポーズが決まる。
　最後に現れるのがニャースだ。
「にゃーんてな」
「またまたお前ら、なんの用だよ」とサトシ。
「なんだかんだと聞かれたら」ムサシが受ける。
「答えてあげるが世の情け」と、コジロウ。
「やめんにゃ！」ニャースがムサシとコジロウの顔をひっかいた。
「また最初から、登場パターンをやるつもりにゃ？」
「あ、そうか。時間のむだよね」
「小説だったらページのむだ」
「作家の手抜きにゃ」
「というわけで……」ムサシが言った。
　どういうわけだかよくわからないが、ムサシは続ける。
「わたしたちは、おまえたちのような、コジャリカップルには用がない」
「用があるのは、そのピカチュウ」
　コジロウが、ピカチュウを指さして言った。

サトシは、コジロウの指からピカチュウを守るように立ちふさがった。
「ピカチュウなら、このピカチュウじゃなくてもいっぱいいるじゃないか」
「われわれが欲しいのは、ずばり、そのピカチュウ」今度はムサシがピカチュウを指さした。
「人を指さしちゃいけないって、お母さんに言われてないのか？」サトシが言った。
「お母さん？　ママ？　マミーって、そっと呼んでみる」ムサシが突然つぶやいた。
「恩返し、したいときには親はなし」コジロウが涙ぐんだ。
「親の説教なんか、遠い昔に、忘れたニャー」ニャースがしみじみと言った。
「お母さんの話なんかいらない」カスミが叫んだ。
「先に話を進めんか！」カスミの剣幕に一同、われに返った。
「では、説明しよう。明智君」ムサシが言った。
「オレはサトシだ」と、サトシがつぶやいた。
「では、説明しよう。金田一くん」とコジロウが言った。
「先へいかんか！」カスミが、今にも爆発しそうに髪を逆立てた。
「すまない、すまない」と、ムサシが謝った。
「すまないじゃすまにゃー。これじゃ話がすすまにゃー」ムサシやコジロウよりは短気なニャースがツメを研ぎながらいった。
「話は早く済まさないとね」と、コジロウが話し始めた。
「われわれ、ロケット団は珍しいポケモンを探している。そして、そのピカチュウこそ探し求めているポケモンかもしれないのだ」

と、今度は、ニャースもまじって二人と一匹で、ピカチュウを指さした。
「オレのピカチュウが珍しいポケモン？」サトシが聞いた。
「この間の大爆発、並のピカチュウじゃなかなか起こせやしない。こりゃ、普通じゃないなと推理したわけさ。ね……くん」
ムサシはワトソン君と言いかけて、横のニャースが、きらりとツメを出したのでやめた。
「あ、それって、明智さんとこの小林くんのこと？」よせばいいのにコジロウは言ってしまって……
「いいかげんにやめんにゃー」ニャースのツメを顔に立てられた。
「ともかく、おとなしく、そのピカチュウを渡してもらおうか」顔を押さえながら、コジロウが言った。
「渡すと思ってるのか？」サトシはピカチュウのようすを見た。
さっきの大放電で、ピカチュウは疲れ切っている。
「思っちゃいないが、いちおう聞くのが世の情け」コジロウが言った。
「聞いたあとなら情けは終り」ムサシがモンスターボールを出した。
「ムサシとコジロウ、二人三脚、ポケモン街道……」コジロウもモンスターボールを出す。
「ここは当然、ポケモン勝負にゃー」ニャースが小判のマークが付いた扇子を出して、振った。
ムサシとコジロウの投げたモンスターボールが炸裂し、ポケモン、ドガースとアーボが飛び出してきた。ポケモンセンターのときと同じメンバーだ。

「二匹、一緒なんて汚いぞ」サトシが叫んだ。
「愛と真実の悪役の辞書に、汚いという文字はないのよ」ムサシがムフッと微笑(ほほえ)んだ。
「じゃ、その辞書、不良品だ」サトシの言っていることは、どこまでまじめかわからない。
「不良でけっこう……ぼくたち悪役」コジロウはまじめに答えた。
「つまんないこと言ってないで、サトシもポケモンを二匹出すのよ！」カスミがじれたように言った。
「でも、ポケモンのルールは一匹ずつだろ」サトシの答えにカスミはあきれた。
「あんた、バカなの？　まじめなの？　あいつら、ルールの通用する相手なの？　このままだと、キャタピーもピカチュウも、みんな取られちゃうわよ」
「なにやら、相手がもめてるうちに、動きを封じておしまい」ムサシがコジロウにささやく。
「それで、おしまい」コジロウがうなずく。
「ヘドロ攻撃！」コジロウが叫ぶと、いきなりドガースがピカチュウに、ヘドロを吹きかけた。
ねばねばの目潰(めつぶ)しだ。
「勝負が、始まっていないのにひどいじゃないか……」サトシが抗議しても、受け付ける相手ではない。
疲れているうえに、目潰しを受けたピカチュウに戦闘能力は期待できない。
「だから、言ったでしょうにぃ」カスミは本気ではらはらし始めた。
ことと次第によっては、自分のポケモンも出さなければならないかも……でも、水のない

森の中では、カスミの持っている水ポケモンに、多くは期待できない。
サトシは、ピカチュウを抱き上げるとカスミに渡した。
「ピカチュウを守っていてくれ。オレは、あとの二匹でがんばってみる」
とは言ったものの、ゲットしたばかりのピジョンもキャタピーも、戦ったばかりだ。
しかし、ほかに使えるポケモンはいない。
「ピジョン。頼む。キミに決めた！」
サトシはモンスターボールを投げた。
モンスターボールから、さっきゲットしたピジョンが飛び出した。
一度、ゲットしてモンスターボールに入れたポケモンは主人に味方する。ピジョンも例外ではなかった。
「ピジョン！」
鋭い鳴き声をあげながらピジョンは、果敢にアーボとドガースに向かっていく。
急降下と急上昇を繰り返し、アーボとドガースにクチバシで攻撃を繰り返すが、相手は二匹だ。一匹を相手にすれば、もう一匹が背後に回る。二対一の弱みを跳ね返せるだけの、絶対的な力はピジョンにない。
次第に疲れが見えだし、防御一方になってきた。
「二対一なんてどう見たって卑怯だ！」
サトシは思わずムサシとコジロウに飛びかかった。
「大人と子供だって勝負になんないわよ」ムサシが気の毒そうに言った。

るサトシの頭を片手で押さえつけた。
「子供をいじめるのはいやなんだけどなあ」コジロウがそう言いながら、つかみかかってく
　サトシがいくら両手を振り回しても、コジロウには届かない。
「勝負しろ！　勝負だア」サトシはわめくがどうしようもない。
「勝負にならないってば……！」コジロウは、サトシのおでこを、ぴんと指ではじいた。
　カスミの平手打ちでもひっくり返るサトシだ。コジロウのデコピンを受けては、ボールのように転がるしかない。
「さあ、ピカチュウをおよこし。ポケモン勝負でしっかりいただくわ」ムサシが微笑んだ。
　カスミの腕の中で、ピカチュウが、「戦わせろ！」とでも言いたそうにもがいた。
　しかし、目潰しを受けたピカチュウにどうみても勝目はない。
　残るはキャタピー……。
　けれど、ポケモン勝負もなしでサトシにつかまるようなキャタピー……ピジョンと戦って、逃げるしかなかったキャタピーに、勝てる見込みはあるのか。負けるとわかった勝負に出すのはポケモンをいじめているだけじゃないのか？
　しかし、今はキャタピーしかいない。
　サトシはキャタピーの入ったモンスターボールにつぶやいた。
「今はキミしかいない。キミに頼るしかないんだ」
　サトシは、祈るようにボールを投げた！
「いけ！　キャタピー！」

モンスターボールの中からキャタピーが飛び出した。
「なんにゃ？　そんにゃ虫けらじゃ勝てニャーニャー」ニャースが笑った。
「ムシは無視……」ムサシが、カスミとおなじせりふを言った。
「ムシケラ、けらけら笑っちゃうぜ」コジロウも大笑いだ。
サトシもカスミもくやしい。ピカチュウだってそうだろう。
「ピジョ〜ン」いつもは自分が餌にしているキャタピーに勝てるはずがない……ピジョンが、そう言いたげに悲しそうに鳴いた。
何よりくやしいのはキャタピーだろう。
だが、キャタピーは、恐れるそぶりも見せず、アーボとドガースに向かっていく。
「わあ……無謀なムシケラちゃん」ムサシがあきれた。
「むちゃくちゃだぜ」コジロウがつぶやいた。
「にゃんたるやつ」ニャースも肩をすくめた。
キャタピーの勇気に、いささか感心してもいた。
だが、同情は無用だった。
キャタピーは半身を起こすと、なにかを、吐き出し始めた。
しゅうううっ……
それは、白い糸だった。
キャタピーは、ドガースとアーボに向けて力いっぱい糸を吐きかけた。
「ドガ？」

「シャーボ?」
なんだこれは? と思う間もなかった。
一瞬のうちに　ドガースとアーボは身動きできなくなり毛糸玉のようにその場に転がった。
「にゃのありか……にゃらばニャースが」
ニャースが、キャタピーの前に立ちふさがった。
けれど、毛糸玉にされるまでそれほど時間はかからなかった。
ドガースとアーボとニャースの三つの毛糸玉を見つめて、ムサシとコジロウは顔を見合わせた。
「今日のところは、これで勘弁してあげましょうか」ムサシがコジロウに言った。
「そうだね、子供が相手だもん。あれ、ちょうどここにお手玉が、三つある」コジロウは、三つの球を指さした。
「なつかしいわね。お手玉でもしましょうか」ムサシがコジロウを誘った。
「そうしましょう。そうしましょう」
ムサシとコジロウは、三つの球を抱き上げると、さっさと走り出した。別の言い方をすれば、逃げ出したのだ。
「でも、何と言われようと……やな感じ――!」
二人の声が、森にこだました。
サトシは、糸を吐きやめたキャタピーに駆け寄った。
「キミはすごいぜ。キミはもうカスミが言うような嫌われもんじゃない。……だよな」

サトシはカスミに念を押した。
ムシが嫌いな気持ちは、そう簡単に変えようがなかった。でも、キャタピーの働きは認めなければならない。
ついでに、キャタピーをここまで活躍させたポケモントレーナーとしてのサトシも、少しは認めなければならないのかもしれない。……くやしいけど……
カスミの気持ちを感じたのかキャタピーの瞳は微笑んでいた。
サトシからヘドロの目潰しをぬぐってもらったピカチュウの目も笑っていた。
「ピジョ〜」ピジョンも木の上で、「ちょぴっといい感じ」とでも言いたげに鳴いていた。
しかし、こんなちょっとしたいい感じも長くは続かなかった。
しゅううっ……
糸の音だった
いったん止まっていたキャタピーの糸が、また吹き出し始めたのだ。
「キャタピー、もうそれはいいんだよ」
サトシが、いくらそう言っても、糸は止まらない。
糸はみるみるキャタピーを被いつくした。
「どうしちゃったんだよ。キャタピー」
サトシは、ポケモン図鑑をキャタピーに向けた。
「いもむしポケモンのキャタピーが糸を吐くときは、進化の始まりの時期である」
ポケモン図鑑がそう答えてくれた。

ポケモン図鑑がそう答えてくれた。
「進化の始まり……」
キャタピーの体に巻き付いた糸が、緑色に変わり、硬くなっていく。
そして、あっという間に、もう今は、緑の殻を被った別のポケモンだった。
ポケモン図鑑が答えてくれる。
「トランセル……さなぎポケモン。キャタピーの進化形である。今まで発見されたポケモンの中では、もっとも進化の早い種類。より新しい進化の途中で、ほとんど動かない。外は硬いが、中は柔らかいので強い攻撃には耐えられない、取り扱いには注意が必要」
動かないし鳴きもしない。取り扱い注意では、モンスターボールに入れていいのかもわからない。
サトシはつぶやいた。
「そうか、大事にしてやれば、次の進化もすぐ来るかもね。トランセル……それまでよろしく」
サトシは、ぴくりとも動かないトランセルの体を抱きしめた。
トランセルの瞳だけが、どこかキャタピーのおもかげを残していた。
サトシはトランセルを肩にかついで、歩き出した。
カスミはそんなサトシの後ろ姿を見つめてふと思った。
……ほんとにこいつ、ポケモンが好きなんだ……けっこうサトシって、いける子かも……
けれど、奇妙な音がそんな気持ちを吹き飛ばした。

なにかの羽根の音だ。しかし、鳥の羽の音じゃない。
もっと、速い羽根の音だ。まるで、高速で回るモーターのような音……。
サトシとカスミの目の前を、一瞬、通りすぎるものがあった。
いきなりポケモン図鑑が警告を発した。
「どくばちポケモン、スピアーに注意……尻尾の毒針でさしまくる。前足も二本の針。集団で飛び回ることもあり、きわめて危険」
「スピアー？　きわめて危険？　ようし、オレがゲットしてやる」
サトシの気持ちは絶好調だ。
……！　やっぱりこいつ、ただのお調子もんだあ……カスミは頭を抱えた。
「ともかく、こんな気持ちの悪い森はいや！　早くこの森から出よう！」
カスミの足はサトシを引きずるように速くなった。
だが、トキワの森は、まだまだ奥が深かった。

（六章に続く）

五章のふろく

（……お急ぎの方は六章にお進みください。……ただし、ここには、今までだれも知らなくて、これから役立つかもしれない情報が書かれているかもしれません）

〈秘密講演……ポケモンの進化について……〉シンカー・ダーウイン進化論勝利学会会長……
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　メンデル・ウォレス博士

注意1)　進化論勝利学会とは、ダーウインの進化論を正しいと信じる学者たちのグループである。
　ダーウインの進化論によると、ポケモンはいてはならない生物だそうである。
　しかし、実際にポケモンは存在するのだから、ダーウイン進化論学者は困っている。
なんとか、ポケモンの存在を否定しようとさまざまな説を発表しているが、効果は見られず、最近は、あせっている様子さえうかがえる。
　存在するものは存在すると認めれば早いのに、学会という世界は、なかなかそうはいかないようである。過激派の中には、ダーウイン進化論を守るために邪魔なポケモンは絶滅させろ……と、主張する危ない人たちもいるらしい。

メンデル・ウォレス氏「進化という言葉は、かつてこの地球で、延々と進化を続けた生物に対して使うものであり、２００万年前に誕生したというポケモンごときに使ってもらいたい言葉ではない」
（一部の聴衆の声）「そうだ、そうだ！」
メンデル・ウォレス氏「たとえば、キャタピーからトランセルへの進化などは、ムシがサナギになってチョウになるようなもので、これは、生物用語で、変態という言葉がちゃんとあ

もたしかではない」
メンデル・ウォレス氏「タマゴから、おたまじゃくしになって、カエルになるのを、人は進化とは呼ばない。だが、すべてのポケモンの進化と呼ばれるものが、変態かというと、それもたしかではない」
（一部の聴衆の声）「そうだ、そうだ！」
メンデル・ウォレス氏「ともかくポケモンの進化と呼ばれるものはわからないことが多すぎる。たとえば、ピカチュウの進化形といわれる、ライチュウが、ピカチュウだったころの思い出があるかどうかというとそれもわからない。そうはいっても、カエルにおたまじゃくしのころの思い出があるのかと聞かれても困るのだが……早い話が、カエルの気持ちはカエルに聞いてもらわなければわからないし、ライチュウの気持ちはライチュウに聞かなければわからない」
（一部の聴衆の声）「異議なーし！」
メンデル・ウォレス氏「ライチュウとピカチュウは似ているからまだ許せるが、同じ海に住むからといってさかなポケモンのコイキングの進化形が、似ても似つかぬきょうあくポケモンのギャラドスだと言われてしまうと困るのである。もっとも、おなじことをおたまじゃくしとカエルの姿のちがいで言われると困るのであるが……少なくとも、これだけは言えるのだ。ポケモン以外の今までの生物には、思い出とはいえないまでも、進化前の生物の記憶が残っているのである」

残っているのである」
（一部の聴衆の声）「そうだ、そうだ！」
メンデル・ウォレス氏「それはなにか？　それは、遺伝子による記憶である。さまざまな生物は、元をたどっていけば、ひとつの生物にたどりつくだろう遺伝子があるのである。人間とカエル、おたまじゃくしには、共通の遺伝子があるのである。それは、同じ地球に生まれた証拠とでもいえるかもしれない。人間とカエルさえそうなのだから、サルから人間が進化して生まれたといっても、少しも不思議はないのだ。だが、ポケモンはどうか？　ポケモンと人間には共通する遺伝子があるのか？　ほかの動物たちとは、どうか。その答えは、いまだ見つかっていない」
（一部の聴衆の声）「そうだ、そうだ！」
メンデル・ウォレス氏「こんなに謎の多い生物を、われわれは、生物として認めていいのだろうか。われわれ、シンカー・ダーウイン進化論勝利学会は、進化という言葉も、変態という言葉も、ポケモンに使ってほしくないのである」
（一同の声）「異議なーし！」
メンデル・ウォレス氏「いや、もっと説を進めれば、進化論の通用しないポケモンなど、この世界にいてもらっては困るのである。……ではポケモンの進化を、ほかになんと呼ぶのか……いてはならない生物の進化などにつける言葉はないのである」
（一同の声）　「おーっ！」

シンカー・ダーウイン進化論勝利学会秘密決起集会の、テープよりばっすい

注意2)　一般の人にとって、ポケモンの進化について、学会がどう呼ぼうといいのである。そういう現象が実際にあることは確かなのだから……ただ、進化という言葉はなんとなくわかりやすく、いつのまにか一般的に使われるようになったとみられる。進化論上の進化と、現象としてのポケモン進化のちがいは、これからの研究を待たなければならない。

ポケモンアナリスト（分析家）ソネザキマサキの回想メモよりばっすい

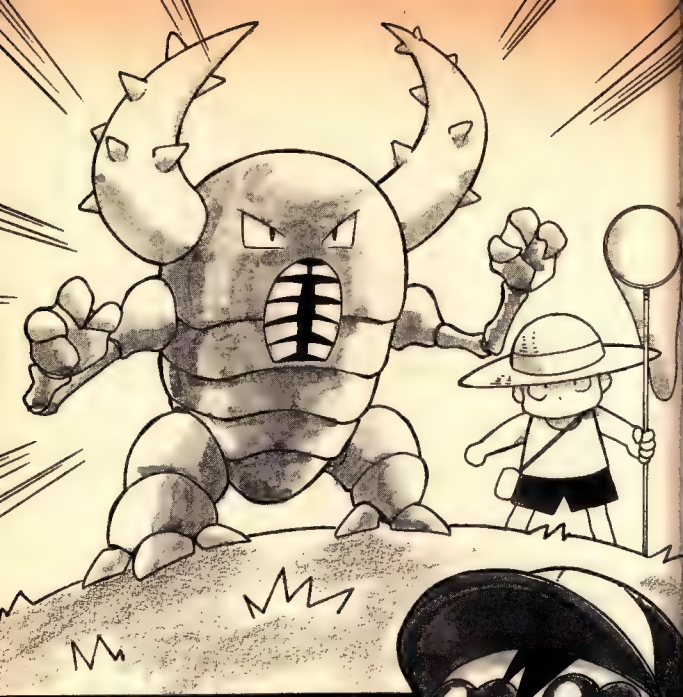
第六章　バタフリー飛んだ！

「きゃーっ！」
カスミの悲鳴が森に響く。
最近、トキワの森に入ってから、章の始まりは決まってカスミの悲鳴から始まる。
無理もない。森はむしポケモンの天国、超ムシ嫌いのカスミとしては、悲鳴発声の練習場だといえた。今の悲鳴もおなじだ。
さっき目の前をかすめていった、どくばちポケモン、スピアーに続いて、カスミの足下に、もう一種類のむしポケモンが、にょろっと現れた。姿はいもむしポケモン、キャタピーに似ているが、頭に角のような針が見える。ポケモン図鑑で調べれば、……その名は、けむしポケモン、ビードル。頭の先の針には毒がある……と説明してくれる。ケムシ形の生き物はムシもポケモンも毒がある場合が多いので、注意したほうがよい……。
「毒があろうとなかろうと、ムシはいや！　サトシ、なんとかしなさい」
「まっかせなさい。オレは、世界一のポケモントレーナーを目指す男だ。見つけたポケモンを逃がしゃしないぜ！」
サトシは胸を張った。このところ、ゲット成功が続いているので、いささか、調子に乗っ

ている。
サトシは空のモンスターボールを取り出し、振りかぶったが……
「おっとっと、ポケモンをゲットするには、まず弱らせなきゃいけないんだよな……けむしポケモン、ビードルと戦うなら、とりポケモンが強い。これを相性という」
さっき、カスミから言われたとおりの受け売りだ。
「ならば、ピジョン、キミに決めた」
サトシは、ピジョンのモンスターボールを取りだした。
そのときだった。
「その、ビードル、ボクのものだ」
サトシの後ろから声がして、もうひとつのモンスターボールが飛んできた。
「え？」
モンスターボールは、ビードルを吸い込んだ。
「ビードル……ゲットライト……ボクは正しい」
振り返るサトシの前で、昆虫採集の捕虫網を背中にかけた少年が、ポーズを作った。
「そんな、あれは、オレの狙ったビードルなのに……それはないだろう」
サトシが、口をとんがらかした。
少年は首をふった。
「キミはまちがっている。あのビードルは、ボクが前から狙っていた」
「お前が狙っていた？」

「あのビードルは、ボクのポケモンと戦ってずいぶん弱っていた。それを、今になって横取しようなんて、ひどいやつだ」
「横取りする気なんかない」
「だったら、とっとと消えてくれ。この森は、ボクの縄張りだ」
「ポケモンゲットに縄張りがあるのかよ」サトシがつぶやいた。
「ちょっと待ってよ。聞き捨てならないわ」カスミがしゃしゃり出る。
「わたし、ムシなんか大嫌い。だから、むしポケモンを欲しくて言っているわけじゃないの。ぼうや、そこんとこ、誤解しないでね」
　相手の身長が、ちょっとでも低いと、カスミは相手を子供として、見下すようなところがある。
　カスミは、少年の顔をのぞきこむように言った。
「お見かけするところ、あんたもポケモントレーナーのようよね」
「え、あ、トレーナーといわれるほど強くはない」
　少年は女の子にまじまじと見つめられて、頰を赤らめた。
「だれかさんとちがって謙虚でよろしい」カスミがえらそうにうなずく。
「けど、このトキワの森じゃ、虫取り少年とあだなされているトレーナー志望さ」少年が少しだけ胸を張った。
「あだなされているってことは、けっこう有名なんだ」カスミが聞く。
「少しは知られているかもね」

虫取り少年は、おおいに胸を張った。
「ボク、むしポケモンが好きなんだ。ボクは、この森のむしポケモンで、世界一のトレーナーになるんだ」
「むしポケモンで、世界一？」
カスミは、あきれた。
「趣味はいろいろよね」カスミはため息をついて、虫取り少年に、向き直った。
「だけど、野生のポケモンをつかまえるのに縄張りはないんじゃない？　ポケモントレーナーにとって、どこに行ってもチャンスは平等のはずだわ。縄張りなんて気持ち悪い。悪い人の言葉よね」
このあたりのカスミのしゃべり方はきつい。虫取り少年はくちびるをかみしめてうつむいた。虫取り少年はつぶやいた。
「縄張りと言ったのはボクが悪かったかもしれない。今日、なんだかボクいらいらしているんだ」
あまりに虫取り少年がしょげてしまったので、あわてて、サトシが言った。
「いや、知らないこととはいえ、キミが狙っていたポケモンに手を出したオレも悪い。もう、この森では、むしポケモンは狙わないようにするよ」
サトシは仲直りのつもりで、握手の手を出した。
「遠慮しなくていいよ。で、どこへ行くの？」
握手を受けながら、虫取り少年が聞いた。

「森を抜けて次の町へ……マサラタウンからね」
「マサラタウン！」いきなり、虫取り少年の握りしめる力が強くなった。
「え？　あ、友情がっちりね」サトシも力をこめた。
「ふざけるなあ」虫取り少年は、ぱしーんと手を払った。
「おといから昨日まで、ボクは三人のポケモントレーナーと勝負した」
「三人……」サトシには嫌な予感がした。
「三人はマサラタウンから来た……」
……マサラタウンを先に出た……予感が現実になった。シゲルたちはもうとっくに来ていたんだ。
「で、その三人は……」サトシは聞いた。
「ボクと勝負した。強かった。ボクのポケモンを負かして、けらけら笑って行っちゃった」
虫取り少年は、モンスターボールを出した。
「三連敗ははじめてだ。けど、マサラタウンの奴に四連敗はしない」
サトシは、ショックだった。同じ日にマサラタウンを旅立った三人が、サトシの先を行き、しかも、この虫取り少年に勝っているのだ。
……負けるわけにはいかない……しかし、前にここに来た三人に負けた分の闘志を、ぶつけられても、つらいものがある。おまけに……
「カイロス！　キミの出番だ！」虫取り少年が叫んでモンスターボールを投げた。
モンスターボールから出てきたのはくわがたポケモンのカイロスだった。

「わあ……カイロスだあ」サトシはため息だ。
昔の男の子なら誰もがクワガタが好きだ。しかも、くわがたポケモンのカイロスときたら、クワガタでも、その身長は一・五メートルもある。実物大なら模型だって部屋に置いておきたい。カイロスのことなら、ポケモン図鑑を見なくてもいい。その、性格も生態も知り尽くしている。ただ、実物に会っていないだけだった。実際、数も少なく、男の子にとっては、夢のポケモンといってよかった。サトシは、思わず声をもらした。
「欲しい……」
「何、とぼけたこと、言ってんのよ」
……クワガタにたいしては、なんの感激もないカスミが、水をさすように言った。こういうときのタイミングのよさは、水ポケモンが好きな少女だけのことはある。
「いくら欲しくったって、人のポケモンを取っちゃいけないんだからね」
「わかってらい」サトシは残念そうにつぶやいた。
それは、ポケモン勝負のルールだった。ポケモンを、両者、合意の上で交換することは許されている。
ポケモンショップで売っているポケモンなら、買うことも許される。しかし、ポケモン勝負はあくまで、ポケモン勝負。ポケモン勝負に勝ったからといって、相手のポケモンを取ってはいけないのだ。もし、了解を得ずに相手のポケモンを使うようなことがあれば……つまり、人のポケモンを盗んだりすれば、ポケモントレーナーの資格は、永久にはく奪されてしまう。

珍しいポケモンを盗んで回るロケット団の仕事は、それが仕事と呼べるかどうかはわからないにしても、ポケモントレーナーになることをあきらめた人たちの仕業だといえた。
「いくら、オレが強くてさ、こいつのカイロスが欲しくても、泥棒にはなりたくないさ」
サトシは、いかにも無念そうだ。
「ちょっとあきれた。もう勝負に勝った気でいるの」
カスミは肩をすくめる。
「カイロスを持っているなんてカッコいいもんなア……」
サトシは未練がましい。
「うらやましがったってしょうがないわよ。人のポケモンだもん。ポケモン勝負に負けたら、うらやましいどころか、あんたが、うらめし〜いって泣くことになるわ」
カスミが、じれたように言った。ポケモントレーナーが、通りすがりのトレーナーに勝負を挑まれたら、即座に受けるのが礼儀だ。ぐずぐずしていると、憶病者に見られてしまう。自分がくちばしを入れて、勝負の始まりを引き伸ばしているようなものなのに、そんなことは気がつかない。
「売られた勝負は買わなきゃダメ！」
カスミはサトシをしかりつけるように言った。
「わかってらい！　くわがたポケモンといってもむしポケモンの系統だ。虫にはトリ、ポケモン勝負には相性が大事だ。わかってるよな。カスミ」
サトシは、さっきカスミから言われた通りのことを言ってモンスターボールを取り出した。

「とりポケモン、ピジョン！　キミに決めた！」
サトシはモンスターボールを投げた。
「ピジョ〜！」
ピジョンは、勢いよくモンスターボールから出てきた。
が、カイロスを見るなり、木に舞い上がり、枝に止まって下を見降ろし動こうとしない。
「あれっ？　どうしたんだ、ピジョン」
「なるほどね……」カスミがうなずいた。
「なにがなるほどだよ……」
「いくら、とりポケモンがむしポケモンに強いといったって、相手がカイロスじゃ大きすぎるわ。相手の大きさも計算しなきゃね……相性、相性って、そういうのバカのひとつ覚えっていうのよ。こういうことはよく気をつけなきゃね」
……自分がさんざん言っておきながら、いまさら、それはないだろう……
サトシはムカーッとしたが、むかついている暇はない。
「ピジョン。戻れ！」
サトシは、ピジョンをモンスターボールに戻すと、叫んだ。
「ピカチュウ……行ってくれ！」
ピカチュウの返事がない。
そういえば、カスミの悲鳴から始まって、今まで、けっこう、騒がしかったのにピカチュウは静かだった。

「どこにいる。ピカチュウ？」
後ろを見れば……
「それはないだろう……」
ピカチュウは、木の切り株を枕にして、ぐっすり眠っている。
どうやら、徹夜の連続で、眠気に耐えられなくなったらしい。
「ちょっと起きてよ」
サトシは、小指でピカチュウをつんつんとつついた。
ぴりっと指先がしびれる。
「なんだあ？」
よく見れば、ピカチュウの体が、かすかに光っている。
眠っている間に、いたずらされないように、防御用の電磁波のようなものを張っているらしかった。
ここで無理に起こすと、寝ぼけたピカチュウが怒り出し、敵もきついが味方もしびれる電気ショックを受けるかもしれない。
さわるにさわれず、サトシは半分強がって言った。
「疲れてんだよなあ。ピカチュウ。これ以上、無理をさせるのはかわいそうってもんだよな。ここは、休ませてやるのが名トレーナーってもんさ」
「何をごちゃごちゃ言っているんだ」虫取り少年がしびれを切らした。
「マサラタウンの前の三人は、そんなにもったいぶりはしなかったぞ」

マサラタウンの三人のことは、サトシがいちばん気にしていることだ。
「それを言っちゃあ、おしまいだぞ」
サトシは虫取り少年をにらみつけた。
しかし、サトシに残るのは背中に背負ったトランセルしかいない。
トランセルの自慢といったら、動かないことと硬いことだけだ。攻撃と呼べる技はないに等しい。
戦いをあおるようなことを言っておきながら、カスミもやっとその事実に気がついた。
……まずいかな？……本当にサトシ、おしまいかも……
そして、少しだけ、責任を感じて、サトシに、耳打ちした。
「なんか貸そうか？　わたしのポケモン」
「いらんわい！」
サトシは怒鳴った。
「あ、そう！　いらんなら、もう、口もポケモンも出さないわ」
カスミはぷいと横を向いた。
サトシは、背中のトランセルを降ろした。
「トランセル！　こうなったら、トランセルで勝負だ！」
「トランセル？　本気かよ……」
虫取り少年は首をひねった。少年はむしポケモンに詳しい。トランセルに戦う力がないことを知っている。だが、サトシの使えるポケモンが三匹しかいないことは、知らなかった。

おまけにつけくわえれば、マサラタウンのトレーナー志望には、三連敗中だ。

その戦いにはもちろん、自慢のカイロスを使っている。そして、負けた。これ以上負けるのは、カイロスにとってもよくない。自信喪失におちいる心配がある。

「戻れ、カイロス！」

虫取り少年は、カイロスをモンスターボールに戻すと、サトシのトランセルを注意深く見つめた。

トランセルは動かない。動かないのが特徴の一つだ。

……なにか、考えでもあるのか？……

サトシはなにも考えていなかった。ほかに出すポケモンがいなかっただけだ。

しかし、虫取り少年は、考えた。ほかのなにを出しても負けそうになかった。相手は動かないのだから……だが、なにを出しても勝てそうになかった。トランセルの得意技は硬くなることだ。硬くなりだしたら、カイロスのパワフルな二本の角も通じない。なにしろ、虫取り少年は、カイロスの角のはさむ力の、練習台用ポケモンとしてトランセルを使っているくらいだ。練習台が壊れては練習にならない。サンドバックが破れたら、ボクシングの選手の練習にならないのとおなじことだ。

……しかし、あいつはなぜトランセルを出してきたのか？　……考えてみれば、虫取り少年とあだなされたボクさえ、トランセルを、ポケモン勝負に使ったことはなかった。……あいつ、いったいなにを考えている……。

考えに考えた末、虫取り少年はモンスターボールを取り出した。

……相手の出方を見るしかない。ならば！……

「ボクもトランセルだ！」

虫取り少年のボールからトランセルが飛び出した。もちろん、飛び出しただけだ。鳴き声のひとつ出さず、動きもせず、ただじっとそこに立っている。

サトシのトランセルとにらめっこすらしない。眠そうな目を一時間に一回、まばたきするだけだ。……そう、サトシと虫取り少年のトランセルは、一時間に一回はまばたきすることがわかるほど、じっとそこに立っていた。にらめっこしているのはサトシと虫取り少年だ。

トランセルが三回まばたきした。それでも、じっと立っている。サトシと虫取り少年も、にらめっこだ。ふたりとも緊張してこちんこちんだ。

「固まるのはトランセルの得意技。自分が固まってどうするのよね。この子たち……」

しかし、なにを言っても、サトシと虫取り少年の意地の張り合いは終わらない。

あきれたカスミは、お昼のお弁当を食べ、近くの小川でお弁当箱を洗い、木かげで涼みながら、こっそりお姉さんの本棚から持ち出してきた女の人が大好きだというホラー・クィーン小説を、一冊、読み終えた。……そう、カスミにはお姉さんがいたのだが、それはまた、別の機会にお知らせしよう……ともかく、二冊目の小説を半分まで読んで、ふと顔を上げると、まだ、二人とトランセルは立っていた。

「ピカチュウ……？」……なんかあったの？……

ピカチュウが、睡眠十分のすっきりとした顔で目覚めたとき、トランセルは、七回目のまばたきをした。

陽が傾き始めた。

……今夜も、ここで野宿かしら……つきあってられないわ……

カスミはピカチュウの顔を見つめてため息をついた。

とはいえ、カスミとしては自分が、けしかけたような気もする二人のポケモン勝負だ。

結末も見ないで、さっさと、おいてけぼりにするほど、薄情な女の子でもなかった。

……だいいち、暗くなったらどんなムシが、出てくるかわからないし、こんな森、ひとりじゃ、やっぱり、いやだわ……

だが、暗くならないうちに、出るものが出てきた。

それは……

今朝、聞いた覚えのあるあの音が聞こえてきた。

まるで、高速で回るモーターのような音……。

しかも、その音はさっきよりずっと大きく頭上から聞こえてくる。

……ちょっと、そうとう、雰囲気悪いわ……

ピカチュウも、尻尾をピンとあげて警戒の姿勢だ。

おそるおそるカスミが見上げた頭上には、森の木々の間から見えるはずの空が真っ黒……

いや、黒い何かの大群で覆い尽くされていた。

どくばちポケモンのスピアーだ。

どくばちポケモンの夕方は、狩りの時間だ。獲物は同じむしポケモンである。もちろん、邪魔する相手は、みんな敵。毒針の目標は、人もポケモンも選ばない。

カスミはもう、「キャー」などと、悲鳴をあげている暇はない。
嵐のようなスピアーの羽音のなか、かすかに警報が聞こえている。
警報のほうを見れば、……虫取り少年とにらめっこしているサトシがいる。
サトシのポケットから半分はみ出したポケモン図鑑が鳴っていたのだ。
カスミは、二人の前に走っていく。
カスミの怒りは煮えたぎっていた。ポケモントレーナーならだれもがポケモン図鑑を持っている。
「おのれら、よりによって二人もそろって……早く気がつかんか！」
あとで考えれば、カスミもポケモン図鑑を持っていた。ただ、節電のためにスイッチを切っていた。人のことは言えないのだが、それを言ってしまうのがカスミだ。
けれど、サトシも虫取り少年も、カスミの言うことは聞いていなかった。
「なのあり？」
二人をよくよく見れば、目を閉じている。立ったまま居眠りしていたのだ。
カスミの怒りは、大爆発だ。
「グッド・モーニング！」
いきなり、二人を張り飛ばす。
こういうときは、寝覚めの早いほうが得だ。虫取り少年は、寝覚めが早いほうではないが、サトシはなにしろネボウがあだなのような男の子だ。おまけに、虫取り少年は、ムシに詳しかった。スピアーの羽音を聞くなり、なにが起っているのか気づき、スピアーの狙いがなん

なのかをわかっていた。
「トランセル、戻れ！」
虫取り少年は、自分のトランセルをモンスターボールに戻すと、サトシたちに叫んだ。
「みんな、逃げるんだ！」
「逃げるったら逃げるのよっ！」
「え？」
超高音の、ほとんど金切り声に近いカスミの声で、やっと目が覚めたサトシの見たのはスピアーの大群の急降下だ。
空がすべて槍のようにとんがって降ってくる。
空のすべてが、まるで針だ。
サトシは、虫取り少年とカスミのあとを追って逃げるしかなかった。
ピカチュウだって、とっさには逃げるしかなかった。
ピカチュウも寝起きだったし、なにより逃げられる危険なら、迎撃する理由も見つからなかった。
スピアーにはなんの恨みもない。スピアーは、ただ自分の獲物を狙っているだけなのだ。
そして、取り残されたサトシのトランセルにスピアーは群がった。
スピアーもまた、必要以上の獲物を狙いはしない。後ろも見ずに逃げまくり小川に飛びこんだ、虫取り少年とサトシたちを、深追いしてはこなかった。
きらきら光る毒針は、自分たちを守るためと生きるためにこそあるのだった。

※

「あっ！　オレのトランセル。オレのトランセルはどこだっ！」
サトシは、帽子から滴り落ちる小川の水をぬぐいもせずに、いきなり叫んだ。
サトシがトランセルを思い出したのは、小川の水で、眠気が完全に覚めたあとだったのだ。
「モンスターボールに入れなかったのか？」虫取り少年が、あきれたというより、ぼう然として、サトシに言った。
「オレ、ポケモンをモンスターボールに入れるの好きじゃないから……それにトランセルって、硬いけど壊れやすいっていうし……モンスターボールの中に入れてもしも壊れたら……」
「バカな！　モンスターボールの中ほど安全な場所はない」
反論なんてできなかった。
オニスズメの攻撃を受けたとき、ピカチュウの安全を願って、モンスターボールに入れようとしたこともあるサトシだ。反論できるはずがなかった。
「でも、トランセルはなんにも言わないし」
反論ではないが弁解だった。
「なんも言わないのがトランセルだ。でも、主人の言うことはちゃんと聞く。答えなくても、ちゃんと言うことは聞く。それがトランセルなんだ」
虫取り少年は、自分が失敗したようにくやしがった。

「見そこなったよ」虫取り少年は、サトシに言った。目が潤んでいた。むしポケモンのことだと、人ごとではなくなるようだった。
「マサラタウンから来たって聞いたから、すごいやつだって思ってたのに……自分のむしポケモンすら守れないなんて……チクショウ！」
拳を木の幹にたたきつけた。
サトシは声もなかった。
……そうなんだ。オレはトランセルのことをなにも知らなかった。外に出して運んでいたのだって、トランセルを壊したくないというより……
サトシは、カスミのせいにはしたくなかった。
……だけど、カスミがあんまりムシを嫌うから、見せつけてやろうとして外に出していた……とは言いたくないけれど……いいや、人の責任にすることじゃない……自分が悪いんだ……。
「オレって……そうとう、どうしようもないやつなのかな」
そうつぶやいて、小川のほとりに座りこんでしまった。
顔から滴り落ちる水滴は、小川の水か涙か自分でもわからなくなっていた。
ここまでしょげているサトシの姿を、カスミは見たくなかった。
しかし、普通の女の子なら、黙っていてあげるか、慰めかはげましの言葉を、ひとつかふたつかけてやるのだが、カスミはちがっていた。
「トランセルを取り戻せないの？」

「え？……」
サトシは顔を上げた。
「あんたに聞いてんじゃないわ。サトシはむしポケモンのことはなんにも知りゃあしない。わたしもムシのことなんか知らない」
カスミは、虫取り少年を見つめた。
「ねえ、取り戻す手はないの？　ムシについて詳しいのはあなただもん」
「ボク？」
「お願い。取り戻す方法はないの？」
「う……うん」
虫取り少年は、女の子に……お願い……と言われたら、知らないわい……とは言えない少年だった。
「トランセルはまだ生きている。殻が硬いからね。スピアーの毒針も通らないよ。スピアーだって、今すぐ、トランセルをどうこうするつもりはないさ。やつら、たぶん、トランセルをスピアーの巣に運んで保管しているよ」
「じゃあ、それを取り返せばいいのね。じっくり、ムシよけ作戦なんかを練ってね」
「じっくりしている暇はないかもしれない。トランセルは進化する。硬い殻から出てくる瞬間は、柔らかい。武器も技も持っていない。そのときはスピアーの毒針で、ひと刺しだ。スピアーだってそのときを待っているにちがいない」
いきなりサトシが虫取り少年の胸倉をつかんだ。

「どこなんだ。やつらの巣はどこにあるんだ」
「たぶん……」
虫取り少年は地図を取り出した。森の地図だ。
「森でいちばん大きな木の下だ。だれも怖くて近寄らない」
「オレは近寄る！」
サトシは地図をひったくって、目の前の道を走り出した。
その後ろ姿をあっけにとられて見送るカスミは、虫取り少年に聞いた。
「ったく、そそっかしいんだから……地図だけでわかるの？」
「たぶんわかるよ」
あっさりと虫取り少年は答えた。
「いちばん大きな木は、この道の先。森の出口にある」
「ちょっと、森の出口にあって、近寄りにくいわけ」
少し話がおかしい。出口なら人が集まるはずだ。
相変わらず、あっさりと虫取り少年は答えた。
「だから入りやすくて、出にくいんだよ。この森は、別名、出口のない森って言われてんだ」
「なるほど知らなかった……えっ？」
カスミは背筋に冷たいものを感じた。
カスミと虫取り少年のやりとりが、わかったのかどうか、緊張した表情のピカチュウが、

黙って、サトシのあとを追って走り出した。

※

夕闇が迫っていた。
森の中でもひときわ大きなその木は、だれの目にもすぐわかった。
サトシは、岩陰から、そっとようすをうかがった。
スピアーの姿は、見当たらない。別の獲物を探しにいったらしい。だが、そのかわり、木の枝一面に、何かがぶら下がっていた。数を数えられないほどの多さだ。
サトシは、ポケモン図鑑を向けてみた。
……さなぎポケモン、コクーン。けむしポケモン、ビードルが進化してスピアーになる途中のサナギ状態。自分ではほとんど動けない……
さなぎポケモンといえば、トランセルと同じだ。しかし、色はトランセルの緑ではなく黄色。ドクバチのサナギというより、セミの、幼虫のような形をしていた。
トランセルとはかなりちがう形だ。
……オレのトランセル……どこにいるんだ……
無数のコクーンの間を、サトシは、目で探した。
その目が、一カ所に釘付けになった。
黄色いコクーンに交じって、緑のトランセルが糸でぶら下がっていた。
その糸は、おそらくコクーンの進化前のけむしポケモン、ビードルの糸だ。

トランセルは、相変わらず眠そうな目で空を見つめ、何もかもあきらめきったような顔をしていた。コクーンから進化したスピアー用の餌にされるのは、だれが見たって、明らかだった。

サトシはつぶやいた。

「トランセル、見つけたぞ。きっと助けてやる」

そのときだった。

「見つけたよ。ぼうや！」

「きっとつかまえてやる」

ロケット団の二人の声だ。

振り返るサトシの前にムサシとコジロウ、そしてニャースがいた。

「なんで、こんなときに出てくるんだ」

「なんだかんだと聞かれたら」ムサシがお決まりのせりふを言った。

「なにも聞きたくないよ……静かにしてくれよ」

しかし、ロケット団が、決まり文句を始めるとどうやら止まらなくなるらしい。

「答えてあげるが世の情け」コジロウが続けた。

「静かにしないと、スピアーが戻ってくるよ」

だが、ロケット団はなにがあってもやめはしない。

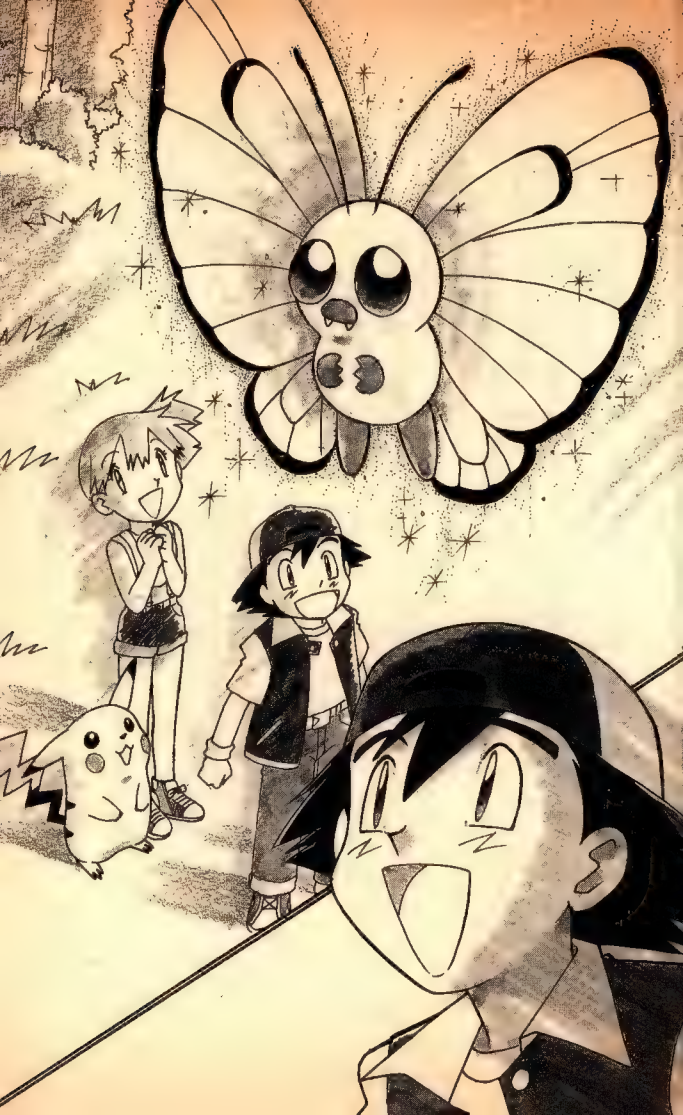
ここにそのせりふをまたまた書くと長くなるから、省略するが……「世界の破壊を防ぐため」から、「ニャーんてな」のニャースのせりふまでしっかり言い切ってから、ムサシが言

った。
「いつものせりふだけじゃ、芸がないわね」
「我々が、日々、工夫をしているところ、しかとシカトせず、見てもらおうか」
コジロウが、ラジコンを取り出した。
こういうときに出てくる悪役のラジコンは、だいたいなにかの発射装置だ。
「まさか、なにをする気だ？」サトシはあわてた。
「派手にいくのよ。登場は」ムサシが微笑んだ。
「ロケット団登場の花火は、百連発ニッポンイチ！」コジロウがスイッチを押した。
あたり一面、花火が爆発した。
ひと口に百連発花火というが、百連発の花火を実際に数えた人は少ない。しかし、その点だけいえば、ロケット団は正直だった。そのときの花火はたっぷり百発以上あったのである。
しかも、一度にまとめて爆発させたからたまらない。
木の枝のコクーンが、ひとつ残らず落ちた。
続いて夕空が無数の黒点で暗くなった。
星が出るにはまだ早すぎるその時間に点滅しているのは、あのスピアーの毒の針だ。
森中に散らばっていたスピアーが、怒りに燃えて襲いかかってきたのだ。
「ちょっと待ってよ。あれなによ」ムサシが言った。
「ハチのムサシは……」コジロウがわけのわからないことを言った。
「ニャいたたたた」スピアーに突かれたニャースが悲鳴をあげた。

二人と一匹は絶叫した。
「やなかんじ――――！」
これ以後、しばらくの間、ロケット団はサトシたちの前に姿を現さなかった。
登場したい気持ちはあった。だが、どくばちポケモン、スピアーに体中を刺された彼らは、毒で膨れ上がった顔や体を、人に見せるのが忍びなかったのだ。
なにより登場だけでも、きれいに決めたいロケット団……ムサシ・コジロウ・ニャースだった。
ロケット団がスピアーのえじきになっている間に、サトシは木から落ちたトランセルを抱き上げた。
走る。走る。森の出口が見える。ふと、横を見るとピカチュウが走っている。
「ピカチュウ、来てくれたのか？」
「ピカ……」
「え？」
ピカチュウは、それどころではないといった様子で、駆け抜けていく。
続いて、虫取り少年とカスミが追い抜いていく。
みんな、スピアーの大群に追いかけられているのだ。
サトシは、トランセルを抱いているぶん、遅くなる。
「それはないよ……」
サトシの背後……もうすぐスピアーの大群だ。

針が空気をこする音が、うなり続ける。
トランセルを放り出せば逃げられるかもしれない。
サトシが、一瞬それを考えなかったといえばウソになる。
しかし、サトシはできなかった。
サトシは、放り出そうとする自分の気持ちを振り払うように叫んだ。
「ぼくは二度とキミを置いてはいかない。いっしょにいたいから、いっしょに行きたいから！　オレはキミをゲットしたんだ！　トランセル、約束するよ！　トランセル、二度と、キミを放すもんか！」
スピアーに刺されようが、ハチの巣にされようが。殺されたって、トランセルを手放そうとは思わなかった。
そのときだった。走っているサトシの腕の中で変化が起こった。
トランセルの殻がみるみるはじけていく。
進化が始まった。
硬い殻がなくなっていく。
今がトランセルのいちばん、弱い時期だ……と、虫取り少年が言っていた。
……スピアーにはさわらせない……ひと針だって……
サトシは、トランセルを抱きしめて走った。
……負けるな。トランセル……オレも負けるもんか……
後ろで、スピアーの羽音がどんどん大きくなる。

……森の出口はもうすぐだ……がんばれ、サトシ……トランセル……
サトシは、自分につぶやき続けて走った。
出口といっても森の出口だ。扉があるわけでもない。飛んでいるスピアーが出てくるのを遠慮してくれるわけでもない。だが、サトシにはとりあえず出口だった。
……もう少し……もう少しだ！……
そのときだった。
腕の中がふわっと軽くなった。
「え？」
トランセルの重みがなくなったのだ。
サトシは目の前を見た。
トランセルはいなかった。
そのかわり、大きく羽根を広げたちょうちょポケモン、バタフリーがいた。
進化が終わった。キャタピーからトランセル……そしてバタフリー……今、バタフリーは、サトシの腕の中から飛んだ。
サトシが、森の出口から転がり出るのと同時だった。
飛び立ったバタフリーは、スピアーの群れに立ちふさがるように羽根をはばたいた。
羽根の動きはまるでチョウのようにゆるやかだった。だが、そのゆるやかな動きでは、信じられないほどのすさまじい風が巻き上がった。
ひと足先に、森の出口から飛び出した虫取り少年は、その風に気がついた。

そして、振り返って叫んだ。
「バタフリー……それも、今までの中でいちばん、カッコいい！」
カスミも振り返った。
「バタフリー？」
いちばんカッコいいかどうか、バタフリーにあまり詳しくないカスミは知らない。でも、きれいなことは確かだ。
「すてき！」
カスミは目を輝かした。ムシは嫌いでも、チョウチョは別らしい。しかも、そのときのバタフリーは、夕日を羽根に受け、輝いていた。
ピカチュウもうっとり見とれている。きのうの月夜、キャタピーと一緒に見たバタフリーに、今、あのキャタピー自身がなれたのだ。
「キミ！　得意技だ！」
虫取り少年がサトシに叫んだ。
「得意技？」サトシは口ごもった。
「バタフリーの得意技さ！」
虫取り少年がじれったそうに怒鳴る。
バタフリーの得意技……そういえば……聞いたことがある……なんだっけ？
カスミだってバタフリーの得意技は聞いたことがある。
有名な技だ。

カスミと、虫取り少年とサトシは同時に叫んだ。
「眠り粉！」
三人の声に答えるように、バタフリーの羽根から銀の粉がまき散らされた。
スピアーが落ちていく。落ちていく。銀の粉に眠りを誘われて落ちていく。
やがて、夕陽が落ちるとともに、森中が眠りに落ちたように、静かになった。
余計なお話だが、このとき、スピアーが眠らなければ、刺され続けていたロケット団が、生きていたかどうかもわからなかった。今後のロケット団の登場は永遠になかったかもしれないのだ。

※

「なんだか、ずいぶん手伝ってもらっちゃったな」
サトシは、虫取り少年に照れくさそうに頭をかいた。
「いいや……キミの力さ……」
虫取り少年は首を振った。
「え？」サトシは聞き直した。
「ポケモンは主人の言うことしか聞かない。あの、バタフリーの眠り粉は、キミがやらせたんだ。進化したばかりのバタフリーに、あの技を完璧に使わせることは難しいんだ」
「そうかあ？」サトシは照れた。
「あのバタフリーがトランセルのときに、キミがどんなに大事にしていたか……よくわかっ

たよ。でなけりゃ、キミの言うことをあんなによく聞くはずはない」
サトシは照れて照れて困ってしまった。だから、照れ隠しに言った。
「なかなか、言うことを聞かないポケモンもいるけどね……」
サトシは、そう言いながらちらっとピカチュウを見た。
ピカチュウはいきなり自分のことを言われて、ぷいっと横を向いた。
「ともかく、いい勉強をさせてもらったよ」
虫取り少年は手を出した。
「え？」
「さっき、やりそこなった握手」
「ああ」
二人はがっちり握手をした。
「ボクはもう少し、この森で修行をするよ。キミのむしポケモンよりもっとすごいのを見つけるかもしれないしね」虫取り少年は、サトシに微笑んだ。
「ムシにこだわるんだ」サトシが言った。
「ボクのあだなは虫取り少年だ」きっぱりと虫取り少年が言った。
「だよね……だよな……そうだよな」サトシは笑った。
はじめて会ったマサラタウン以外のトレーナー志望と、友だちになれたことがうれしかった。
別れを告げて、ふたたび森に消えていく虫取り少年の後ろ姿を見送りながら、サトシはと

「ちょっと、サトシ」
……おっと、もう一人、ポケモントレーナーらしいのがいた……
「いい気になるの早いわよ」
カスミが、腕組みしていばっている。
「なんだよ」サトシはつっけんどんに言い返した。
「バタフリーをどうする気？　ばたばたふりふり、あのまま飛ばしておく気」
バタフリーは、さっきから飛びっぱなしだ。
「あっ、そうだった」
サトシは、空のモンスターボールを取り出した。
バタフリーのため、いいモンスターボールを選んだつもりだったが、本当のところは、どれにしてもみんなおなじものだった。
「バタフリー、戻れ！」
バタフリーは、待ちかねたようにモンスターボールの中へ飛び込んだ。
「これでいいんだよ。これで……遅れたけど、バタフリーゲットだぜ……なんちゃって……うん」
サトシは、自分で自分にうなずいた。
「まったく、しょうがないんだから……」
カスミは悪口を言いながらも……ふと、思った。
……本当に好きなんだな……この子……ポケモンが……

悪い気分ではなかった。
「ピカチュウ」
ピカチュウもため息まじりで鳴いた。
やっぱり、嫌な気分ではなさそうだった。

※

森を抜けると、そこには新しい街が待っていた。
その名はニビシティ……ポケモンジムのある街だった。

※

マサラタウン……サトシの母、ハナコは、夜の十一時まで開いていたお店の看板を閉めた。
それまでの、お客さんの話題は、ポケモントレーナーを目指して旅立っていった子供のことが多かった。
「ママ、サトシくんもがんばっているんだろうね」
お客のひとりが言った。
「お客さんの息子さんだって、ポケモントレーナー志望でしょう」
ハナコが言った。
「そう、あんたの息子と同じ日に旅立った」
そのお客さんも十歳の男の子を持っていた。

そのお客さんも十歳の男の子を持っていた。
「うちの孫も旅立った」
お店の片隅で、オーキド博士がつぶやいた。
シゲルのことだ。
ハナコは明るく言った。
「ともかく、このマサラタウンからあの日旅立ったのは、四人。いいことあればいいね」
「ちがうね」
テーブルの端で、ハナコの自慢のオニオンスープをすすっていたおじさんが言った。
「うちの子は、旅立ったんじゃない」
店のみんなが、そのおじさんを見つめた。
「うちの子は家出したんだ。なんの理由だか、うちにいたくないんだそうだよ」
マサラタウンから、サトシが旅立ったその日、おなじように三人の少年が旅立った。
その子たちにはその子たちなりの理由があったのだろう。
ぱちん！
ハナコは、手をたたいた。
「ともかく、旅立った子供たちにいいことがありますように！　みんな。乾杯！　今日はわたしのおごりよ！」
普通、こういうときはお酒を出すのだが、ハナコはちがっていた。お客さんが酔っ払って帰って、家で奥さんとけんかでもされると困る。だから、ハナコが店じまいにお客さんに出

お客さんが帰り、ココアのカップを洗って、店の鍵をかけ、寝室に上がって、パジャマに着替えたハナコは、ベッドサイドで、留守番電話が点滅している電話に気がついた。
ハナコは留守ボタンを押してみる。
サトシの声が聞こえる。
「ママ……オレ、トキワの森を抜けた。次は、ニビシティ……ママ、きっと忙しいだろうから、これで電話切る。また、暇があったら電話で、連絡するよ」
ハナコは微笑んだ。
……暇があったら電話しなさい……わたしも暇があったら出るわ……
ハナコはうれしかった。
今日は、いい気持ちで眠れそうだった。
……でも、ニビシティか……
ハナコはつぶやいた。
ハナコの夫……つまりサトシの父も、ハナコの父、つまりサトシのグランパもそこから、消息が不明になっている。
「連絡……したかったらしてね……」
ハナコはつぶやいた。

※

ポケモントレーナーを目指す子供たちにはいろいろな子供がいる。

※

ポケモントレーナーを目指す子供たちにはいろいろな子供がいる。
それぞれがいろいろな理由でポケモントレーナーを目指している。
これから続くのは、そんな子供たちの出会いと別れと、そして不思議な生き物、ポケモンたちとの触れあいのお話しである。

ポケットモンスター　THE ANIMATION VOL．2に続く

※

注1）　知っていてもあまり役に立たないあとがき。

この作品は小説ですので、アニメとは違っているところも多々あります。

しかしながら、この作品におけるロケット団の哀感に満ちた捨てぜりふ「やなかんじ——」は、当初から予定されていたものではなく、アニメの声を入れる段階で、ロケット団を演じていた林原めぐみ、三木眞一郎、犬山犬子の三氏が、ロケット団の悲惨な成りゆきに、思わず絶叫したアドリブでした。

ロケット団としては、不本意なことでしょうが、あまりに真に迫っていたため、この小説にも、そのせりふを記録させていただきました。

ロケット団の今後の健闘を祈るとともに、心からお気の毒と思いつつ、ここに感謝の意を表します。

……作者

スーパークエスト文庫

ポケットモンスター THE ANIMATION VOL. 1

編集／
荒木洋平（新企画社）
中村公紀（小学館）

協力／吉川兆二

1997年11月1日　初版第1刷発行

定価はカバーに表示してあります。

著　者
首藤剛志
発行者
河井常吉
発行所
株式会社　小学館
〒101-01　東京都千代田区一ツ橋2-3-1
編集 03(3263)6940　販売 03(3230)5734
印刷所
共同印刷株式会社

ISBN4-09-440541-0

ISBN4-09-440541-0

C0193 ¥543E

定価：本体543円＋税

オレ、サトシ。夢は世界一のポケモントレーナーになること。ちょっとわがままだけど、かわいいピカチュウといっしょに、世界中のポケモンをゲットしてやるぜ！

ポケモンの秘密も満載の、壮大なストーリー。テレビアニメシリーズの構成作家による、待望のノベライズ！